

日向如く

尾田栄～郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三大瞳術。それは忍界最大のロマン。

そう。白眼と、白眼と、白眼だ。

異論がある奴はかかってこい。わが柔拳の錆びにしてやろう。

日向は木の葉にて最強。つまり世界最強。Q・E・D。

……え？転生先はネジですか？

ナルト……？俺たち、親友だろ？親友だよな……？

三流で三枚目な転生ネジが往くお友達忍法帖、ここに開幕！

※龍が如くの要素は含みません。

目次

第一話	うるせえ！日向は木の葉にて最強なんだよ！	1
第二話	柔拳浮気丸	9
第三話	お友達錬金術師	16
第四話	白眼は決して気持ち悪くない	24
第五話	正直、原作とか忘れてきてる	33
第六話	獣より団子	45
第七話	原作開始！俺はモブじゃねえ！	57
第八話	友達の友達は兄弟になる	76
第九話	ネジとイビキと試験官	88
第十話	迷惑ハローワーク	101
第十一話	けだし木の葉崩し崩し	115
第十二話	木の葉舞う	131
第十三話	葛藤上等	147

第一話 うるせえ！日向は木の葉にて最強なんだよ！

「どうやら俺は死んだらしい。」

「どこかで読んだ事ある風景……の中に、仙人みたいな爺さんが一人。」

「なんだよ、駄女神じゃないのかよ。」

「チエンジだチエンジ。話が違う。」

「俺が生前求めてたのは可愛い女神様であつて、見るからに神つて感じの古いぼれじゃない。」

「昔から女に縁がない人生を送ってきたし、死んだ後に女神様に会える権利くらいはあつてほしい物だ。」

「貴様に相手がいなかったのは自業自得だと思うが？」

「軽く青筋をたててる神様。」

「思ったより創作物は神の本質に近かつたらしい。」

「ちなみに転生とかできる感じですか？」

「少しは立場をわきまえろよ小僧。確かに儂の力が暴発し……」

「ナルトの世界が良いです」

「わかつた、もうそれでいい。はよう転生しろ。どっか行け」

「転生特典を要求する」

「なんじゃ。シスイの目か？塵遁か？もうなんでも良いぞ。次貴様が

言った物を特典としてすぐにでも向こうへ飛ばしてやる。そして二

度と迂闊に転生なぞやらん」

「白眼だ」

「……は？」

「白眼をくれ」

「正気か？……あれだぞ、さつきはケチってシスイの目とか言ったが、大筒木の血、全身柱間細胞、血継限界全部乗せとかもできるんじゃないぞ

？」

「何度も言わせるな。白眼だ」

「貴様、さてはナルト読んだ事ないな？白眼というのは写輪眼、輪廻眼と共に三大瞳術などと並び称されておきながら、幻術も忍術もさして強くはならず、ただちよつと周りが見えて視力が良いだけのハズレ瞳術の事じゃぞ？全方位が見えるとか言っておきながら死角がある景品表示法違反の眼じゃぞ？」

「俺は白眼が好きだ。何が好きかで自分を語れよ！」

「もうワンピースの世界行けよ」

「うるせえ行こう！」

「じゃから！」

「良いか？日向は木の葉にて最強！なんだよ……それ以外に言葉がいるか？」

「もはやバキの勢いすらあるが……まあ良かろう。どうやら儂は貴様を見くびっていた様じゃの」

老人が静かにそう言うと、同時にゆっくりと意識が遠のく。

転生か。住人として見るナルトの世界、楽しみだ。

とは言つたものの。

人生、転生してもなかなか上手くない物だ。

俺がナルト世界に来て初めて見た光景は、父の顔。

実物は初めて見る白眼に、額には卍。

ハズレを引いた。

俺の名はネジ。後に木の葉で最強とうたわれる天才児である。

神と俺との間に認識の違いがあった。

最強とは言つたけれども、最強に産まれたかつた訳じゃない。

日向は木の葉にて最強。そしてその日向始まって以来と言われる程の才能を持つ男、それがネジ。

たしかに名実ともに最強と呼ばれるに相応しい男ではある。しかし、作中での扱いは悲惨も悲惨。

初登場から嫌な奴感満載で、落ちこぼれ忍者のナルトに負け、サスケ奪還編ではそれまでブイブイ言わせてた白眼に弱点がある事が発覚し、終始ペインとは戦わず、最期は十尾が乱射した木片に体を穿たれ絶命。

なんて見事な転落人生。

おお神よ、嫌がらせが過ぎるのではないでしょうか。

日向ネジ生存ルート開拓の始まりである。

日向分家の朝は早い。

宗家の為、子供時代から柔拳の英才教育の日々である。

俺が三歳になった頃のタイミングで、掌を交互に打ち出す柔拳特有の練習が始まった。

柔拳修行の片手間で、日々チャクラコントロールの練習も欠かさない。

いくらネジが天才だからと言って中身の俺はチャクラなんて使ったこともない一般人。

日常的にチャクラを使う感覚を体に叩き込んでおかないと、いざという時に不安が残る。

まあ単純に手を使わない木登りとかやってみたかったのもある。

幸い名家だけあって修行場所には困らなかった。

水の上を走るの……まあクーラーの代わりになったと思えば良いか。

そうして三か月ほど経過したある日、俺はある事を思い出した。

「親父、死ぬやんけ！」

「……何の事だ？どうした、ネジよ」

思い出したのが柔拳の修行中だったのは誤算だった。

ざわめく日向分家の皆様。

おっと。ネタバレしてしまったかな？

「申し訳ありません。お父様。寝ておりました」

「私と拳を交わしながらか……!?!」

「はい。父様の洗練された拳に見とれ、あまりの美しさに安らぎを覚え、つい……」

「そ、そうか……」

ちよいと奇異の眼で見られたがまあ良いだろう。

俺あ天才なんだ。天才にちよつとアレな所はつきものだろう。

父親が死ぬ。これは由々しき事態だ。

なにがかつて言えば、俺が日向宗家との間に軋轢を生みたくないからだ。

昔から思っていた。日向ヒナタの性格が内気で引つ込み事案なのは闇落ち日向ネジの存在が大きいのではないかと。

俺はヒナタが好きだ。しかし、従兄との仲はギスギスで父親からは冷遇された末にあの性格が成り立ったと考えると、不憫でならないのだ。だから俺はヒナタの頼れる兄貴、日向ネジでありたいのだ。

しかしここで父ヒザシに死なれてしまうと、父親を殺されながらヒナタに接近する日向ネジが出来上がってしまう。

まずい。怪しすぎる。宗家に「警戒してください」と言ってるような物だ。

ヒザシの間接的な死因にあたる雲隠れが来るのはヒナタ様の3歳の誕生日の後。あと一年と少しといった所だ。

あの時木の葉は雲隠れと停戦交渉を結んだ後の筈。事態を大きくすると原作通り戦争回避の為に日向一族が差し出されかねない。

つまり、秘密裏に、そして殺さないように雲の忍を撃退する事が必要。

目立つ外傷もなく、忍術や体術を無効化……柔拳しかない。

少なくとも点穴を突く瞳術と技術が必要になる。あと一年で。

時間は限られている。思い立ったら即行動だ。

その日の修行を終えた後、俺は修行場へと向かった。

まずは簡単なチャクラコントロールの練習として木登り。もうすつかり慣れた。

水走りはやらない。というかあれ以降やりたくない。

簡単に瞑想をして、静かにチャクラを練りこむ。

練って溜めたチャクラを両目に集約させ、印。

「白眼」

ダメだ。両目に熱を感じるだけで視界に変化はない。
もう一度。

「白眼！」

やっぱりだめだ。もっとチャクラを練った方が良いのか？

「白眼！」「白眼！」「白眼！」「白眼！」「白眼！」「白眼！」

「白眼！」「白眼！」「白眼！」「白眼！」「白眼！」「白眼！」

白眼！」「白眼！」「白眼！」……。

あれから何時間経っただろう。

もうすっかり日が落ちて辺りを月が照らしている。

分家の他の者は俺が修行を邪魔されると怒るのを知って、もう迎えに来なくなつて久しい。

「白眼！……っ痛つてえ！」

何回も眼にチャクラを集中させるうち、俺の眼を通る経絡系は強く痛む様になっていた。

なにもしていなくても焦げ付く様な痛みが顔中を襲い、特にチャクラを流すと経絡系を電気で焼き切られていると錯覚するほどだ。

しかし、この痛みは俺にある事を気づかせた。

白眼を開眼させたとき、術者の目の周りには必ず経絡系が浮かび上がっていた。

「そうだ。痛む場所に沿つてチャクラを流せば良いんだ……！」

今度こそ。いや体力的に見ても次が最後だ。

もう一度、瞑想し、チャクラを練る。経絡系が痛む。痛みの流れを

一本一本確かめるように精神を集中させて、集中が最大に高まった時、印！

「白眼！」

視界が開けていく。前方、周囲から後頭部へと広がる視界。チャクラの点が見える。虫だ、秋虫が鳴いている。もっと遠くの屋敷では、分家の人間が皆床についている。一人だけ、父様だけは寝ずに俺をまっていた。

二人目の父親ではあるが、それでも父親なんだよな。

帰ろう。家へ。

こうして俺は、白眼を手に入れた。

「柔拳の修行を始めて三か月。柔拳の肝である白眼を独学で開眼するとは！ネジ、お前は天才だ！」

翌日、朝起きてみれば家中がお祭り状態だった。

三食お赤飯が炊かれそうな勢い。

ヒザシ、お前そんな子供思いだったのか……。確かに描写はあつたけども、ここまでだったとは。

いや？それとも俺が天才なのか？

これは胸張つちやつて良いのか？

なんてな、油断は禁物。これではまだ雲の忍には勝てない。

天才伝説が立つとしても、それはもつと先、堅実に生きた結果の方が箔がある。

「お父様の教えの賜物です」

「そういつてくれるか！ネジよ、ああネジよ！」

……本当にこんなキャラだっけ？

それともなんだろう、俺が天才過ぎて原作から軌道がそれていつているのか？

だとすればよい兆候だ。俺が原作通りのミスター名前負けにならずに済むかもしれない。

その日から俺の新しい日常が始まった。

午前中はヒザシと一緒に柔拳の修行。

いつもの内容に、実際にチャクラを流す柔拳の訓練が加わった。

昼は休んで、午後からは白眼の修行。

とにかく長時間、高精度な視界を保てるようになりたい。

そして気づいたのだが、白眼は使えば使うほど瞳術が強まる物らしい。

白眼の修行として、自身の背後にいる鳥の個体数を数えるネジお決まりの奴をやっているのだが、最初は5分も続かなかった白眼が、日に日に5分、10分と継続できるようになっていき、より遠くまで視野が広がってより多くの鳥を見つけられるようになっていくのを感じる。

あれからまた2か月。ヒナタ様が2歳の誕生日を迎えられる頃には、俺はもう二時間以上白眼を継続できるようになっていた。

柔拳の修行中のほとんどの間は白眼を継続する事。ヒザシからはそんな注文を受けた。

白眼を開いている間は目元にチャクラが流れっぱなしなので、四肢にチャクラを流すだけでかなり精神力と体力を消費する。

このころになると基本的にチャクラを伴った突きを主体として修行メニューが組まれていたので、午前中だけでほとんど全力を使い果たしてしまい、そのまま倒れこむように入眠という事がよくあった。それでもなんと3か月もたてば、午後の修行を再開できるくらいになった。

期限まで残り9か月。

9か月で柔拳を形にしないと、ヒザシは死ぬ。

最後に考え付いた修行は、ただ走るといふ物だった。

白眼を維持したまま、木登りの要領で里中の構造物を全力疾走。体力が尽きるまで、である。

精神力と体力を極限まで追い詰め、精神エネルギーと身体エネルギー両方の底上げを行う。

今できる精一杯を形にした修行方法。これでダメなら、もう後がない。

「白眼！」

俺は走り出した。

「うおあつ！なんだあいつは！」

「目がやばいぞ！」

「ぎゃあああ！バケモノ！」

「早い！早いぞ！忍か？」

「いや、子供の様に見えたが……」

なんだろう。ひとたび街に出ると、必ず悲鳴が聞こえる。

なんでも、白目をむいた顔がバキバキのちっちゃい何かが町中を走り回っているらしい。

いやー、なんか怖そうっすね。うん。幻術ですかね。

午前中には柔拳、午後には百鬼夜行な修行を、9か月。
そしてついに、雲隠れの里との停戦の日、ヒナタ様の3歳の誕生日
がやってきた。

第二話 柔拳浮気丸

その時、木の葉の里は熱狂に包まれていた。長きにわたる雷の国との戦争の終結。講和条約の締結。

そして雷の国の使節団が木の葉の里へ入国。歓迎のパレードが開かれていた。

うん、よくある父親の死亡フラグだ。

そして、9か月にもわたって里の住人を恐怖に陥れた、子供の皮を被った妖怪が忽然と姿を消したこともまた住人を喜ばせた。

ナルトの世界には妖怪がいたらしい。いやあ、転生してみなければ分からないこともある。

俺は早朝に分家を抜け出し、二代目様の火影岩の上に座るという大それた目線で使節団の到着を見ていた。

使節団。その先頭に立って入ってきた偉そうな男がおそらくヒナタ様誘拐の主犯格。

あいつが来るかは判らんが、マークしておいて損はないだろう。ふと、そいつと目が合いそうになった気がしてその場を後にした。

「ふむ……？」

雷の国使節団。それをまとめる名もなき忍は不思議そうに火影岩を見上げた。

こちらを見る人の気配を感じたのだ。

「いかなさいましたかの？」

使節団に対し、温厚そうな微笑を浮かべ応対するのは三代目火影。四代目の死後、再び里を収める任についた老人である。

「いいや。里の護衛が多く感じましてな。それほど丁重に扱われるとは、こちらとしても喜ばしい限りです」

この発言は、彼がこれから行う日向誘拐作戦の動向を心配しての事だったが、悟られぬように細心の注意をはらった抑揚を付け加えられた発言であった。

「はっはっは。やはり里の重要な客人を迎え入れるのですからな」

その意向を知ってか知らずか、三代目は朗らかに返すのみである。

狸だとすれば、上手い。これからの作戦に不安を残しつつ、雲の使節団は入国したのだった。

「これ、ネジ。どこへ行っていた。今日が一族にとってどれだけ大切な日か解っておろうな？」

「申し訳ありません、お父様。祭り、という物を見てみたかったのです」

「まあ、しかたあるまい……身支度を整えよ。出発まで時間がない」

今日は日向にとつても大切な日。宗家のご息女、日向ヒナタ様の3歳の誕生日である。

俺は今日初めてヒナタ様に会い、そして籠の鳥となる。

それは分家と宗家、二つの家の関係性を明らかにするという意味でも重要な日だった。

遠くでパレードの音がする中、俺は宗家の門の前で、初めてヒナタ様を見た。

なんとというか、やっぱり可愛い。

これまで一族の年の離れた女しか見てこなかった俺だけに、年の近い女の子ってだけで可愛く感じる。

ちなみに俺はロリコンじゃない。俺今4歳だぜ？

ああ、そうだ。あれ言つとかないと。

ヒザシの服の袖をちよいと引つ張る。

「結構可愛い子ですね、父様」

よし、言えた。

原作ネジと俺の共通見解。ヒナタは可愛い。

何やらヒザシが悲し気な顔してるが、まあ良いだろう。

宗家のお座敷に上げてもらつて、一度ヒナタ様と手合わせすることになった。

横にはヒアシ様とヒザシ。目の前にはヒザシでなく可愛い従妹。

なんともやり難い。

「はじめー」

ヒザシ様の号令がかかる。

……。

.....
.....

「貴様ら、ふざけているのか?」
ちよいとおこなヒアシ様。

それもその筈。試合開始の号令があつてからしばらく、全くの膠着状態である。

だって、ヒナタ様仕掛けてこないんだもん。

なんか、眼をしどろもどろに動かして、指一つ動かさない。

向こうが仕掛けてこないのだ。

ヒナタ様に押していくのは逆効果。原作を読んでわかった知恵だ。

「ヒナター!」

「は、はい!」

ヒアシ様の声にびくつと反応して、やっと攻撃をしかけるヒナタ様。

軽く受け流して、反撃。……ってこれどうすればいいんだ?

胸はダメ。腹はダメージが大きい。顔は論外。

俺はこんな所で嫌われたくない。ヒナタ様と仲良くするルートで行くんだ。

反撃の為に出した手を引っ込める訳にもいかないし、ええい左肩!

「がふっ!」

ぶっ飛ぶヒナタ様。

「けほっ!」

壁にぶつかるヒナタ様。

「ふっう……」

意識を失うヒナタ様。

「……」

「……あれ、僕またなんかやっちゃいました?」

「ネジィィィィあああああああ!!!」

豆知識、娘を心配した親の絶叫は凄まじい。今日知った。

やっちゃったのは俺でした。

「ヒザシ!?何故ネジは白眼を使いこなせている!?チャクラコントロー

ルができています!?八卦空掌の如くチャクラが出ている!」

真面目にやってきたからですかねえ。

あかん。真面目にやりすぎた。

「いや、どうしてもチャクラを掌から出す制御が苦手なのか、あの威力になつてしまいました……」

「ネジは黙っている！なぜ白眼を前提としたチャクラを使った柔拳にまで修行が飛んでいるのだ!?ネジはまだ4歳だと聞いていたが!」

「ネジは日向始まって以来の天才なのかもしれない……」

「そんな理由で娘が吹き飛んでたまるか!」

娘を案じる親の心配は深いようで、俺はもはや安全の為と言われそうな剣幕で卍の呪印を施されたのだった。

あとで知つたのだが、ヒナタ様との手合せにおいて俺が白眼やチャクラを使う事はヒザシにしても完全に予想外だったらしい。

つまりは俺がいつものノリで軽くやったら完全にフルスイングで、肩を壊したのはヒナタ様と。

何を言ってるかわからねーと思うが、そういうのは本人が最もわかりたくない物だ。

無事事故は起こって、その夜。

原作にはヒナタ様の誕生日と日向への襲撃の時間差がどれほどの物かは書いていなかったはずだが、幸いなことにヒナタ様は意識を失つておいでなので、それはそれは嚴重に看病されている。俺が面会できないほどに。俺がそんなに怖いのか、ヒアシよ。

ということ、宗家の屋根に陣取ってる分家の厄介者がこちらとなります。

敵を感知する為に白眼を使っているが、夜通し持つわけもないので特に周りが暗くなった時に使用を制限している。

「と……さっそくお出ましか」

8時の方向。おそらくは上忍クラスだろう。

しかし隠密行動が敵の忍術を制限してくれる。それなら白眼を持つこちらが五分まで持つていける。

顔には朝お祭りを買ったお面。俺が何者かは判らない。

多分。

足取りを見るに、相手はこつちが気づいてないと思っっている。イージーウインのチャンスは一回。相手の不意打ちに柔拳を合わせる。

雲流・表切り！

そんな声が聞こえてきそうな無駄のない太刀筋。

「八卦空掌ー」

屋根に向けた全力の八卦空掌。瓦は凄まじい速度で忍へ飛ぶ。

「!!」

忍びは刀を捨て、空中で反転。無数の瓦は刀を粉々にした。

「八卦空掌連掌」

追撃の八卦空連掌。この朝孔雀を元にした技は、数多に分岐し放散する八卦空掌。

さつきよりも的が広がった。

「ふっー」

やはり身を翻すが、十発はあたりだ。

バランスを崩した相手の着地を狙って決めに行く。

「残念だったな！」

忍の手に光ったのはもう一本の刀。

「雲流・表切り！」

その刃は確かに俺を捉えた。が。

ぼふん。

「残念だったな」

忍は背後から聞こえた敵対者の声にぎよっとする。それ以上に目の前で消えたさつきの者は何だったのか判別もついていない様子だ。

「八卦掌ー」

こんどは外さなかった。

ほどなく、力なく倒れる忍。

内臓疲労はどんな忍に対しても有効。当然と言えば当然か。

「仮面の少年……お前は日向ではないのか？」

「なぜそう思う？」

答えはしない。

「この内臓を締め付けるような痛み……これは噂に聞く日向の柔拳だろう」

「否。これは南斗八卦掌という」

「……なんだ、それは」

「内部から全てを破壊するのが北斗なら、外部から剛拳主体で経絡系に負担をかけるのが南斗だ。北斗と南斗は表裏一体なのだ……」

「日向の拳はいずこへ」

まあ方便だ。あの期間で点穴まで見切る事が出来なかった俺は、点穴をねらうのではなくチャクラを多段ヒットさせる事で内臓への負担を優先した柔拳を編み出した。

またより多くの拳をあてるため、拳技を打ち込む隙を作る為アカデミーへと潜入し影分身の術を習得した。結果、今の木の葉の警備は厳重になった。

そして南斗や影分身の習得に時間を費やした分、件の妖怪は出なくなったというわけだ。

「外傷もなく、俺が誰かも判らん。雲の忍、お前と俺が戦ったという証拠はない。これ以上騒ぎを起こせば外交問題になりうる……あとは解るな？」

「ああ。ここまで消耗していて、まだやろうとは思わん。お前も我々の目的が解っている筈だ。もう二度と日向に手は出さん」

「もちろんだ。俺の眼の白いうちはな」

「……」

ほどなくして、雲の使節団は去っていった。

この事件が表面化しなかった裏に、三代目の尽力があったかは謎のままである。

ちなみにこの2日後の昼にヒナタ様は目覚められた。

「ヒナタ様？大丈夫でしたか？ひどくうなされていたような……なにか怖い夢でも見られたのですか？」

「……」

「あの、その目止めてもらえますか？」

余談だが、ヒナタ様はこの時初めて白眼を開眼なさった。

第三話 お友達錬金術師

日向分家の朝は早い。

「影分身の術！」

早朝。他の皆が起き出す前に影分身。

ボン！と音。白煙が立つ。

まもなくもう一人の俺ができあがった。

目の前に自分が居るのは不思議な感覚だな。

鏡ともちよつと違う感じ。

影分身に少し興味が湧いた。軽く実験してみよう。

まず手始めに分身の頬をつねってみる。

「痛い」

言ったのは分身。

細かな感覚のフィードバックはないのか。

次は左手を挙げろと念じてみる。

「……？」

分身はあまりピンときてない様子。

こつちの意志で動いてる訳じゃないのか。

なるほど。

おもむろに柔拳をくらわしてみる。

「くらえ柔拳！」

「ちよーおい待てなんだなんだ！」

避けられた。分身の癖に生意気！

ピリつく空気。二人の俺の視線が交錯する。

一拍おいて分身、「ホワイイ？」とジエスチャー。

俺、アンサー。

「出たな妖怪ドツペルゲンガー！退治してやる！」

「お前が出したんだだろうが！」

俺だった。

「だいたい分身を化け物扱いするなよ。俺はお前だぞ」
俺だった。

しかし俺は食い下がる。

「キャラ付けだよ。キャラ付け。個人が二人もいたら混乱するだろう？だから俺が奇才で、お前が奇」

「もはや暴言だろ、奇キャラ。せめて鬼才と鬼にしろ」

「ぜいたくな子だね！」

「働きたくないなあその職場」

「お前の名前はネジ乙だ！」

「甲乙でコンビにするな。俺だけ罰ゲームになる」

「ナット！」

「セツトだけでも。凸凹コンビの様だけでも。大体俺達だと凸凹コンビにならんだろ。凸凸だよ、ゴテゴテしてるよ」

「お前はボコボコだけどな」

「お前のせいだよ！」

一人芝居（？）はともかく本題。

この前、雲の忍との交戦で相手の点穴を見切る事ができなかった俺は、妥協案として影分身に頼った。

が、俺は日向。

柔拳を極めずして最強とは言えないものだ。

ネジは原作だと中忍試験以前から点穴を見切っていた。

それまでのネジの成長物語がどんな物だったか知らないが、おそらく俺の方が順調だろう。

ただし、その後のネジを考えるにそれは絶対条件。

ネジ生存ルート、つらいぜ。

でもそんなつらさも今日からは半分！

俺は一人じゃないからね！

いや、本当に半分なのだ。

俺はこれまで、午前中は父ヒザシのもと柔拳の修行を行い、午後は木の葉を駆ける白眼の妖精になるという日々をおくっていた。

しかし影分身がある今、俺は父の教えを請いながらシャバに繰り出す事が可能である。

そうして貯まった経験値は、術を解いた瞬間本体に蓄積されるの

だ。

つまり修行の時間が倍！効率も倍！経験値も倍！もちろん住民への迷惑も倍！

伸び率も倍くらいにならないかなあ……？

「まあつまり、俺2号はさっさとどっか行けって話だろ？」

本体の話があまりに長くなりそうだったので、分身体にあたる俺2号は話を切り上げて行く事にした。

「自分で勝手に呼び名を変えたな?!名前はお前を作った人からの一番最初で一番大切なプレゼントなんだぞ！」

「毒親じゃん」

「行けば!?!私なんてどうでも良くなったんでしょ！」

「そうだな。分身がお前の方だったらぶん殴ってる」

「いってらー」

「急に冷めるじゃん。じゃあな」

切り替えの早さだけは一流なんだよな、俺。まあ2号もだが。

そうそう。散々俺を化け物呼ばわりしていた町人の皆様だが、9か月も経てば里の心霊ゴシップ界限での俺の人気も落ち着いた。

じゃあ今ではどう反応されるのか、飽きられた怪談の末路をお見せしよう。

まず町人A。

「朝からか。珍しいな……初めてじゃないか？」

次、町人B。

「チツ。まったく何なんだあれは。いいかげん目障りだぜ」

続けて町人C。

「そんなこと言ったら崇られるわよ。なんでも、あれはあの子供の生き霊なんですって」

再度登場、町人B。

「なに、あのガキか!……まったく忌々しいぜ、あの化け物……」
今ではこんな有様である。

落ち着いたというか、飽きられた？

毎日見るといっただけで結構な扱いの差だ。

崇っちやおうかな。

全員に柔拳を叩き込むとかかな。

というか今とんでもない流言を聞いた気がする。

化け物、ガキ……どうしよう、嫌な予感が……。

と、思っていたら。

いた。

家を出てから数時間。

冬の昼頃特有の軽い空気の中、そいつの居る場所だけは様子が違っていた。

男の子が暇そうにブランコにまたがっている。

それだけ。たったそれだけの光景なのに、そいつの周囲には言葉以上に感情を感じさせる邪気が漂っていた。

憎悪、羨望、孤独感……とにかく、俺の本能がやばいと告げているこの男の子こそナルトだった。

どうしよっかなあ……？

原作ネジの死因は、ナルトの仲間じゃなかった事。

つまり俺の人生において、ナルトの友人としての地位は必要不可欠である。

でもなんだろう。

心なしか恨みを買っている気がする。

いや、腐っててもしょうがない。

一か八か、やってみるか。

ケーススタデイ、落ちこぼれ君と友達になる。

「どうわああああ!!」

「!」

元いた家の屋根からブランコの前へ勢いよく落下する。

ポイントは受け身を取らない事。

バカっぽく、極めて無能になりきる。

「失敗した！落ちてしまった！俺はダメダメだアアア」

そして同族アピール。敵意がないことも強調する。

「……………」

地面でバタバタする俺をじっと見つめるナルト。

「うおおおおー！またやっちゃまった！俺はなんて上手くできない奴なんだああうおうおうおいおい………」

……………どうだ!?

「……………」

俺の様子に得心した風のナルト。

「ああー!!お前つてばそこら中走り回ってる変態!」
恨んではないらしい。

色々言いたい事もあるけどまあ及第。

「そういうお前は?」

「俺つてばナルト。うずまきナルトだつてばよ!」

「ナルトか……良い名前だな」

意味は無い。なんとなく好感度があがるかなってだけ。

「?」

なるほど。思ったより頭良いなこいつ。

その時、ナルトの注意が俺から別の方へ向いた。

咄嗟に俺もその方を見る。

そこには遠目から俺達の事を話している人だけりがあった。

話の内容はだいたい以下の通り。

「ああーおい見ろ、化け物とガキが一緒に居るぞ………」

「じゃああの妖怪は……ただの子供?子供だよなあれ」

「なんだよ、生き霊つてのはガセかよ」

「あの二人はどういう関係なのかしら?」

俺としては見慣れた光景だが、ナルトにとっては何か感じる物があつたらしい。

ナルトはひよいとブランコから飛び降りると、人混みの方へ数歩駆けていき、言った。

「へへーん!わっかかりやすい嘘に騙されてやんの!お前らさ!お前らさ!バーカ!」

笑うナルト。

人だかりは各々バツが悪そうに散っていった。
作品が始まる前から主人公は主人公なのだ。
なんとというか、俺とは格が違った。

「なあナルト。腹が空かないか？」

この言葉は本心からの言葉だ。

生きる為にナルトを絆しに来てみれば、絆されたのは俺の方だったらしい。

「腹は空いたけど……なに？」

「勘が悪いな。メシだよメシ。一緒に食いに行こうぜ。俺達、友達だろ？」

「友達……！」

ナルトは目を輝かせた。

「俺さ！俺さ！ラーメン好き！お湯注いでからの三分間は嫌いだけど、めっちゃうまいカップラーメンがあるんだ！」

「一楽じゃないのか？」

「いちらくう？なに、それ」

「一楽はまだ知らないのか。よし、ついてこい。どんなカップ麺も目じゃない、この里で最高のラーメンを食わしてやる」

「最高のラーメン!?!」

「ああ」

よだれを垂らしながらついてくるナルト。

まだ見ぬラーメンへの期待でいっぱいの様だ。

「そーいやさ、お前ってばなんていうの？」

「日向ネジだ、ネジで良い」

「ネジ！俺ってばお前のこと好きだってばよー！」

「そーいって貰えると助かるよ」

「へへへ……！最高のラーメンかあ……！」

9 か月間の木の葉一周弾丸ツアーは、俺にこの里の地理を叩き込んだ。
だ。

今の俺は火影よりも里の地理に詳しい自身がある。

ここから一楽なんて余裕だぜ。

しばらく歩いて行くとおなじみの「ラーメン一楽」という暖簾が見えてきた。

店に入ると、優しげなおつちゃんが毎度！と一言。

「あ、でも俺、あんましお金持ってない……」

「いいよ、奢るし」

「えーと。それじゃ俺は……うーんと……」

注文を決めかねているナルトを軽く止める。

「オススメがあるんだ」

「うーん……じゃあそれでー！」

まあ俺は初めて来たんだけどね。

気付いているのは頭を掻いてるおつちゃんくらい。

たしかナルトの味覚は……。

「おつちゃん。豚骨味噌チャーシュー麺、二つ」

「あいよー」

調理しだすおつちゃんをわくわく顔で眺めるナルト。

まあそうか。

忌み子であるナルトを食わせてくれるラーメン店なんて、今の時期だとここしかない。

だからこそナルトはラーメン一楽の熱烈なファンに成長するし、ラーメンが人の手で作られるのを見るのは初めてだろう。

「はいー豚骨味噌チャーシュー麺二丁ー！」

ナルトと俺の前に丼が並べられる。

「うおおお……！」

「うおおお……！」

ラーメンにわか俺でもわかる。

これは、旨い……！

こうして俺はナルトと友達になった。

ファーストコンタクトは大成功。

俺はナルトの人生で最初の友人になったのだ。

この間、俺の本体はヒナタ様と会っていたのだが、それはまた別の
お話。

第四話 白眼は決して気持ち悪くない

「私！強くなりたいですー！」

それは唐突に告げられた。

不意打ち。まさに不意打ちだった。

どうしてこうなったかと言えば思い当たる節がないわけでもない。でも、いやどうしてと思わずにはいられない。

少なくとも俺は、今朝の段階ですらこのフラグを予期できていなかったのだ。

今朝。

分身と別れ、朝の身支度を整え、簡単な朝食をとっていた時に来客があった。

まだ一般的な朝食の時間に差し掛かってもない時分に妙を感じたが、名家の客人がたかが四歳の子供に用があるとも思えず、朝食を優先した。

しかしそこにやってきたヒザシは、客人は俺に用があるのだと言う。

後の修業に不都合だからと修行着のまま食事をしていた俺だが、客人に修行着のまま出るのが適当でないと思う礼節は心得ていた。

一応俺も名家（分家）の跡取りだからね。さすがにそれくらいは気にしたい。

しかしヒザシは首を横に振った。その方が逆に都合が良いというのだ。

話が見えぬまま俺は客室に連れていかれる——と思いきや、父に案内されたのはいつもの修行場だった。

そこに品よく座っていた相手が開口一番言い放った言葉がさつき物の物だ。

前置が長くなったが、この時の俺の不可思議な状況は全て次の言葉に集約される。

「どうしちゃったんですか、ヒナタ様……？」

そう。久しぶりというかご無沙汰というか、ぶっ飛ばして寝込ませ

たぶりのヒナタ様。

彼女はバトル漫画的バイタリティと共に再登場してきたのだ。

「どうしちゃった、と言われれば……そうですね、このままではいけない様な気がして」

「まじかよ」

「はい？いえ、あの……私はネジさんに一撃でやられました。肩の傷は癒えましたが、今回の事は日向本家の名に大きな傷をつけた気がするのです。

いえ、それを責める気はありません。

私はこれまで、対面の人を傷つける事を気にして試合をおろそかにしては、お父様に叱られていました。

しかし気付いたのです。私は来年、姉になります。このまま、私が弱いまましていると、その重荷を妹にまで負わせる事にもなりかねない。それではこれから生まれてくる妹に申し訳がたちません。

だから私は父様ではなく、私の眼を覚ましてくれたネジさん自身に教えを乞いたいのです。

私に、なぜそんなに強くなれたのか教えて下さい。お願いです」

言い終わると、ヒナタ様は綺麗に座礼なされた。

……頭でも打ちました？

え、3歳だよね？

バックボーンが成長しすぎだろ、誰だよ。怖いよ。

知らん。俺知らんぞこんな武士みたいなヒナタ様。

ていうか、頭下げられてるんだけど。

断る選択肢、もしかして無い？

「ちよつと待つてください。話が急すぎます。こう……ヒアシ様ではダメなのでしょうか？自分には宗家の方の修業がどこまで進んでいるかも分かりませんし。何より、荷が重いです」

「お父様の許可はとってきました」

「うっそお」

「本当です。昨日お父様に『すぐにでもネジさんの様に強くなる方法はないか』と聞いた所、『無理だ。お前にはまだ早い……』というより、

儂にもあれの成長速度は謎だ。お前がそれで納得できないというのであれば、さしあたって明日あたりあれの修業を見に行け。儂の話に納得できたなら帰って来てても良いぞ』と言われました」

「許可取ってないよね？」

「見て盗め、と受け取りました」

「受け取っちゃったかー」

闇落ち前のネジに会って気弱になるくせに、俺がのしたらこうなるのかよ。

でもヒアシ様、ナイスファインプレーだ。

俺がこのバイタリティ溢れるsssレアヒナタ様の眼を覚まさせてやるぜ。

「それでしたらヒナタ様、まずはヒアシ様のお言葉通り、俺の修業を見てみてください」

数分後、修行場には俺とヒザシ、そしてヒナタ様を含む大勢の見物人が集まった。

見物人はヒナタ様以外、全員分家の門下生。

門下生が一堂に会するその異様な光景に、ヒナタ様も多少面食らった様子である。

「ネジ、そろそろ良いか？」

ヒザシの言葉に向き直る。

これから始まるのは、ヒザシと俺の対一の手合わせ。準備運動などはない。実戦に準備などないからだ。

「はいー」

「よし。では行くぞー」

瞬間、重なる掌底。

そこからの攻防に、ヒナタは思わず絶句した。

周囲の門下生たちも食い入るよう見つめている。見て盗め、と言われているからだ。

掌底。チャクラで受け止め、反撃。今度は受け流す。

流されては流す。はじいては押す。引いては打つ。

一手一手が次の手を決め、それが延々と繰り返される。

その数多の手の流れが、まるで二人が舞を踊っているかの如く現出される。

こんな事は実戦では起こりえない。

地形、忍具、忍術。

そういった不純物が入り混じる戦場では、拳技など喧嘩殺法に等しい。

だからこの現象は、ある程度拳法を極めた二人が、平地、体術のみを条件に戦う事で発生する。

一族の門下生の中でこれができるのは、上忍を除き俺一人。武道ならぬ舞踏。俺の柔拳はその域にまで達していたのだ。

「ふぐっ！」

一時間後。姿勢を崩した俺を咎めた鋭い掌底に、俺は倒れた。

チャクラを乗せた柔拳での試合は内臓にも負担がかかる。しばらくはまともに動けない。

「まだまだ踏み込みが甘いな、ネジよ。だから次第に呼吸が合わず、隙が大きくなっていく」

父の助言を聞き、門下生たちは一礼して退出していった。

これからは各々、俺の拳と父の言葉を反芻して煮詰めていく時間だ。

体の疲労に唸っているとヒナタ様が寄ってきた。

どうでしょうか、ヒナタ様。

俺の実力はヒザシに劣る。

宗家であるヒアシ様に教えを乞うことが一番の近道。

気づいてもらえましたか？

「……すごかったですネジさん！私、やっぱりあなたと修行をしてもつと強くなりたいたい！」

そうですか、もう知らん。

俺の知ってるヒナタ様はもうこの世にはいない。

解釈違いだ、こんなに変わるなんて……。

その夜、俺は頭を抱えていた。

隣には一族に混ざって雑魚寝するヒナタ様。

ヒナタ様は「納得するまで帰るなど言われた」と意地を張って分家の家へ泊ると言い出した。あまり急だから部屋も用意しておらず、ヒアシ様とヒザシの間で半ば喧嘩じみた言い合いの結果、ヒナタ様の意志を尊重するという事で決着した。

もちろん喧嘩の争点になったのは俺の存在。

ヒアシ様の中で俺はなかなかの危険人物らしい。

そんなに俺が怖いか、ヒアシよ。

それよりも俺を悩ませるのは……ナルト。

分身が今日一緒にラーメンを食べてきたこの作品の主人公である。なに楽しんじゃってんの？こっちはバリバリ修行中だったよ？

とにかく、熱血ヒナタ様とナルト。

この二人の要人との出会いがバツテイニングしたのはなかなかバツドでハード。

午前中は自分の修行、午後はヒナタ様の修業を行わなければならない。今、同時に分身体がナルトと会うのは至難の業である。

しかし、両方と接点を持たなければ俺の将来に不安が残るのは確か。

「ぐぐ……俺は、いったい俺はどっちの裏切り者になれば良いんだあ……？」

悩む俺だった。

翌朝。俺はナルトの家の戸を叩いた。

「んん……誰だつてばよ……？」

今起きたばかりのナルト。

寝巻に眼をこすりながら出てきた。

「あ！お前つてばネジ！」

「よっ。ナルト。遊びに行こうぜ」

目を輝かせるナルト。

音をたてて扉を閉じると、一分もしないうちに出てきた。

やっぱり、どっちを取るべきかは明白だったな。

「なあなあ、どこ行くんだってばよ?」

「うーん。ちよつと近所の公園まで、かな?」

ナルトの家を出て、商店街へ抜ける。

生花、食品、焼き肉、駄菓子屋、色々な店が並ぶ中、誰一人として俺たちを客として見ていない。

厄介者が来たぞと言わんばかりの白い目。なかなか良い白眼をしている。

お前も日向にならないか?

ナルトは少々俯き、俺の三步後をついてくる。

「なあナルト、腹が空いたな。なんか買っていこう」

「ネジ……!?!」

俺は近くにあつた八百屋に向かう。

目が合ったのは店番のおっちゃん。

「おい!お前何してる!?!」

案の定、おっちゃんは声を荒らげた。

何もしていないというのにカンカンだ。

「何って……ちよつと小腹が空いたもんで、何か買おうかと」

「あーあー。迷惑だ。この疫病神が!これ持っててさっさと出てけ!」

投げつけられたリンゴを手で受け止める。

「まいどー!」

「フン!さっさとどっかに行っちまえー!」

「へいへい」

リンゴを齧る。

うまいのに勿体ない。

ナルトはやはり下を向いたまま、三步後をついてくる。

商店街を越えてから公園に着くまで、ずつとナルトは黙っていた。公園には先客がいた。

この近所の子供たちは毎朝、今ぐらいの時間にここで集まって遊んでいる。

「なんだよ、先客か」

俺の言葉に、談笑していた子供たちは一斉にこちらを向く。

なかには怪訝そうな顔もちらほら。

「なんだよ、ここは俺達の場所だぞ」

最初に口を開いたのはグループのボス格。

周りの取り巻きも続く。

「そうだそうだ！パパが言ってたぞ、お前らとは口をきくなつて。ばけものだからって！」

「どっか行け！」

「ばけもの！あっち行け！」

石でも投げてきそうな勢いだな。

ちらりとナルトを見ると、ふるふると震えている。

今にも途切れそうな小さな声でナルトは言った。

「ネジ……もう良い、行こうつてばよ……」

「嫌だ」

「ネジ……!?!」

「おいクソガキ。化け物だと？化け物見せてやろうかこら！ああん!?!」

ヤンキーだったかもしれない。

ツカツカ近づく俺にクソガキも黙ってはいない。

「なんだよ！文句あるか!?!」

「お前、やんのか!?!一人で勝てるわけねえだろ！」

「勝てるわけないだと？影分身の術！」

ボン。これで俺は二人。

ガキ共がどよめく。

「は!?!増えたぞこいつ！なんだ!?!」

「白眼！」

「うわ!?!目が変わったぞ!?!」

「気持ち悪っ！」

「やばい、こいつマジでばけものだ！逃げろ！」

「我が柔拳の味を知れ！逃げるな！逃げるな卑怯者！」

ガキ共はきやあきやあ騒いで公園を出て行く。

ナルトはただ呆然とその様子を見ていた。

「けっ。口ほどにもねー」

「なあ、ネジ」

呆然としたままナルトが尋ねる。

「お前つてば、なんでそんなに強いんだ？……商店街でも、さつきも、なんでお前はそんなに、平気な顔が出来るんだつてばよ？」

……計画通り……っ！

商店街、公園。全ては9か月間の修行時代のリサーチに基づき綿密に練った計画の上、ガキもおっちゃんもナルトも俺の掌の上！

この時、この言葉の為に！

「ナルト。お前、夢はあるか……？」

「夢？」

「俺はな、ナルト。火影になりたいんだ」

「……！」

やはり。まだナルトに夢はない。

一楽すら知らないナルト。賭けてみる価値はあった。

「火影はな、ナルト。みんなに愛されて、みんなを導く偉大な人のことだ。俺は火影になって、この目を気持ち悪いという奴全員を見返してやるんだ……白眼で。そして俺はそのために強くなりたい。だから修行をして、日々成長をし続けている！」

「……さつき増えたのも修行をしたからなのか？」

「そうだ」

「そうか、なら……俺も！俺は、この里のどんな火影をも超える！もちろんお前も超えて、そんでもって、里のみんなに俺の事、認めさせてやるんだつてばよ！」

ナルトは胸をはった。

「ナルト。その夢、もし本気なら、昼に日向の分家まで来い。お前とは別だが、俺と一緒に夢を追いかけてる奴がもう一人いる。俺達三人で修行をしよう」

「良いのか？」

「友達だからな」

友達だもんね？そうだよね？

お願い願いて！

俺は家までの簡単な地図をナルトに渡した。

「さて。後は影分身を解いて、来るのを待つだけ。」

「じゃあな。ナルト」

ボンと白煙。俺は消えた。

そう。朝からナルトに会いに来ていた俺は2号。

本体は柔拳の修行中。

ヒナタ様とナルト、どっちも同時に修行をつける。

これが俺の回答だ。

昼下がり。

日向分家の裏庭に、三人の子供の姿があつた。

一人は日向の天才。一人は熱血お嬢様。そして一人は化け物。

三者三様、抱える物も掲げた目標も違うこの三人。

はてさて、これから一体どうなることやら。

第五話 正直、原作とか忘れてきてる

その日、猿飛ヒルゼンは気分が良かった。

今日はアカデミーの入学式。

里の者たちを誰より愛する彼にとって、また里を治める三代目火影として、これから芽吹く忍たちが一堂に会す今日はその年で最も喜ばしい日。年中行事といえども毎年今日の感動は色あせる事はなく、むしろ年々強まるばかり。

そして今日もまたアカデミーに併設された火影執務室からアカデミーへ列をなす新入生達を眺めていた。

犬を連れているのは犬塚一族の子供、油女一族の子供は一人で歩いている。

仲良く三人で歩いてくるのは猪鹿蝶の子供達だろう。

今年の新入生は出来が良さそうだ。

きつとあと二十年もすれば、皆上忍上位クラスへと成長している事だろう。

そんな穏やかな想像も騒々しく扉を叩く音でかき消された。ただならぬ雰囲気。

音の主はヒルゼンの許可も得ぬまま執務室の扉を開け、荒い呼吸でこう言った。

「火影様！火影岩が……また！」

そういえば彼もこの世代だった。まったく未恐ろしい世代である。

「またナルトか！」

「やーい！やーい！お前らこんな事出来ねえだろ！バーカー！」

四代目火影の顔岩の上でナルトは吠える。

横に並ぶのは、化粧をした初代、白眼を開眼した二代目、モザイク加工してある三代目の顔岩。

「美術センス高くね？」

「うわ、ネジ!？」

「感心してる場合じゃないですって、ネジさん」

「ヒナタ!？」

ナルトを挟むように立つ俺とヒナタ。

その里中の反感を買う立地と作風……ナルトの犯行と踏んで駆け付けたが、時すでに遅し。

ヒナタも同様らしいが、三つ並んだ悲惨な顔岩に制止する気力を失った様だ。

「里を巡回中の中忍二人を気絶させて火影岩にラクガキ……最近のナルトはやんちゃすぎ」

言ったのはヒナタ。ナルトにはタメ口である。

もう「ナルト君……」とか呼ぶ奴はいない。

「ナルトの悪戯がどれだけネジさんに迷惑かけてると思ってるの？」

「う……でも!でも!」

どこことなくナルトの声が沈む。

原作で先にナルトの心情を明かされている俺からすれば当然の反応。

修行生活で勘違いしていたが、確かにこいつはあのうずまきナルトなのだ。

小言も消え失せていた時、白眼の端に大勢の忍を捉えた。

ナルトとヒナタも察知して黙る。

「おい、そこで何をしている!お前等……」

「影分身の術!」「影分身の術!」「影分身の術!」

即時逃げの体制をとる。

情状酌量の余地はなさそうだし、なんなら現行犯だし。

相手は十人だが、影分身の白煙が目くらましの代わりだ。

「影分身だ、逃げられるぞ!」「取り囲んで押さえろ!」

駆け付けた中忍達が包囲陣形を固める前に、ナルトが白煙から飛び出した。

総勢50人。

ナルト達の攻撃はデタラメだが、中忍一人に対してナルト5人という人数差が何人かの逃亡を許した。

それと同時に5人のヒナタが包囲網を抜ける。

中忍達は動けない。残った分身ナルトに羽交い絞めにされている。「ぐっ……くそー！」

無論クナイ等を突き立てて脱出する事は可能だろう。

しかしあの天才ネジですら本体を見破れない影分身、一介の中忍が見破れる訳もなければ、ナルトに手傷を負わせる危険性も判っている筈だ。

だって九尾だぜ？子供だぜ？六歳だぜ？

だがその子供、中忍如きにロックが解かれる様には仕込んでいない。

「詰みだ。諦めて見逃せ」

俺10人、中忍それぞれの前に立つ。

震える声で答えたのは中忍のリーダー。

「日向ネジ……一族異端の変態……っ！」

どんな呼び方だよ。俺七歳よ？精神構造に問題が起きるよ？

それはともかく。

「ふうん。見逃してはくれないという事か」

中忍は青ざめる。

「い、いや……そうは言っていない。なに、ここ子供のした事だ、なあ？俺達もこんな状態なんだ、もう身動きもとれない。完敗だよ……？だからほら、今回は……」

「思ったより軽いなお前。まあ一族異端の変態のした事だ。問答無用だ、大目に見ろ」

「ちよ——」

叩き込むのは、十連一極集中のオリジナル技——！

「八卦掌、九曜、回天！」

瞬間！炸裂する10の回天！中央の大回天と周囲九つの衛星回天が生じる遊星歯車的破壊現象！絶対防御は戦術的脅威へと昇華する——！

「次は11人で来るんだな……！」

「いやー逃げた逃げた！ちよつぴりやばかったつてばよー！」
「ナルトおおうつ！ちよつぴりじゃないよ！私達まで共犯扱いになつたじゃない！」

「いやいや。やばかったのは入学式の空気だろ。あの後みんな騒動に気づいてたし、平然と出席したお前らにお通夜みたいな雰囲気だったからな、マジで」

アカデミーの入学式も終わり、打ち上げのラーメン一樂。

「はい、豚骨味噌チャーシュー、一丁！お嬢ちゃんは替え玉いるかい？」

「ありがとつてばよー！」

「いえ、まだ大丈夫です」

「いやーいつもすみません本当に」

食うのはナルトとヒナタ、俺はイルカポジション。いつもの光景だ。

だってこいつらめっちゃ食うんだもん。

特にヒナタ。あれだけ食べて太らないのは人体の神秘である。

「んめえ〜！うまいつてばよー！」

「おいしいです！」

「へっ！そう言つてくれると嬉しいね！」

「本当にいつもありがとうございます。今日だって火影岩にあんなことをしていたのに」

「良いんだよそれくらい。どんな事してたつて腹すかした客には飯をだす！それが飯屋つてもんよ。それにあんたらのおかげでうちの知名度も上がってるしな！」

「知名度……？俺達のおかげ、ですか？」

「おうよ。なあに、知らねえつて事もねえだろ？あんたらが”三妖”なんて呼ばれて有名なのは」

「……」

知らんが？いや知らんが？

三妖なんてあつたつけ？原作を読んだのも随分前だからな、忘れて

るかもしれん。

「すみませんが、その三妖というのは？」

「……？なんだボウズ、謙遜なんかする年じゃねえや。」黒髪の妖姫
”、” 橙赤の鬼子”、” 大妖怪卍白影” とくりやあ” 木の葉の三妖”
よ」

「一人だけテイストが違う」

ていうか全員ナルトっぽくない。

解釈違いだ……おい神よ、これなんて二次創作？

俺が絡むと原作からずれていく呪いでもかかっているのだろうか。

俺は生き残ればそれで良いのだが……。

「なんでも、子供にしちやあ戦闘能力が高いって評判でな……数年前
木の葉にいたっていう、子供の皮を剥いで化けの皮にする白い妖怪と
ごっちゃになって、三人ともども妖怪扱いさ。おたくらの知名度も
あって、うちは商売繁盛って事よ！」

「それ悪評では」

「いやいや、とくにお前さんなんかは『今木の葉で最も火影に近い子
供』なんて言われて、二つ名に影が入ってるくらいだからな」

「そこ以外全部蔑称でしたよ？」

「まあ細かい事はいいじゃねえか」

豪快に笑うおっちゃん。

「まあまあ！俺達も認められてきたって事だつてばよ！」

「火影に近いなんて言われるのは良い事だと思いますよ？」

「悪名過ぎるけどな……あれ？もしかしてお前等知ってた？」

「そ、それは——」

全力で目をそらす二人。

あれ？知らなかったの俺だけ？諸悪の根源が仲間外れなんだけど
？

「おっちゃん。お勘定して」

「ネジ!？」

「ネジさん!？」

爆笑するおっちゃんだった。

その夜、一人の少年は今日見た光景を思い出していた。

自分と年の変わらない少年達が火影岩にあんなラクガキをして、集まってきた中忍を一網打尽にして逃げていった。しかも、そのまま何食わぬ顔でアカデミーの入学式に出た。

衝撃。あんな子供がいる事は衝撃的だった。

あいつらの名前は……確か、うずまきナルト、日向ヒナタ。

夕食の席で父さんに聞いたら、片方は日向家の子供で、もう片方ははぐらかして教えてくれなかった。

名門の子供、そして謎の子供……どっちにしる父さんはあいつらの事を知っていた。

どんな奴なんだろう。

日頃の父さんは兄さんの話ばかりで、他は一族とか任務とか小難しい話ばかり。

僕の事だっけ気にも留めないのに……それなのに、あいつらの事は知ってそうだった。

特に、うずまきナルト。あいつは名門でもなくせに、どうして父さんは……。

いいや、そんなの決まってる。強いからだ。優秀なんだ。たぶん、僕よりずっと。

父さんは兄さんだけじゃなくて、優秀な忍に興味があるんだ。

僕は、優秀じゃないと思われてるのかな……。

いいや、そんなのおかしいじゃないか。

僕だっけ父さんの子供なんだ、絶対に、あんな奴より劣ってるわけない！

よし、明日……！

その夜、別の少年もまた、今朝の事を思い返していた。

突然ネジ君が飛び出して行って、そしたら火影岩の上であんな騒動が……。

やはりあれはネジ君が起こした騒動なのでしょうか。

確かにネジ君には黒い噂があります……妖怪だとか、妖怪を一匹飼っているとか、巷では色々言われています。三妖なんて呼ばれて、実力もあるのでしょうか。

いいえ、いいえいけません！根も葉もない噂を信じて同級生を疑うのは悪い事です！

ネジ君は同級生全員に一目置かれ、クラスの友人にも評判が良い、優しくて良い人です！

それだけは間違いありません！

しかし……しかし本当に中忍を倒せる程実力があるかもしれないのは事実です。

あの騒動には三妖の新生が絡んでいるとも聞きますし……彼が絡んでいようといまいと、僕の実力が彼に負けているのも事実。

やはり僕の忍道には、ネジ君、そして彼が率いる三妖を打倒することとは必須です！

そうと決まれば迷っている暇はありません。思い立ったら即・行・動！

さしあたって明日……！今は勝てなくとも、実力を見極めてやります！

次の日。

俺の前にある少年が立ちふさがった。

「お前は……りー？」

「ネジ君！僕は君をライバルにすると決めました……！ライバルであるからには言葉は要りません。今すぐに、最初の決闘を申し込みます！」

同刻、ナルトの前にも。

「お前つてば、誰だつてばよ？急に果たし状なんか送ってきて、何がしたいんだつてばよ？」

「ここに書いた通りだ。……うずまきナルト、僕と戦え！僕の名は、うちハサスケ！」

二人の挑戦者の声が重なる。

「いざ尋常に勝負！」
開幕のコングは今鳴った。

中

「どうしてこうなった!?!」

「こつちが聞きたいわ! 解る様に説明しろ、ネジ!」

怒鳴るヒアシ様。俺とヒナタ様は正座。

久々の日向本家である。

「いやだから、リーに勝負を挑まれました」

「ああ、それで?」

「気付いたら意識と体が飛んでました。リーの」

「三年前と全く同じではないか! バカかお前は!」

「すみません」

「そしてヒナタ!」

ヒアシ様はヒナタ様を睨む。

「言え! お前は何をした!」

「はい……ええと、ナルトがサスケさんに勝負を挑まれました」

「それで?」

「サスケさんを応援した他の女子と私とで口論になって、サスケさんが飛んだ事が原因で喧嘩に……」

「それで?」

「気付いたら何人が飛んでいました」

やだ! この子達血の気が多いわ!

てかサスケかよ! 出てくんのはえーよ、台本読め!

絶対飛んだ女子ってサクラとイノだし!

ヒナタ様もなんで平然とぶっ飛ばしてんのかね。

しつげがなつてないよ、しつげが!

「どういう事だネジこら!!!」

「え俺すか!?!」

「どう考えてもお前が原因だ! 昔のヒナタはそんな子じゃなかった

し、話の内容が生き写しすぎるわ!」

「そんな事は」

「あるだろ!どう聞いても!」

「生き写しなのは産まれつきです!」

「実父の知らん産まれつきがあるか!」

「待ってください!俺は修行しただけで、気性まで魔改造したつもりはありません!」

「魔改造という言葉が出てくるだけの事はしてるじゃないか!」

「しかし性格までは……!」

「本当に、心からそう言えるか?今のヒナタはお前の影響を受けていないと?」

「……」

違ったかもしれねえ……。

というか原作の姿は見る陰もないな。

よし、ごまかしスマイル。

「へへっ!」

「呪印!」

「ダメだったングガアア!!」

俺の体は跳ねまわり、意識が朦朧とする。

言語化できない頭痛に全身が支配される様だ。

「父様、ネジさんに何を!」

「黙って見ている!これも分家の宿命……!」

「ネジさん!?!気をしつかり、大丈夫ですか!?!」

「ウゴゴ……きれいなお花畑が見える……ヒ、ヒザシが川の向こうから俺を呼んで……」

「気をしつかり!まだ生きてますその人!」

「湯気の向こうにヒナタ様の……おっほほ」

「何のイメージですか!?!父様止めて!ネジさんがおかしくなっちゃう!」

「儂には結構大丈夫そうに見えるが……?」

「ネジさんに変な物見せないで!」

「儂のせいではないわ！」

ふっと頭が軽くなる。ヒアシ様が印を解いたのだ。

息も絶え絶え、起き上がる。

「呪印によつて脳細胞が破壊される感覚……あぶない、どこかへトリップする所だった」

「既に怪しかったですよ!？」

「おかしい、他の者はあんな反応にならんのだが……」

「というわけで、本当すみませんでした!」

半刻後、俺、ナルト、ヒザシの三人はサスケの家で頭を下げていた。

ヒナタはヒアシ様と一緒にぶっ飛ばした女子の家を回っている。

サスケの父——対面のうちはフガクは頭を掻いた。

「どうぞ頭を上げてください。子供のやった事ですし、うちの子から勝負を挑んだともなれば一方的に謝られるのも居心地が……。いやいや、こちらこそ申し訳ないです」

フガクは頭を下げる。

腰が低いというか、見かけによらず温厚な印象。

一族のメンツの為か、それとも水面下のあの動きを隠すためか？

邪推はよそう。せつかくの白眼が腹黒く染まっちまう。

「どうぞこれから息子と仲良くしてやって下さい」

「どうも(迷惑をおかけしました。ネジにはきつく言っておきますので」

親同士はそんな所で了解した。

菓子折りも渡し、サスケの家を出た所でナルトを呼ぶ声に引き留められた。

見ると家路とは反対方向の通りにボロボロのサスケが立っている。家の中で姿を見なかったので今日は会えない物と思っていたが、実情は違うらしい。

ヒザシは気を利かせて俺達と別れ、俺とナルトはサスケの無言の案内に従って、着いたのはうちは一族の演習場だった。

演習場の前でサスケが放ったのは意外な一言。

「ナルト……お前に修行をつけたのはネジだと聞いた。本当か？」
「ああ。そうだってばよ……？」

「ネジ、ナルトにした修行、この演習場でもできるか？」
なるほどな。

あの事件の前の純粋なサスケ。既に落ちていたか。

「うちの演習場は広い。ナルトにした以上の修行ができる」

「だったらネジ、僕にも修業をつけてくれ！僕は……っ」

「わかってる。お兄さんみたくなりたいたいんだろ？」

「な、なんでそれを……？」

「昔里中をパトロールした事があってな……大抵の事は見てきたつもりだ」

「日向でそんな事……もしかして、ネジって三妖の！」

「そんな有名なのか、それ……」

なんか複雑だな。お前も入れて四妖にしてやろうか。

「まあとにかく！今日からお前も俺たちの仲間だ。二人は兄弟弟子、これからは共に夢を抱く兄弟としてお互いを高めあう事！」

「おう！よろしくってばよ、サスケ！」

「ああ、ナルト！」

二人は固く握手をした。

この光景、原作でも見たかったな。

「さて！そうと決まれば行くってばよ！一楽！」

「おいナルト、何を勝手に……！」

「一楽ってなに？」

「おう！一楽ってのは、それはそれは旨いラーメン屋で……」

ダメだ。こうなったらナルトは止められない。

食費が増えるのか。子供が貰える小遣いなんてたかが知れてるんですが。

働くかー。影分身使ってアルバイトとかか？子供にそんな事やらせてくれる店あるか？

ネジ生存ルート、楽じゃない。

「うおお！ネジ君！僕のライバル！いつか君を超えて見せます——
！」

その頃。存在を忘れられていた挑戦者もまた夢を胸に決起したの
だが、まあ何だ……スマン！

第六話 獣より団子

「いいえ、結構です！」

「……………」

後日。いつもの様にリーを修行仲間にも誘った俺に突き付けられたのは、意外にも拒否の一言だった。

なんで!?!こいつが一番ちよろいと思ってたのに！

とかが本来の俺のリアクションなのだろうが、今回ばかりはそうもいかない。

いや、ごめんね。

意外でもなんでもないわ。

一週間も放置したもん。そりやそうだよね。

先日の一件で、サスケは俺の弟子となり、俺の弟子は三人となった。サスケ、ヒナタ、ナルト。このじゃじゃ馬妖怪3人に並行して修行をつける事が一体どれだけの苦労になるか、当時の俺は完全に読み違えていた。

実はナメてた。どうせ一人増えるだけだし？俺天才だし？とか思ってた。

だが蓋を開けてみるとどうだ。

向上心余りあるサスケはすぐナルトに勝負挑むし、ナルトはバカだから勢いでボコボコにしちゃうし、ヒナタ様は窘める感じで柔拳ぶっぱなしてナルト沈むし、修行は止まるし、俺の胃は痛むし、食費は馬鹿にならんし、分身が一楽でバイトして稼いだ金はすぐ消えるし、そんな分身作ったせいでチャクラが足りないし、おっちゃんも人使い荒いし、娘さんは可愛いし、美人だし…………。

違う違う。

やっぱ兄貴顔して最初に奢ったのが間違いだったか。

ナルトが毎回奢られる雰囲気なのが伝播して断れなくなっちゃったんだよな。

だから違う違う。

とにかく、控えめに言ってバケモン級のキャラの濃さ三人を相手に

するのは骨が折れた。

折れまくって一週間が過ぎ、今日リーを発見。

発見と言ったのは、一週間ぶりの登校だったからだ。

リーは一週間も休んでいた。さつき気付いた。

……やっちまったよね。内臓疲労で一週間ぐったりだったよ。

はは。どうすんだこれ？

「待てー待てリーよ。この前お前を吹っ飛ばしてしまった事なら謝る！すまん！この通りだ」

全力で頭を下げる事にした。

それ以外に思いつかなかった。

長い事人生歩んできたけど、今日のリーより不憫な奴は見たことがない。

廊下で展開される珍事に、取り巻きの生徒達はざわつく。

周囲からの非難の圧力。

まだ謝ってなかったのかという視線が痛い。

やめて！悪気はなかったんです！

それが一番問題だけど！

しかしリーは周囲に気付かない風で、力強く首を振る。

「いいえ！謝罪なんて願ひ下げです。あれは僕の力不足、君が侘びる非なんてこれっぽっちもありません！」

「いいや侘びさせてくれ！本当に済まなかった！俺は人として気遣いが足りていなかった、マジで！なんでもするから、俺に罪滅ぼしをさせてくれ！」

食い下がる俺。

本心からの絶叫だった。

キヤラ崩壊だった。

一瞬の沈黙の後、再度リーは首を振る。

「なるほど、理解しました。しかしお断りさせて頂きます」
「どうして」

「卑怯だからです！」

「ぐ……たしかに、俺の言動は謝罪の押し付け、卑怯だったかもしれない

い。だが……」

「そうではありません！全然違います！」

「……ん？」

「同期で一番の実力者である君に修行をつけてもらうのは、確かに魅力的です。しかし、それは一方的に君の扱う戦術の種明かしをされているに等しい。それでは次手合わせしたとき、フェアな戦闘になりません！僕と君とはライバルです！僕は僕のやり方で君を超えます！」
「ビシ！つと親指を立てるりー。」

「……」

「……」

え、なんなんこいつ。

忍の世界にはバトル漫画的人間しかおらんのか？

人間関係の広がり方、雨降って地固まる以外のバリエーションを見たことがないんだが？

周りの人間は……いやでも呆気にとられている。

こいつがやばいのか？

それとも俺が関わると全員こうなるのか？

そんな事ある？

いやいや、ないない。

高校までの俺なら、俺の影響力、高すぎ……!?みたいな勘違いで、また恥をさらしていた所だ。

しかし俺も成長した。

高すぎない高すぎない、俺はモブ。日向ネジ。

原作にない物があるわけない。

力は封印されてないし、墮天してない。

俺が選ばれし者でない以上……選ばれ死者である以上、俺の主人公補正は死ぬ事であり、原作以上に俺が影響力を持つ事があればそれはきつと俺をここへ送ったあの爺神のせいである。

ネジそこまで影響力ないからね、悪いけど。

つまり俺は悪くない。

畜生あの爺神野郎……ヒナタ様に始まりりーまでも、俺の人生をめ

ちやくちやにしやがって。

おかげで体の良い言い訳を見つけたぜ。

ちなみにここでいう爺神は誤用だが、俺の人生に二度もバッドエンドを突き付けたあのジジイは御用になるべきなので問題ない。

ってか、そんな事は問題じゃない。

リーがグー！ってなポーズをとったまま場が凍結している。

胃袋的死活問題を感じた俺はとりあえず返す事にした。

「リーよ……本当に怒ってないんだよな？」

とりあえず小物だった。

それからの掛け合いは俺の沽券に関わるので割愛。放課後。

撰氏500度くらいの熱血を浴びてあんまりな気分だが、今日も今日とて修行である。

俺も無為に骨を折っていたわけじゃない。

この一週間、俺を含め全員が修行できる様に策を練っていたのだ。

その結論がこれである。

ヒナタ様とナルトはうちは演習場にある大池で体術修行。

ヒナタ様には俺が柔拳の特別メニューを、そしてナルトには影分身

同士で組み手をさせている。

もちろん両者、水面に立った状態だ。

影分身の数は経験値の倍率。

影分身の組手は単純な戦闘経験値になるだけではなく、自身の立ち

回りの弱点や課題を爆速で発見し修正できる利点がある。

そしてもう一つ重要なのは、ナルトの戦闘スタイルの改善だ。

ナルトは無鉄砲すぎて、相手の攻撃を受けてでも反撃を繰り返す事がままある。

毒や忍術など一撃もらったらアウトな場面が多い実戦でそれは自殺行為に等しい。

だからこそその影分身である。

外傷一発で消える影分身体は、必然相手の攻撃を食らわない努力が求められる。

その経験値は自然と本体に蓄えられ、ナルトの拳技は洗練されていく。

影分身の数を増やすことも検討中だし、拡張性の高い修行方法は良いね。匠の技が感じられるよ。

一方ヒナタ様の方は、ナルトの本体と戦わせている。

ヒナタ様の性格は異常な進化を遂げたが、根本の「敵を傷つけない志向性」は残っている。

悪事を働いた、気が置けない仲のナルトに使う柔拳はともかく、それ以外に積極して柔拳を使うのは抵抗がある様だ。

前回のサスケファン達においては自衛の為に剛拳で説き伏せた(物理)というのだから恐ろしい。

……どうも俺とのファーストコンタクト(物理)が原因っぽいのだが、何の事やら。

そうして出来上がった今の彼女の柔拳は攻撃の意思が乏しい。

それを打開すべく思いついたのが、柔拳による”絶対反射”である。

柔拳は経絡系に負担をかける拳、こちらから攻撃せずとも敵の攻撃を受け流しチャクラを流すことで、簡単に戦術勝利をもぎ取れるのだ。

攻撃が反転して自壊を呼ぶ、これが”絶対反射”の柔拳である。

そこでナルトとの組手だ。

ナルトには「攻撃の手を緩めるな」と言い、ヒナタ様には「全て受け流せ」と伝えてある。

足場が不安定な中受け流す事に注力するのは相当な精神力がいる。

今のナルトの連撃は俺ですら白眼をフルで活用しなければ見切れない。

ヒナタには十分すぎる修行だ。

一応ナルトの体力を考えて柔拳は使うなど言っているが、この様子ではそんな余裕はなさそうだ。

ちなみになぜナルトの本体を使っているのかというと、ナルトの阿呆は自身の修行の意味を考えず影分身をすぐにぶっ飛ばすからだ。

戦闘スタイル変わらんつちゅーの。

サスケは森林スペースで三年前のナルト達と同じ修行をしている。言葉じゃ何も理解できないナルトは勿論、ヒナタ様よりも習得スピードが速い。

この分だとアカデミーの卒業を待たず、成長したナルト達の横に立てるだろう。

うちはの血つてやっばすげえ。

俺もうちには生んでもらった方が良かったかも……いやあのクソジジイの事だ、イタチとかにされてたかもしれない。やはり日向は転生においても最強か。

そして俺。

ここが一番重要である。

こいつらに修行をつけつつ俺も成長する方法。

それは、ただ修行を眺める事だった。

驚くなかれ、詐欺じゃないよ。

長い事生きていて確信を持ったのだが、白眼という目は使う程強化される。

全力だしてやっと見切れるナルトの体術、それを受け流すヒナタ様、急成長するサスケ。

そのそれぞれに配置した影分身が、各人のチャクラの流れを細部まで注視する。

俺の眼に足りなかったのは、はつきり言つて”見る”事自体だったのだ。

日のチャクラ消費量はえぐいが、これは俺の白眼スペックを劇的に跳ね上げる。絶対に。

俺は忍として実戦に投入される前に、点穴を見切りたい理由がある。

そしてその日は唐突にやってきた。

サスケに、ナルトに、ヒナタ様に……全身に小さなチャクラの水玉が見える。

チャクラの淀みの様でもあるし、経絡系の交点や分岐点の様でもある。

ただ一つ解ったことは、体を流れるチャクラはその水玉を基点に増減し、循環しているという事。

有体に言って結構キモいね。

体内にびっしり経絡系と点穴。人間の見方が変わるねこりや。

新しい見地にガッツポーズ。ポジティブは大事。

あれから一年。

俺は修行を見ていただけだが、やはり俺の眼に狂いはなかった。

副次的にチャクラ量も上がったのは僥倖だったね。

連日チャクラ切れすれすれの感覚、この世界の住人じゃないと伝わらんだろうな。

精神と身体を同時に消耗するのはかなり辛かったが、それも報われて弥栄弥栄。

ナルトとヒナタ様に一言断り、俺は一人うちは演習場を抜けた。

点穴を見切ったら行きたかった場所がある。

なに、ちよつとしたお使いだ。

里の穴場的忍具店。お値段はちよつと張るが、良質な忍具、コア層向けの忍具を取り扱っている。

長物から暗器まで、多種多様な武具がジャンクヤードを彷彿とさせる店内に取り揃えてある。

男のロマンって感じ。

ジャンクヤードの奥、コア向けのブースにそれはあった。

手に取ってみると、金属とも何かの結晶ともつかない透明感のある肌触りに、広げた掌よりも長い刃渡り？をしている。

一朝一夕では武器として扱えなさそうな、しかし柔拳との相性は最高級の忍具——千本である。

「へーえ。千本ね、アンタなかなか渋い趣味してるわね」

横やりを入れてきたのは聞きなれない女の声。

そこに居たのは。

「テンテン? どうしてここに」

チャイナ服とお団子頭の似合う女、テンテンである。

「どうして、 って……ここはあたしの行きつけの店だし」

「そうだ武器オタクだった」

「武器オタ……って失礼でしょ! 確かにそうだけど!」

「へへ」

「ごまかすな! 初対面の癖に内輪ノリっぽくするな!」

「そういえば初対面……ってか二年同級生やって初対面!?

「え、俺いじめられてる?」

「なんでそうなるのよ……まあ確かに、とっつきにくいわよねアンタ」

「いじめられてるやつだ。婉曲的に伝えてるやつだ……」

「だからなんでそうなるのよ」

「でもなければ二年一緒に初対面はありえないでしょ。どうかひと思いに言ってくれ……!」

「ちよ、ちよつとストツプ! なに? アンタ、オフの時はそんな感じ?」

「そんなって何が」

「はあ……もういい、なんとなく解ったわ」

軽く頭を抱えるテンテン。

「アンタね、とっつきにくいだよ。成績はとびぬけて優秀。いつもやつれた目してるし、つきあい悪いでしょ? 修行があるとか言って、後輩ぶっか可愛がって。この学年でアンタと交友関係あるのリーだけよ、気づいてた? それがどんな堅物かと思ったら……アカデミーでもその調子なら、とっくに人気者になってるわよ……」

「やつれてたのは修行のせいだな……そんな所に弊害があったとは」

「修行の弊害って……休養もまた修行の内よ?」

「アカデミーとか休養でしょ」

「急にとっつきにくくなったわね……それで、そんな天才様がどうして千本なんか? アンタならそんな物いらぬ気もするけど? あ、もしかしてアンタも物好き?」

「それだけはない」

「……」

「ちよつとガツカリするな。千本は戦闘用というよりは、医療用に使いたいんだ」

「医療？つて、鍼灸なんかに興味あるの？」

「半分違う。日向一族に伝わる柔拳は知っているよな？俺は弟子と一緒に、数々の人達をボコしてきたわけだが……一年ほど前、俺達がリーや下級生をボコした事件の時、俺が少しでも医療を齧っていたらつて思ったんだ。そうすればリーは一週間も寝込むことはなかったし、下級生たちの回復も手助けしてやれたんじゃないかな。だが俺に医療忍術の心得はないし、得意は柔拳くらいしかない。だから、鍼灸を応用した柔拳で直接チャクラ系をいじる回復忍術の研究をしたいんだ」

「ふーん。まあ確かに、チャクラの流れをいじれば回復だつてできないことはないだろうけど、正気？鍼灸つて結構難しいのよ？」

「いや、いじるのは点穴そのものだから、鍼灸の基礎さえわかれば柔拳の応用でなんとかなると思うんだが……その口調、もしかして有識者？」

「え、ええ……あたし時空間忍術くらいしか取り柄ないし、忍具の扱いは一通り学んだけど？」

「そうか。頼む、俺に鍼灸を教えてください」

「え？ああたし!？」

「基礎だけで良い。後は俺一人でやる。お前しかいないんだ」

「急に馴れ馴れしい……まあ、良いけど」

「いよっ！良い女！」

中

「という訳で、だ。サスケ君？」

「はい。な、なに？」

「テンテンに鍼灸を習ってから数日。」

「修行終わり、へとへとになった実験体一号に早速声をかけてみた。」

ナルトは九尾チャクラとかいう爆弾抱えてるし、ヒナタ様は女で手が出しづらい。

何よりヒアシ様に呪印呪印ネジイされてしまう。

ただの俺考案疲労回復のツボも劇薬になりかねないという事だ。

「ちよ〜つとリラックスしてそこに寝そべって?」

「え、な、なに?」

「リラ〜ックスしてくれるだけで良いから。疲れが消えるマッサージみたいな物だよ?」

「その喋り方は何?手に持つてるの針だよね?ちよ、ちよつと、やだ!」

「大丈夫。俺は天才だよ!」

「なに!?ちよ、ちよ、うわあああああ!!——あ?」

千本を刺すと、しばらく絶叫したサスケは妙な声を出した。

ん!?間違ったかな……。

ふむ、この秘孔ではないらしい。捨ててこい。

……サスケは何も言わない。

あれ、これどつちだ!?だんだん焦ってきた、どうしよう失敗してたら。うちは一族なんですけど、愛を失った親族が俺を殺しに来るかもなんですけど!?

死にたくない!こんな理由で死にたくない!!

「い……いやだ たすけてくれえ!な……なぜ俺がこんな目に!!!天才のこの俺がなぜえ〜!!」

俺の慟哭にむくりと起き上がるサスケ。

「だからなんなのその喋り方?」

「生きとつたんかお前エ!」

「死ぬかもしれないの!」

「い、いやそんな事はないが……」

つぶねー。天才リスpekt失敗かと思った。

あいつ別に成功してないけど。

「気分はどうだ?」

「なんか……最初は変な感じだったけど、じんじんしてきて、疲れが取

れてきた」

「俺は天才だ!!」

「本当に急にどうしたの!?!」

「今夜はパーティーだ! 無礼講だ! 一楽で好きなだけ食らうが良い!」

「やったー!」

「おいしかったー!」

「うまかったってばよ!」

「ありがとうございます。親父さん」

「あいよ! まいど! もうじき暗くなるから気をつけて帰んな!」

「なんでお前等まで……くそ!」

無礼講と聞いたナルトとヒナタ様は凄かった。

ほんと、お前らの為じゃないのに凄かった。

ナルトとは先に別れ、サスケの帰りが遅くなってしまったので送っていくと言ってヒナタ様とも別れる。

ヒアシ様はそういう所気にするからね。修行が終わったら即帰って来いつてさ。

そんなに俺が……これは蛇足か。

むしろヒザシが放任過ぎるくらいだ。俺は楽で良いけど。

「なんか……おかしいな」

サスケが不意に呟く。

確かに。うちは一族が住む地区に入ったのだが様子がおかしい。

暗くなってきたとはいえ、人気が無さすぎる。

まるで――

「そうか! サスケ、待て!」

あれは今日か!?! まずい!! 忘れて――

「サスケ!?!」

走り出したサスケ。

不安に駆られてか、俺の言葉は耳に入っていない。

くそっ!! 失態だ!

人生一の大ポカをやらかした！

咄嗟にサスケの家へ急ぐ。

瞬間、響き渡るサスケの絶叫。

走力がつきすぎている。修行が全部裏目に出た！

「くっそー！くっそー！くっそー！——」

なんでこうなった。俺が——俺はこんな事の為に……！

サスケ一家の門前につくなり出てきたのはイタチ。

イタチは目を——万華鏡を見開く。

「君は、サスケの——」

殺気。

こいつ、動揺から間髪入れず決断しやがった。

俺を、殺すと。

初めて感じる強大な殺気に身がすくむ。

全身が硬直して、胃が痙攣しても嘔吐ができない。

イタチは背中に帯刀した刀を抜くと、

「に——兄さん!!」

……遠くでサスケの声がある。

あれ？おかしいな、そんなに距離はない筈だが？

肩口が、熱い。それなのに、すごく寒い。

意識が遠のく。

なんだろう。この感覚、前にも味わった気がする。

どこでだっけ？

わからない。おもいだせない。

おれのいしきは、しずかに、やみのなかへ——。

第七話 原作開始！俺はモブじゃねえ！

見知らぬ、天井。

いやなんとなく解る。木ノ葉病院だ。

ここ以外に病院知らないし。

あのクソ神——いや、認めよう俺の非だ。

俺は修行にかまけて、イタチの起こす虐殺事件の日付を忘れていた。

大好きな作品に転生しておいてとんだ失態だ。

NARUTO 転生なんて夢にまで見ていたのに、実際俺をどれだけ強化しようが、モブはモブという事か？

ネジが主役だつて良い筈なのに。

はい、自己嫌悪終わり。

理性的に行こう。体は無事かな？

イタチの太刀食らつて無事なわけないんだけども。

とりあえず白眼は無事。

両脚も問題ない。

次に両腕、ここで右手側の上半身に激痛。

白眼で患部を確認すると、右肩から胸にかけて、経絡系が一度引き裂かれた後溶接された様な傷痕が伸びている。

どうやら傷から右は痛む割に動かせないらしい。

右肩から袈裟切りにされ、右腕右肩がお釈迦つて所かな。

俺右利きなんですけど。

しかもこの溶接跡——治療痕だろうが、これが治療と言えるのか？

治療方法が忍術なのか半田ごてなのかすら怪しい。

しかもご丁寧に上から大仰なギプスで固定されているし、お世辞にも助かったとは言えない。

また気分が沈みかけていた時、病室の扉が開いた。

入って来たのはナルトとヒナタ様。

2人揃つてお見舞いとは、ナルトも中々隅に置けない。

なんて軽口を言う間もなく、俺の覚醒に気付いたナルトは大慌てで

医者を呼びに行き、ヒナタ様はその場で泣き崩れてしまった。

少々太ましい中年の医者が到着すると、父ヒザシもやってきた。

俺は数日間寝込んでいたらしい。

だとすると、皆の反応は少々オーバーじゃないか？

数日寝込む位の怪我、忍にとっては日常だと思うが。

親バカと情に厚い幼馴染みコンビとはいえ、嫌な予感がする。

しばらく意識やら何やらよくわからない確認があつて、俺の容体が

伝えられる。

曰く端的に、俺は右肺を失った。

傷は俺が思っていたより浅く、日々の鍛錬も相まって一命はとりとめた。

そして、忍者は諦めた方が賢明らしい。

え、そのイベント俺に来るんすか？

俺はリーじゃないし、お前はボインじゃないぞ？

お前はおっさんだよ？おっさんだよね？

「あれ？もしかしておばちゃん？」

「は……？」

「間違えました」

「え……ええ、突然の事で混乱すると思います。ゆっくりでも構いませんので、我々も今回の事を飲み込めるよう尽力いたします」

「俺の肺、治らないんですか？」

「はい……」

「つまんな」

「そういう事では!？」

良い反応するなあ、おっさん。かわいくねーぞ？

可愛くないのは俺の状態の方か。

片方の肺は消え、右側の上半身も怪しい。

今修行なんかやったら速攻体が千切れてお陀仏だし。

傷口が観音開きで、世にも禍々しい呪物の完成だ。

控えめに言つて産廃レベルの品質。

「どうにかなんねーのかよ!? ネジは! ネジは! 火影になるのが夢なん

だぞ!？」

不意に医者を怒鳴りつけたのはナルト。

ヒザシとヒナタ様は黙っている。

八方塞がりな状況に医者は「しかし……」と言ったきり困ってしまつた。

中々深刻そうだが、なんだろうなあ、実感ないんだよね。

死亡二回目、今回は忍として死んだだけだし、ぶっちゃけ忍界大戦で出兵がなくなった分助かつたまでである。

むしろこれはチャンスなんじゃないか？

原作で死亡が確定しているなら、忍者にならない、つまり原作に関わらない今の環境が一番の生存フラグ。

現状、最良の選択な気もする。

「……良いのかよ、ネジ」

他と俺の温度差に気付いたのか、ナルトは怪訝な顔をする。

意味を測りかねた俺が黙っていると、ナルトの表情は滾るような憤悶へと転じて、一気に爆発した。

「お前はそれで良いのかって言ってんだ!!火影になるんだろ!?!それがお前の夢なんだろ!?!こんな所で諦めて良いのかよ、俺達と修行したのは夢の為じゃなかったのかよ!!!こんな……こんな俺らバカみてーじゃねーか!!」

「バカみたいって……そんな言い方はないでしょ!?!ネジさんだって望んでこうなった訳じゃないのよ!?!」

言い足りない様子のナルトにヒナタ様は声を荒らげる。

ナルトは声を噛み殺し、またしても室内は静寂に飲まれる。

夢。

ただナルトと交友関係を持つため、いつか自分が生き残る為に言った言葉だったが——こいつらにはそんなに重い言葉だったのか。

いや、あたりまえか。

ナルトの火影に対する想いは尋常じゃない。

それも原作で充分知っていた——つもりだった。

「どうしても、なんとかありませんか」

やっと口を開くヒザシの言葉は、半分の諦めと半分の期待が入り混じっていた。

医者はヒザシとナルトを交互に見て答える。

「しかしその……今の彼の肺機能では激しい戦闘は厳しく、肺を再生させられる忍もおらず……治活再生の術でぎりぎり命を引き留めただけの状態ですので、忍の任務は不可能。もし手術やりハビリをしたとしても、どこまで回復するか……」

今度はナルトも黙った。

ヒザシが深く息を吐く。

「腕は治るのか?」

尋ねたのは俺。

「腕は、そうですね問題なく治るか。ですので、日常生活に問題は——」

「治るなら良い。それで俺は火影になれる」

「な……!?!」

ナルトに対し、火影を語ったのだ。

ファンとして、そして師として、夢の続きを見せるのが筋。

そしてこの日向ネジ、二度の失敗はあり得ない。

復活劇を見せてやろう。

今度は医者が声をあげる番だった。

「冗談じゃない!君は、ほとんど死んでいる状態でここへ運び込まれたんですよ!?!」

「冗談じゃない。この眼と両手、これで充分火影に届く。日向は木の葉にて最強なのだから……!」

「ふざけないで下さい!君——」

激昂しかかった医者だが、ヒザシに制止される。

「ネジ……農はお前に任せる」

「そんな!?親御さんの方からも——」

医者が何を言おうと、親バカ発動中のヒザシは止められない。

俺は父の信頼に応える為にも復活を誓った。

日向分家の朝は早い。

退院し久しぶりの実家と言えども、修行を怠ることは出来ないからだ。

アカデミー復帰まではもう少し時間がある。

この間に復活の糸口くらいは見つけたい。

「とりあえず、何でも試してみますか！」

俺は拘束具の取れた右腕を回し、作業にとりかかった。

ケーススタデイ、影分身を使う。

「久々登場、俺2号！勿論右肺はないよ！」

登場と同時に俺のささやかな希望は失われたよ、ありがとう。

さすが俺だ、空気を読まない。

「だいたい俺の肺をお前に移植とか出来ねえから。そもそも誰が手術すんだよ」

「そんな事は考えてないし、この里に医療忍者が何人いると思ってる。俺のアイデアを馬鹿にするな」

「2行で矛盾起こしてる奴なら馬鹿にして良い？てかメス入れただけで俺は消えるんだよバカ」

「バカはてめーだ、俺2号」

「なんで」

「俺はお前だから」

「……」

「だったら2号、肺が揃っていた頃の俺に変化とか出来ないか？」

「出来なくはないだろうが、機能は戻ってこない」

「あれ、そうなのか？」

「変化の術に機能面を上乗せする特性があるなら、とつくにナルトと自来也の子供ができてる」

「……お前の中で自来也の倫理観どうなってるの？」

「俺が聞きたいよ。本体に」

「……」

しようがないじゃん、自来也だし。

素行が作中トップクラスで悪いんだよあの変態。

薄々解ってはいたが、変化の術は見た目を変えるオンリーの術だな。

忍者と言いつつ誰も忍ばないこの世界だと不意打ちにしか使えん技だ。一番忍者っぽいのに。

「そうだ！2号お前、犬塚家行ってこい」

「なんで」

「犬塚家秘伝の獣人分身、あれ人間が人型のまま犬の嗅覚を得てただろ？また逆も然り。つまり右肺がある状態のお前と俺が獣人分身すれば……」

「機能しない生きて右肺をもつ奇天烈人間コンビの誕生だな」

「……」

ややこしくなっただけ。

失敗。

ケーススタディ、傀儡使いになつてやるじゃん。

傀儡使いは、戦闘専用の傀儡をチャクラ糸を用いて操り戦う。

つまり俺が戦闘できなくても問題ないのだ。

傀儡は手元がない（そもそも木の葉にあるのか？）ので、商店街で人形を買ってきた。

指先から放出したチャクラを細く長く伸ばして成形する。

これくらいのチャクラコントロールは楽勝だ。

チャクラ糸の端を人形につける。

チャクラで動かすから、つける場所は人が動く時によく使う点穴を意識する。

結果、人形は問題なく動作した。

かなり素早く、そして力強く動かす事が可能である。

ただし指が攣った。経絡系と併せて尋常じゃない疲労感。

マジで指一本動かせないの、この件は保留にした。

ケーススタディ、パロディに頼る。

「俺は天才だア〜！」

「……」

俺は意外とウザがられてるのかもしれない。

殴りたい位には。

ともかく、呼吸能力の強化においても保留。

一朝一夕で結果が出せる分野でもない。肉体改造だからね。

「ネジ……お前本当にそれ食べるのか？」

夕食の席でヒザシは、俺の前の膳——造血丸の山——を指してそう言った。

「父様、これは造血丸の山ではありません。ただ主食と副食と椀物の上に造血丸を盛っただけです。俺の食生活に口を挟まないで下さい。食材と料理人その他に対する邪知暴虐の数々は侘びますが、決して冒涇の意志はありません」

「あ、ああ……えー……食べにくかったら、上の造血丸は手掴みで食べても良いからな？」

「はい」

かなり無理な食事だが、それも復活の為。

やるだけやらなきやこの世界、生きていけない。

卍

「えー、これから卒業試験を行う！で……卒業試験は分身の術にする。呼ばれた者は一人ずつ、隣の教室に来るように」

教壇に立つうみのイルカがそう言つて数時間、アカデミー前は今年の卒業生でこつた返していた。

聞こえるのは親子入り混じった歓喜の声。

一人の少年、ナルトの周りを除いては。

「ねえ……あの子合格したの？」

「合格したんだって……あんなのが忍になって大丈夫かしら……だってあの子」

「しっ……禁句よ」

その化け狐が一人ブランコからじつとりとにらみ倒しているというのに、木の葉の主婦層は平和な物だ。

しかし原作と違ってナルトは一人ではない。

「ナルト、卒業おめでとう」

「これで俺達は忍だ。フツ……後手はとらねえぜ？」

「ナルト、卒業祝いだ！ラーメン奢ってやる！」

サスケとヒナタ様はいつも通り。

そして俺が修行をつけていない間に、先手必勝で奪われていたポジションを取り戻したのがうみのイルカ、三人の先生である。

イルカの一声に、3人は顔をほころばせ――

「気になるか？ネジよ」

遠目から眺めていた俺に、後ろから声がかかる……一年前に忍となった俺の直属の上司、マイトガイが不安気な目線を送っていた。

俺は一年前、アカデミーを首席で卒業した。その後リーやテンテンと同じ班に配属されたが、不完全な俺の肉体は紙面上のナンバーワンルーキーという肩書を許しても困難な任務を許さず、天才と呼ばれた昔の姿は見る影もない。任務と言っても迷い猫探しがせいぜいであり、有体に言って班のお荷物である。

そんな俺の心情を慮ってか、ガイ先生は俺と一緒にラーメンを食べに行ったらどうかと提案してきた。

しかし俺はあの和に混ざる事は出来ない。

ナルトへの負い目もあるし、サスケの為でもある。

事件以来、サスケは俺と顔を合わせようとしなない。

そもそも事件があった事すら多くの生徒は知らない。

事件を知っているのはサスケ、ナルト、俺、ヒナタ様。

詳しい事件の内容まで知っているのは俺とサスケだけ。

おそらくはダンゾウあたりの根回しだろうが、ナルトとヒナタ様に関してはおそらくサスケの意志だろう。

サスケだって、俺を放ったままヒナタ様と笑い合えるクズではない。
い。

ヒナタ様とも色々あつて、今の形に落ち着いているらしい。

何の説明もないままナルト達とサスケの交友が続いているのは、逃避とも取れるサスケの行動を2人が受容している証。渦中にある俺の干渉はその均衡を崩す危険を伴う。

俺はこの後班のメンバーと修行を控えている事を口実に、その場を去った。

「ネジよ……お前にはテンテンもリーも居る。気に病む事は無い、熱い友情に全力で向き合えば、それが一番だと俺は思う」

修行場に向かう直前、俺の背中にガイ先生はこう語りかけたが、友情がどちらの方を指すかは判らなかつた。

夜、修行の帰り道にそれは起こつた。

暗いので白眼を使っていたのだが、視界の端に闇夜を駆けるある人物を目撃した。

そいつの腕には一抱えある巻物が掴まれており、今日という日付に違和感を覚えた俺はアカデミーの屋上へと向かつた。

そいつを尾行しなかつたのは、体力に不安があつたのとあれを使うべきか迷つたからだ。

アカデミーの屋上には既に、多くの里の中忍と上忍が呼び寄せられていた。

集まつた木の葉の精鋭達に対し、三代目火影が緊急の任務を言い渡す。

「封印の書が何者かによつて盗まれた。里の忍にはその搜索と、犯人の特定を任務とする。これは緊急を要する任務である。また、犯人である可能性が高いナルトを拘束せよ、以上。散！」

精鋭達は一斉に動き出す。

俺は即座に一樂へと向かつた。

「ダイナミック・エントリー！」

お祝いムードに包まれる一樂、そこへ割つて入ろうとした俺を更に割つて入つて来たのはマイト・ガイだつた。

「ウゲー！めっちゃゲキマユな奴が来たつてばよ!？」

「ナルト、汚い！」

「ガイさん!?それにネジ君まで、食べに来るならもうちよつと落ち着いて下さいー！」

「それには及ばん、少しナルトという下忍を連れて行きたい」

言うが早いのか、ナルトを抱えるガイ先生。

ただならぬ気配にサスケとヒナタ様が応戦に入る。

ヒナタ様の掌底は簡単に捻って投げられ、サスケの上段蹴りは木の葉昇風をくらい反対にサスケが飛んでいく。反射で倒す、圧倒的な早業だ。

良心的なのは、両者屋台の外に吹っ飛ばしてる所くらい。

いつの間にかナルトの意識まで持って行ってるし、信じられない手際の良さだ。

唾然とするイルカに、ガイ先生は歯をギシャーンと輝かせて「じゃ」と一言。

イルカが一拍遅れて弁明を求めると、彼まで小脇に抱えて去って行った。

後に残ったのは、災害に巻き込まれた一楽だけである。

とりあえず倒れた席を戻し、気を失った2人を介抱する。

2人ともしつかり受け身は取れていた。取れていたのにこの有様、対応出来なかつたら死まであつたな。

さすが上忍最高、影レベルの実力者……俺はあそこまで強くならな
いとナルトに嘘をついた事になるのか。

1人恐々としていると、一楽のおっちゃんが申し訳なさそうな顔を
して言った。

「その、お勘定……」

卍

ナルトが目を覚ますと、そこは檻のなかだった。

檻の外には、こつちを睨む数人の大人の姿。

いつもの目だ、とナルトは呆れた。

なんだって一体、俺をそんなに嫌うんだってばよ？

てかてか、今はそんなのどうでも良い。

ヒナタやサスケ、イルカ先生はどうなった？

ネジは、おっちゃんは、それにここは何所だってばよ？

どうにか聞き出して、ここを出ねーと。

ラーメンが伸びちまう!!

「ナルト！目が覚めたのか!?良かった、無事で」

ナルトに気付いたイルカは檻に近寄る。

無事って……俺ってば、檻に入れられて全然無事に見えねーんだけど？イルカ先生そういう所あるよなー。

「ってかそうじゃなくてーここは何所で、何があったんだってばよ？」

檻の前で屈むイルカに教えられたのは、衝撃の事実。

禁術を記した封印の書が盗まれ、自分が容疑者筆頭になっているという事。

ナルトはここ数年ネジが怪我を負ってからというもの、人に修行をつけるネジと同じ立場に立ち「このままではいけない」と自分を律し、悪戯から足を洗った。

それなのに、存在すら知らない禁術の巻物を、どうして盗むというのか。

聞けば十年ほど前にも一度、巻物は盗まれたらしい。

であれば、十年前に里の外に持ち出せなかった何者かが十年越しのリベンジに来た可能性だってある。

十年前の犯人も見つかっていないのに、急にナルトに矛先が向くのは釈然としない。

「それは、ほら……意外と自明だから、十年前の犯人。お前もその真似をして、巻物を盗んだんじゃないかって話になってな？」

「なんで俺が知らねー犯人の真似事なんかしなきゃなんねーんだ!?おかしってばよー!」

「し、知らないって言われてもなあ……」

イルカは苦笑するが、ナルトには本当に心当たりがない。

ナルトは悪者をイルカの後方で自分を睨む大人達だと決めつけて、

睨み返す事にした。

「そうして半刻が過ぎようとしていた時、事態は動き出した。うたた寝していたナルトは微かな物音に起こされた。」

ナルトが目を覚ますと、檻の中を監視する部屋に見知らぬ忍が入ってきた。

全身を黒い忍装束で包み、顔は狐か猫の様な仮面をして隠している。

怪しい奴だ、直感でナルトはそう悟った。

怪しい忍は、ナルトを寄越せと低い声で言う。

忍の所属を知っているらしい見張りの忍は、どうしてとか誰の命令だとか言って、斬られた。

壁に血が飛ぶ。胴体をバツサリと斬られた忍はのたうち回り、血の染みをいくつも作って絶命した。

その間にも、応戦しようとした忍が次々に斬られていく。

一通り殺し終えた怪しい忍がナルトの方へ歩いてくる。

ナルトは恐怖に半狂乱になりながら泣き叫ぶ。

怪しい忍びが檻の錠前に手をかけようとした時、血まみれのイルカが待ったをかけた。

「お前、暗部の忍だな……！誰の差し金だ、目的を言え！」

胸を切られ、血を滴らせながら檻と暗部の忍の間に入るイルカ。

暗部の忍は、しかしこれには答えた。

「誰でもない、俺個人の判断だ……そのガキは生きているだけで木の葉を危険にさらす。俺がそいつを殺すのだ」

「なんでだってばよ！」

噛みついたのはナルト。

「なんで……なんでお前らそんな、俺を嫌うんだってばよ!?!いつも厄介者扱いして、睨んで、しかも殺そうとして！なんで皆、ネジみてーにしてくれねえ？俺が何をしたんだってばよ!?!」

絶叫するナルトに、冷めた口調のまま忍は笑う。

「後生だ、教えてやろう……十二年前、木の葉を半壊させた化け狐の事

は知っているよな？その事件の後、里にはある掟が作られた……お前に教える事を禁じられた、里中でお前だけが知らない掟だ……お前の正体が化け狐なのを、お前に悟らせない掟だよ。お前は憧れの火影に封印された拳句、里の皆にずっと騙されてたんだよ！お前は確かに、悲しい、哀れな奴だ。でもしようがないよな？どんなに悲しくても、健気でも、哀れでも……お前の本性は、化け狐なんだもんかア!?それにイルカア！俺は知ってるぜ……お前の父親は、十二年前、こいつに、この化け狐に殺されたんだろ？……善人ぶってないで白状しちまえよ、こいつが憎いつてな！殺したいほど憎い、親の仇だつてなア！」

絶句するナルトに、イルカは何も答えない。
ナルトは心のままに、イルカの名前を呼んだ。

「そう……だつたかもしれない。こいつが、ナルトが本当に化け狐だつたらな」

暗部の忍は低く唸った。

「俺は知ってるぞ……ナルト。努力家で、一途で、いつも修行を頑張っていたな。そんなナルトに教室の皆は引つ張られて、いつも授業が楽しかったよ。おい暗部、お前はナルトに、里の皆に騙されていたと言ったな？でもそんな事をしていたのは頭の固い大人だけだ……ナルトの周りにいる子供たちは、皆どこかでナルトを尊敬していたし、認めていた。そこに嘘なんてなかった。ナルト、お前は俺が認める立派な生徒、木の葉の里のうずまきナルトだ……！」

舌打ちする暗部の忍。

「つまらん……どうせお前も死ぬのだ。そんな台詞、どうでも良い」
刀にゆつくりと手をかける。

振り下ろす直前、天井を突き破って降下した回天に阻まれ忍は吹っ飛んだ。

即座に、降下したヒナタ様はイルカの止血にまわり、サスケは檻の錠前を外しにかかる。

「暗部……根の者か、どうせダンゾウ辺りに命令されたんだろ？あいつ、いつも要らん事しやがる」

「お前……何者だ!？」

吹っ飛ばされた忍は俺に問う。

「俺か？……木の葉流忍者、日向の天才、妖怪大将、今最も火影に近い下忍……日向ネジだ!!」

—

時は半刻、遡る。

復活したサスケとヒナタ様に、俺は全ての事情を説明した。

「犯人はおそらくミツキ、アカデミーの教員だ。これから可能な限り早く捜索して、巻物を奪取、捕まったナルトを解放する。捜索に当たっては白眼を使う。影分身を用い、ヒナタ様が今できる限界の八体、俺の限界の十五体の総勢二十三体で里全体をできる限り捜索し、可能なら遊撃する。半刻後までにサスケのいる一楽前に集合して持ちよった情報を精査するが、戦闘音が聞こえたら全員でそっちに向かう、良いな」

「待つて。つまり遊撃が発見の合図にもなっていますが、ネジさんは、その……」

二人は苦い顔をする。

……しようがない。あれを使うか。

「それについては問題ない。奥の手がある。……準備に三年、調整に一年費やしたが、この忍術さえあれば、俺は復活する。……忍法、白毫の術”創造再生”」

三年かけて額に溜めたチャクラを全身に流す。

繊細なチャクラコントロールで体細胞分裂を活性化させ、傷を治すのではなく”再生”させる。

医療忍術ならぬ再生忍術。これが俺の秘策だ。

テロメアの消費に変わらないから奥の手としてきたが、今日この瞬間を逃す気はない。

肺が再生していくのを感じる。呼吸が楽になってくのを感じる。

むしろ四年間の鍼灸と造血丸摂取によって強化された俺の呼吸機能のおかげで、昔よりも身体能力は強化されているだろう。

「大妖怪卍白影、復活だ！そして——散！」

総勢二十三体の俺たちは闇に消えていった。

木の葉広しと言えど四十六の白眼による索敵から逃れられる奴はそうそういない。

原作で下忍相手に成敗された奴なら、なおさらだ。

発見したのは俺。

復活後の練習相手にはちようど良いだろう。

「ダイナミック・エントリー！」

「!?」

掛け声と共にミツキの前に参上する。即、柔拳の構え。

「何かと思えば、日向ネジ、お前か……この巻物を持つている所を見られたら、生かしては置けないな？落ちこぼれの天才一人鬪るのは造作もないが……ちよつと心が痛むなあ？命乞いでもしたらどうだ？」

「お前ってそこまで小物悪役だったっけ？」

「なんだと、このクソガキ！」

言葉と共に投げられたクナイを額あてで受け、懐に入り込む。

小悪党なミツキは俺の動きに置いてけぼりをくらっている。

叩き込むのは”白毫の術”会得後にできた技。

点穴に流れるチャクラを増減させ、あるいは止める事で相手の経絡系から破壊する柔拳の特性を”白毫の術”のチャクラで何千、何万倍にも引き上げてできる技。

これを食らった相手は、あまりの速度に流れが圧縮された自身のチャクラに耐え切れず、経絡系が爆発的破壊現象を引き起こし、最悪内臓がミンチになって死に至る。

その術の名は——

”北斗八卦・爆殺六十四掌！”

ミンチになると言ったのは、点穴に込めるチャクラの量やついた点穴にもよる話で、今回の様に表皮の六十四の点穴を軽く突いただけなら、相手の体表がつるりと剥ける程度の威力である。

元にした技の威力を考えれば「あべ死」しなだけで優しい……よね？

「ネジさん怖いです。ていうかミツキさん生きてます？これからその人を真犯人として持って行かないとナルトの無実は証明できないんですよ？」

「俺は持つて行きたくないぜ。そいつ……触りたくない」

集まってきた2人もこの通り。

うるさい。2号に持つて行かせるから良いじゃん。

なんか2号が両手でバツ作ってるけど、ちょうど白眼の盲点だから見えてない。

俺2号に気を失ったミツキを担がせ、白眼でナルトを探す。

サスケをチラ見すると、顔には微笑を浮かべていた。

俺が修行をつけた時の様な、少年の好奇心を感じさせる顔。

昔の顔だ。何か吹っ切れたな。

かくして、俺2号だけ深夜枠のネジ御一行様はナルトのピンチに駆けつけたという訳だ。

格好良く登場した俺達に根の忍は圧倒された様子。

主人公ムーブって奴だ。

「くっ……日向の変態が……！」

「自己紹介聞いてました？もしもーし……まあ良いか。お前、派手にやってくれた様だがこの後どうするつもりだ？ダンゾウに使い捨てにされる腹積もりだったのか知らないが、生憎真犯人を連れてきた。犬死にご苦労。お前は終わりだ」

「そうだな……それで良い」

忍が自身の忍装束を剥ぐと、中の体に巻かれた大量の起爆札が一斉に作動した。

ここまで織り込み済みだったか。

「これは……生きて居るのか？」

「ピンピンしてます」

多くの忍が火事の火消しに追われる中、俺は三代目にミヅキを差し出す。

大戦を経験した火影様でも生死が判別つかない怪我人が居るらしい。

「今回の真犯人はこいつです。もりのイビキにでも差し出せばスツと全部吐くでしょう」

「この状態の怪我人を拷問にかけるつもりなのか？」

「その方が逆に目が覚めてちよūd良い」

「……そういえばお主、なぜ拷問尋問部隊の隊長の名を知っている？」

「そうだ、こいつを捕らえたのはナルトという事にして下さい。あいつの境遇も少しは楽にしてやりたい」

「悪名が広まりそうだが……そしてお主、儂の質問に」

「そこは情報統制しましょう。里の忍の為です。やってくれますね？」

「……ああ……その様にするが、お主」

「それでは、さよならです」

俺は影分身を解き、消える。

お得意の「実は俺2号でした」って奴だ。

卅

「それでは！イルカ先生の退院を祝して！」

「！！！！いただきますーすー！！！！」

数日後、イルカは無事退院した。

祝いの席が一楽なのはご愛敬だ。

俺の奢りなのが気に入らんが、流石のナルトも退院したての先生に奢らせる事はしないらしい。

まあ良いか、一楽でバイトしてる分身の懐は温まる。

俺は久しぶりって事で、四年間の思い出話で持ちきりだ。

イルカが主役だったのに、全く。

「それで、このウストラトンカチの説明が全っ然わけわかんなくてよー

……ネジ？何してるんだ？」
俺は造血丸をかける手を止める。
……あれ？

第八話 友達の友達は兄弟になる

日向分家の朝は早い。

教え子達が手を離れ新米下忍となった今、俺は任務の合間を縫って鍼灸医療の研究に邁進していた。

この前の動乱の後、俺には住み込みの研究室”白庵”しろあんが与えられた。

俺は下忍ながら、柔拳と鍼灸の複合医療忍術の第一人者として本家に認められたのである。

そう、体よく物置小屋へ追い出された。

何が白餡だ。包み隠そうとしてんじゃねーよ。

そんなこんなで、俺は今日も新発見したツボを巻物へと書き写す。

点穴と鍼灸のツボは酷似している為、白眼と実験体さえあれば楽なお仕事である。

難しいのは実験体の方だが、それも犬塚キバ君がいる。

彼は先日重傷でここに運びこまれ、運んできたヒナタ様が「品性を疑う犬畜生です。叩き直して下さい」と預けていった悲しき少年である。

キバは何をやらかしたのか。品性を疑うとは何か。俺を何だと思っているのか。

色々言いたかったけど怖かったよね。

俺を縛る呪印の使い方はヒナタ様に伝わっている。

俺の処遇はヒナタ様の気分次第なのだ。

本当に、そんなに俺が怖いかヒアシよ。

俺はお前が怖い。

そうしてヒナタ様とキバだけが入り浸る様になった白庵だが、今日は珍しく来客があった。

実にミヅキの一件ぶりとなる、ナルトである。

背中に布で巻かれた大きな巻物を拵えて、会っていない間に成長した様だ。

原作の装備には無かったが、今日び興味すらわからない。
俺も転生者として長いし、これくらい原作改変に驚く事はない。
キバとの挨拶もそこそこに、ナルトは申し訳なさそうに切り出した。

「さっきまで俺、波の国つて所に行つてただけだよ……少し見ても
らいたい奴がいて」

波の国……ストーリー的に次は中忍試験か。

俺とガイが一年間鍛えたチーム。ガイ班は不遇キャラばつかだし、
中忍試験で下剋上といこう。

弟子達にも師匠の貫禄つてのを見せておかないとな。

木の葉の最強はこの俺だ。それを直々に教えてやろう。

いや違うな。

決め台詞は後で考えると、今はナルト。

波の国編で診てもらいたい奴……負傷者？

波の国の負傷者と言えば……もしやサスケか!?

「わかった、早く診せろ！すぐに鍼灸で治す！」

「千本はもう刺さってるんだけどよ……」

「知ってる！」

マズった。今のサスケなら白の10人や20人サクツと倒せると
思っていたが、過信しすぎだったか。

ナルトは背負っていた巻物を置き、布を剥がし始める。

なぜ巻物？と思ったが、よく見れば巻物は人型。

巻物だと思っていたのは布でぐるぐる巻きのサスケか？

管理が雑すぎるだろ。

千本で串刺しにされた仲間になんて事をする。

いや待てよ？これ本当にサスケか？

ナルトやサスケの実力は共に一線級。

下忍が三人一組スリーマンセルを組む時は各班の力が拮抗する様に作られる筈。

ナルトとサスケが同じ班なんて蛮行も良い所だ。

という事はこれはサスケではないのか？

じゃあ知らん奴か？

ナルト、俺の弟子以外の扱い狂ってんのか？
布の最後の一層が解かれる。

あらわになつた顔をキバが横から覗き込んだ。

「誰だこの綺麗なねーちゃん？」

ねーちゃん？いいや、こいつは男だ。

そうか……死んでなかったのか。

「こいつの名前は白。霧隠れの抜け忍だつてば」

「キバ眠れ！」

咄嗟の裏拳がキバをぶつ飛ばす。

「馬鹿野郎このナルト馬鹿野郎、もうちよつと隠せ！キバに聞かれたらどうするんだよ!？」

「キバなら大丈夫かなつて」

「アウトだよ！お前と同等のド級バカだよ！吹聴して回るよ！」

「捻じ伏せられるし」

「仲間！キバ、仲間！」

でもさ、とナルトが指した方にはキバが壁にめり込んでいた。

やっべー。白毫の術を忘れてた。

「ま、まあキバは丈夫だからオツケー。とにかく事情を話せ。何があつて、俺にどうして欲しいのか」

「ああ。出来るだけかいつまんで話すから、何かあつたら質問してくれ。白の後処理も頼むつてばよ」

後処理と言われ白を見てみると、首に二本千本が刺さっている。仮死状態のツボだ。

やっぱり狂気を感じる。

中

ナルトの話は大体以下の通りである。

タヅナという男の護衛任務で波の国を訪れたナルト達を待ち受けていたのは、霧隠れの鬼人・桃地再不斬だった。

認識外からの投擲、樹木に刺さった断刀・首切り包丁、その上から

小隊を見下す大男。

カカシも奥の手である左目の写輪眼を使うと言っているし、ナルトは彼を格上と認識した。

おそらくはカカシと同等以下。ナルトにはきつい相手だが、タヅナを庇いつつ確実に仕留める為には遊撃に徹するべきである。

そう感じたナルトは、影分身を展開し陽動に出た。
って、ちよつと待て？

「おいナルト。間違いじゃなければ、木の葉を出た所で二人組の忍の奇襲にあったと思うんだが。ちなみに白眼だ」

「ん？ああ、霧隠れの鬼兄弟って奴等になら会ったぞ。サスケが業火球で炙って倒した」

「サスケ居るんかい。なんでサスケと同じ班なんだよ、どっちもナンバーワンルーキーだろ」

「それがさー俺ってばサスケの為、毎日毎日アカデミー休んでまで修行をつけてたつてのに、サスケもヒナタも影分身なんかでズルしやがって！まったく酷い話だつてばよ」

「力量に対して要領が酷いな………続きを聞こうか」

影分身を使い陽動に出たナルト。

再不斬の動作は素早く、水遁・霧隠れの術を決められてしまった。ナルトが再不斬を見失った濃霧の中、サスケが火遁・業火球の術を放つ。

照らされた再不斬の人影にナルトは担いでいた鬼兄弟を投げつけた。

まだ持ってたのかよ。

再不斬の戦闘術——無音殺^{サイレントキリング}人術は音で相手を探知して攻撃する。

人型が飛んでくれば反撃するのは当然。そこをカカシが捉え、ナルトとサスケも続く。

視界不良の中、眼にも止まらぬ速度で近距離の打ち合いが続き、再不斬の捕縛に成功した。

倒せてるじゃん。

「倒せてるじゃん！」

「いやー本当、カカシ先生とおんなじくらい強かったってばよ」

「同じくらいって……そういえばお前、カカシの鈴取り修行の時はどうしたんだよ？白眼で見たんだが」

「白眼で見てたんじゃないのかよ……。あの時はカカシ先生も本気じゃなかったし、サスケと俺で連携してたら取れたってばよ」

「取れたんだ……」

「イチヤイチャパラダイス取ったら交換してくれた」

「鈴より高難易度な物取ってんじゃねえよ」

「サクラが縛り上げられそうになったから、それは無いだろうって抗議したら合格って言われたってばよ」

「自来也なら亀甲縛りしてたな」

「ジライヤ……誰だってばよ？」

「お前とそりが合わなさそうなおっちゃんだよ。早く続きを聞かせろ」

だんだん楽しみになってきた。

再不斬は追い忍に扮した白が千本で殺した風に回収したのだが、サスケはそこに一家言あるらしい。

「桃地再不斬は絶対に死んでいない！千本は医療用の忍具で、抜け忍を追いかける追い忍は人体のスペシャリスト。追い忍なら千本を使つて人を仮死状態にするなんて簡単に決まってる。俺は千本使用に関して誰よりも詳しい。あいつらは全員狂つてやがるんだ。平気で仲間に人体実験をして、間違ったら死ぬ様な事もふざけ半分でやっちまう奴らだ！今度会う時にはきつと再不斬も実験体になっているはずだ！」

サスケはほとんどヒステリーの有様で不穏な事ばかり言っている。カカシが「かもしれない」と言ったのを妄信しているのだ。

確かに再不斬の様な抜け忍を始末する追い忍が、わざわざ捕縛された再不斬の首に千本を刺し、重い死体を持ち帰ったのは気になる。

でもサスケがこうなるなら黙っていて欲しかった。

カカシは写輪眼を使った反動で動けないし、タツナもガトーから守らなくてはならないのでしばらく彼の家に厄介になっているのだが、こう毎日毎日言われると辛い物がある。

まず何故千本使用に詳しいのか聞きたいが、ナルトはサクラに水面歩行の術を教えなければならぬ。

次もまたあいつらと戦闘になった時の為、サクラにはもう少し動ける様になって欲しいというカカシの指示だ。

突貫工事の修行だが、サクラはチャクラコントロールの飲み込みが早くすぐに木登り修行が完了した。

水面歩行もクリアすれば中忍レベルの基礎はマスター。少しは戦える様になるだろう。

サクラの修行が済んだら場所を森に移してサスケとの組み手に移る。

ナルトとサスケ、影分身体で小隊を組み団体戦だ。ネジに教わった修行法を今の彼らなりに発展させた形である。2人とも消耗が激しいので終わったらその場で眠りにつく。

そんな生活をしていた時、ナルトは白と出会った。

突然だが、ここでナルトの話を少々割愛させていただく。

内容としてはほぼ原作通りだったし、男にドギマギするサスケが可愛かっただけで特に面白味もない。

それに少年の性癖を曲げるようなやり取りを俺の口で綴るのはやりたくないのだ。

被害者が言っているんだ。勘弁してくれ。

時は、後に「なると大橋」と呼ばれる橋の上での決戦へと跳ぶ。

「あああ！千本！千本が体中に！千本千本せんぼんせん——」

千本が体中に刺さったまま、サスケは身を屈めた。

千本を抜こうとしているが、震える手は千本を掴む事すらできない。

こうなってしまうっては仕方がない。ナルトは次の攻撃に備えた。追い忍は血継限界と呼ばれる特異体質。

血継限界——氷遁は空気中の水分を凍らせ氷を作る。

追い忍は氷遁で作った鏡の間を光速とも思える高速で移動する忍だった。

さらにここは”氷遁・氷岩堂無”ひょうとん・ひょうがんどうむで作られた鏡のドーム内。

いくら影分身してもすぐに消され、鏡を1, 2枚割った所で抜け出せない。

絶望とも思える状況下だが、それでもさつきまでは善戦していた。

写輪眼を開眼したサスケは敵の動きをある程度見切れていたし、敵の千本でツボをついて体力を回復して「俺は天才だ」と叫んだ時には勝ちを確信するほどだった。

しかし相手の早さに圧倒される限りは消耗戦であり、陽動のナルトのチャクラが付きた時点で負けが決まる。

そして実際にサスケは倒されたのだ。

追い忍の攻撃が来る。

チャクラの尽きたナルトに迎撃の術はない。ナルトは終わったかに思えた。

「ナルトに千本を立てるなア！」

瞬間サスケが放った大出力の業火球はナルト共々”氷岩堂無”全体を吹き飛ばす。

ナルトの意識は、一時闇に飲まれた。

「起きてください、ナルト君」

ナルトを呼ぶ白の声に、覚醒したナルトは全てを悟った。

追い忍は白であり、白はナルトを庇い片足を失っていた。

「ナルト君……僕は君達を殺したくなかった。再不斬さんに殺せと言われたのに……僕の負けです」

「そんな、白！なんでだつてばよ!?再不斬は悪い奴なんだぞ!」

「再不斬さんを悪いとは言わせない。再不斬さんは父親を殺した僕を赦し、僕を育ててくれた。道具として僕をお傍においてくれた。それがどんなに嬉しい事だったか、君に解りますか?」

そんなのは間違っている、ナルトがそう言う前に白は何かを見て駆けだしてしまった。

白が向かった方向。そこには忍犬に動きを封じられた再不斬と、右手に多量の雷チャクラを圧縮するカカシ。

再不斬の最期の瞬間である。

白は再不斬が殺される前に身を楯にカカシを止めようというのだ。

ナルトは”ひじゅつまきようひようしよう秘術・魔鏡氷晶”を用い移動する白を全力で追う。ギリギリで間に合ったナルトは再不斬を庇う白を気絶させ、カカシの術を受けた。

左肩に痺れる様な激痛。

見ればナルトの肩にカカシの拳が埋まっていた。

「白め……使えない道具だ」

再不斬が不意に漏らした言葉は、ナルトに強い怒りを感じさせた。

途端ナルトの体表は血の様な赤いチャクラに包まれ、あまりのチャクラ圧にカカシの拳は弾かれる。

赤いチャクラはナルトの左肩と白の片足をより濃く包み、患部を治癒、再生させていく。

その光景に言葉を失った再不斬に対し、ナルトは問う。

「白と話して解った。白にとつてのお前は、俺にとつてのネジなんだ。だから俺は！白を道具としか認めねえお前が憎い！再不斬……白はお前に道具として使われる事が嬉しいと言った！お前を庇って死のうともした！お前はそんな奴見て、ただの道具だと思えるのかよ!?」

前の中で、白は本当にただの道具なのかよ!?!」

しばしの沈黙。

再不斬はナルトと白を交互に見て、言った。

「やめだ……そんなモン、お前にやるよ。小僧、カカシ……後は任せ

た。里には、鬼人は死んだとでも伝えておけ」

そう言い残して、再不斬は消えた。

波の国から金を絞っていた再不斬の雇用主、ガトーの訃報が伝えられたのはその翌日の事である。

「俺は気絶した白を担いでここまで来た。里に入る時仮死状態のツボを突いたのはサスケだ。俺ってば再不斬が何を言いたかったのか解んねえ。でも白を放つとけなくて、なんとかして貰いに来た」

ナルトはそんな調子で話を纏めた。

ナルト。サクラが可哀想すぎるぞ。

サクラが一人置いてけぼりくらってるのがよく解った。

なんかナルトはサクラの事好きじゃないっぽいし。

後々の映画で「ナルトがサクラを好いたのはサクラがサスケを好きだったから」みたいな説明されてたけど、こうなると好きであって欲しかった。

サクラに救いが無い。

血筋と良い師匠に恵まれた人柱力の天才と、それと切磋琢磨して成長したうちはの闇抱えた天才。そして無名忍者の家庭から出た女（俺ノータッチ）で班とかいじめに近い。

イルカは何やってるんだってばよ!?

まあやらかしたのは俺か。

そんでまた俺に権力使わせるつもりかよ。

俺、日向家の権力使う度扱い悪くなってるとんだが？

分家の本家を追い出された俺に、まだ我儘言えってか。

今度は里から追い出されそうだ。

しかも再不斬存命報告出たし。

つまり俺がここで白を見限ったら最悪、俺の死因がサイレントキリング無音殺人術になる。

人生色々あったけど、未だに死兆星の輝きが衰えない。

「そうですか。僕は再不斬さんに捨てられたんですね。もう用済みですか……再不斬さん」

いつの間にか起きていたのやら、白がむくりと起き上がった。

精気が感じられない表情と、わなわなと震える体。瞳は虚空を見つめている。

初手自害しそうな勢いだ。

「止める白エー！お前は俺の新しい光だ！生命線なのだア！」

「は……!?!」

おつとまずい。間違えた。

「白、違うぞ。お前は再不斬によって守られたのだ！」

「……何を言っているんですか、貴方は!?!僕にとって再不斬さんは全てだった！再不斬さんだってそれを知っていた！僕も再不斬さんも知らない貴方に、何が解るといいますか!?!」

「解るさ！お前が知っているのは、霧隠れの鬼人・桃地再不斬だけだ！違うか？鬼人・桃地再不斬は死んだんだ……お前を残し、俺達に頼むと言ったのは利用価値がないからじゃない。もっと純粋な感情だ」

「……何が言いたいんですか？」

「愛だよ!!」

子供を抜け忍の道から遠ざけ、真つ当な道を歩むチャンスを与える。

そんなの、純粋な親の愛情に決まってる。

生き残る為とはいえ、本心だった。

原作ですれ違った二人の関係、二周目の俺が正してやる。

俺はやるだけやると決めたのだから。

「ひゆうがモモ
日向百？」

俺から渡された戸籍票を見て、白——百は首を傾げる。

百はカカシの遠縁で、日向分家の養子にした。

はたけ家はここ二代で成り上がった家だし、白の存在は霧隠れ以外にはほぼ知られていないのでバレることは無いだろう。

ダンゾウ辺りが要らん事したらやばいけど。

ちなみに、俺がこんなに勝手にできたのは家の親バカ親父のおかげである。俺もジュインジュインされるだけで無罪放免だった。

「お前の偽名だ。抜け忍の証の横一線、それと読みは桃地再不斬からとった。不満か？」

なんてな。男だから一本足したなんて言えない。

「いえ、凄く素敵……前から聞きたかったのですが、何故僕に優しくしてくれるのですか？」

「火影が俺の夢だから。火影は皆に認められる存在。一族とか里とか、そんな物に縛られる器じゃない」

ダンゾウとかね。

百は目を潤ませ、大きく息を吸った。

「決めました。僕、もう一度忍者になります。そしていつか水影になります！再不斬さんが胸を張って僕の所へ帰ってきてくれるような、素敵な里にしてみせます！」

「……良い夢を持ったな」

俺はナイスガイポーズで答えた。

死兆星、未だ健在！

卍

今宵は特殊な半月だ。

上弦でもないし、下弦でもない。まるで絵にかいた様に真つ二つ。なんというか、デカい板で半身隠してあるだけの月の様な。

というか変に輪郭が凸凹していて、板というよりは断刀・首切り包丁だ。

近づいてみれば、刀の脇に男もいる。

サンタさんかな？

木の葉にもサンタさんっているんだなあ。

半月の横にサンタさん……しまらねえな。

庵に煙突は無いし、ただの不審者だろうな。

いや、ただの不審者にしちやあ日頃返り血で染まってそうだな。

まさかマダラか？

早い早い。

疾風伝後半まで退去願おう。

じゃあ誰かと言えば、もう百二十人は殺してそんな無音殺人術のおっさんだ。

「再不斬さん……何やってるんすか？」

「その……白……」

「とりあえず、屋根の上とかじゃなくて入りませんか？」

「フラグたてるのはムズいのに攻略クソ簡単なのな。」

「気まずくて中に入れちゃったが、その後3時間みっちり二者面談である。」

「そういえば、どうやってこの里に来たんすか？」

「行商の酒樽の中に入ってやりすごした」

「警備雑すぎるだろ。」

「と思ったが、イタチと鬼鮫がお団子食べに来られるくらい手薄だったな。」

「日向は雷の国の忍者を撃退しているというのに。」

「防衛においても日向は木の葉にて最強か。」

「しょうがない、ジュインジュインで通行証を手配してみるか。」

第九話 ネジとイビキと試験官

うずまきナルトは人柱力である。12年前里を半壊させた九尾の妖狐の、いわば入れ物であり、故に嫌われ者であり、だから悪者扱いをされている。妖狐が鬼子へと化したものの、化したモノノケが差別対象なのは原作に相違ない。せいぜいナルトの隣に日向もつとやばいのの変態がいる程度の違いで、そこから生まれた差など微々たる物である。

例えばお面屋のおつちゃん——アニメの無限リピート回想のせいで、売るより投げる印象が強い——がナルトを見てはお面の在庫を投げつくして大赤字を出す生活に肩を壊し、今では店を畳んで通院生活をしていたり、あるいは出自不明の大量のお面を転売して荒稼ぎしていたナルトが、今では買い手がなくなつて新規事業を模索しているくらいの違いである。些細で些末な違いである。

いやマジで、最近肩を壊した人が心療内科に殺到して診察2時間待ちとかナルトに潰された店が巷で上納金呼ばわりされるとか色々聞くんだけど、頭下げるべき店は全部閉まつてるし心療内科は休日アッパークットの某遊園地に匹敵する賑わいで近づけないし、そもそも俺悪くないしでお手上げなのだ。ナルトに鋭いお手上げが入ったのは言うまでもない。

本人不在のまま白影の悪名だけが独り歩きしている状況に、半ば勘当状態の本家は「狐につままれたんだろう」と冗談みたいな冗談でお茶を濁している。

なんと吹きこんだのはヒナタ様らしい。悪い冗談は続くものだ。

曰く「秘孔で素直にさせた所をサスケの幻術にはめた」らしいが……もはやヒナタ様じゃねえなこれ。我らがヒナタ様は「ナルト君」以外の言葉を知らない引つ込み思案お嬢様の筈だ。父親を昏倒させて素直と言いつ切る女のどこが引つ込み思案だろうか。貴賤問わずそんな娘がいては全国のお父様方が卒倒する。これが週刊連載の少年誌ならPTAの出勤を待たず俺自ら編集長を殴り伏せている所だ。そんな漫画は俺が打ち切らせてやる。

悪評もこう悪事千里とあつては直接文句を言いに来る輩もない。百第八話参照。白の事。と二人暮らしになつた白庵には今日も閑古鳥が鳴く。最近キバも来ないし、夕食の席で百と話す事だけが日常の楽しみとなつていた。

「いいかげん造血丸をスパイス代わりに使うのを辞めて下さい……味は良いんですが体が火照るのはどうも」

世間の風当たりが厳しい中、(今世では)自炊を始めて間もない俺の食事に文句を言ってくれる同居人の存在は嬉しい。俺は自分の皿に造血丸を盛る手を止め頬を緩めた。

「好き嫌いな。血は力だ。忍の知力、体力、瞬発力は体内を循環するヘモグロビンの力。忍の命を握るのは使える技の強さでも持つてる術の数でもない。血の練度だ」

「目を疑う行為をしながら耳を疑う発言をしないで下さい。血の練度とか初めて聞きましたし、忍の命以前に義兄さんの握ってるそれは劇薬です。ふつうにその摂取量はやばい」

「普通が取り柄の俺に何を言う」

「普通が取り柄を自称する人は既にマイノリティです」

「ならば痛風を取り柄としよう」

「普通の逆は痛風でもないし、痛風が取り柄も普通じゃないです。食事中にまどろっこしい事言わせないで下さい。舌を噛んで出血多量で殺しますよ?」

「死なないよ?舌を噛まれても舌を噛まれた程度の出血だよ?出血少量だよ?……大体13歳相手に変な脅しをするなよ。噛むって、俺の健全な舌を、お前の口で啜えて歯で傷をつけるって事だぜ?」

「……変態ですね。御見下しました、義兄さん」

「見下すなよ。殺した俺を見下すなよ。お前は何にも知らないだろうが、お前には想像以上の読者ひがしやがいるんだぞ?俺は数多の屍を代弁しているんだ」

「変態だ……あの、流石に妄想癖はマズいと思いますよ?僕、身の危険を感じたらすぐにでも再不斬さんに言いつけますからね?あーあ、こんな事ならお義父さんのご厄介になるんだった」

「なに？俺に惚れ込んだんדר？」

「面の皮が厚すぎますね。僕は男ですし、今ので義兄さんに惚れる事は無くなりました。実は本家のヒアシ？様に千本を使ったのがお義父様にバレてしましまして、話し合いの結果事が明るみに出る前に白庵こゝろに流される事に。まあナルト君の為ならしようがないかなと」

「……ヒザシよ、それで良いのか」

物語が確実に怪異譚として成長している。実父に追い忍の――死体製作と処理専門の忍の千本を食らわす女とか都市伝説ってレベルじゃない。

「そうそう。義父様に提示した交換条件を忘れていました。これ、飛び級の推薦書です」

「なぜだろうか。弟子達の手で日向が手玉に取られていく。俺の家なのに」

「手玉なんてそんな恐れ多い。なんと言いましようか、手間を取らせて手間賃を取っただけです」

「表現を選んだ事で事態の深刻度が増した。呪印が無いともうダメだなこの一族」

「それで、アカデミーを飛び級して現職の忍になるには色々と署名が必要なんですが……僕、義兄さんに書いて欲しくて。署名は中忍以上の物が欲しいんですけど、もうすぐ中忍試験だつて聞いたので」

「それは構わないが、飛び級なんて三代目がよく許したな。過保護なのに」

「顔パスでしたよ？代わりに『ネジよ。これ以上ナルトを木の葉丸に近づけないでくれ』と懇願されました」

「またしても俺悪くないし……」

そうか。俺は全然触れてなかったが、その辺の進行は原作通りなのか。全然触れてなかったのに俺の所為になつてるのは癪だし、今のナルトに育てられた木の葉丸も気になるので放っておこう。

放っておけないのは大暴走中の弟子達の方。このままでは本家のヒナタ様や白眼を持たない百までも呪印が施されるのは確定路線だろうし、そうなればナルトやサスケも黙っていない。最悪うちはの如

く日向一族皆殺しだ。二度とネジの様な者を出してはいけないと急進派のダンゾウが食べ放題気分て兵を駆り立てて来るに決まってる。上げ膳据え膳で主人公食い放題である。土に還れ。

最悪な未来を回避するためには、弟子達が里にとつて有益な事を証明する必要がある。内ゲバにしか使われてない実力を公に示し、不利益を帳消しにして超過する収益に昇華させる。策は一つ。

中忍試験合格者全員俺の弟子——圧倒的なシナリオでストリーご都合主義すら捻じ曲げてやる。

卍

つつても週刊連載、格好良い台詞まわしも話を跨げば噛ませ犬——なんて事はよくある話。俺が忘れていたある重要事項を思い出したのは、共に中忍試験を受ける俺、リー、テンテンの三人で試験前の最終確認をしていた頃合いだった。

原作ネジはこの中忍試験にて登場し、強キャラの風格を遺憾なく見せつけた後ナルトの噛ませ犬へ転落したのだが（初登場時から不遇なのはご愛敬）、問題は今回の試験にナルトがいるという所。単行本の表紙にでかかど記されたロゴを見る限りNARUTOの主人公はナルトであり、主人公が参加するイベント——即ちストーリーイベントと超展開は必ずセットでやってくるのがジャンプの掟である。

そう、俺を遥かに超える変態のおじさん（51歳）の襲来だ。

中忍試験の候、木の葉崩しの訪れに候。

大蛇丸、もとい変態のおじさんは生ける木の葉の伝説“三忍”の一人である。”三妖”の元ネタにあたる”三忍”だが実力はネタにできない。強キャラであり、登場から原作終了まで強キャラであり続けた変態優遇キャラである。ちなみに三忍の内二人は変態だ。

全ての術を究める為に里を抜けた夢見がちなおじさんは、逆恨みで木の葉を潰す事を決断、グローバルに開催される中忍試験に乗じて里内に潜入し、一目ぼれしたサスケの首筋にキスマークをつけて誘惑した後、合同開催国である風の国を抱き込んで木の葉崩しを発動、その

手癖の悪さを咎めた三代目の死と引き換えに全ての術を失うというストーリーなのだが……おじさん大蛇丸のせいで試験はメチャクチャ、結果木の葉崩しでの活躍も含めて中忍が選ばれる事になってしまう。

試験中どれだけ助力しようが、最後は弟子の殺るや気で決まるという事だ。

伝説級の戦いは俺も未知数、弟子の血が騒ぎ過ぎなければ良いが……いやまだおじさん大蛇丸と戦闘するとは限らないけれども。限らないけども、真っ先に一番強い敵に飛び込む馬鹿共しか育ててない気もする。うーむ。

「どうしたの？珍しく浮かない顔してるじゃない。あ分かった、また可愛いがってるお弟子くん達の事考えてたんでしょ？」

テンテンが横やりを入れる。原作より距離が近いのは、俺が原作ネジよりも女の心が解るからなどでは決してなく、単純な出会いの違いによる所が大きい。やはり初対面で「鍼灸教えて」と言う様な、マニアックな武器を語り合える仲というポジションが好印象だったのだろう。むしろ原作ネジはテンテンの事を格下と見限っている様な冷淡さがあつた様に思う。だから仲間ができないんだよ。

俺の自己嫌悪(?)をよそに、楽しそうなのがもう一人。

「ウオオー！いつも話しているナルト君達の事ですね！燃えます！戦いたいです！」

「リー、うるさい。そんな単純じゃないんだよ師匠って。知らないうちに弟子が増えてるんだ」

「それはネジ君だけです！」

めいめい忍具や技の確認が終わり、中忍試験のエントリーを済ませる。仲間の士気が高まる中、俺は不安なままだった。

忍者アカデミーの講堂の一室——中忍試験一次会場の扉を開けると、そこに堆積する一触即発の空気が雪崩れた様に俺達を飲み込んだ。顔、顔、顔……新参者を観察する殺気だった受験者達の表情は、この試験の過酷さを物語らない。……うん、はつきり言っただけ。全然怖くない。老若男女これまでの中忍試験を見てきた、もとい落ちてき

た歴戦の雑魚無能の凄み顔なんて不細工極まりない。常に修羅場を生き、台風の目となってきた俺としては「え、俺の実家の方が怖いよ？」と言ってあげたいくらいだが、ここは稀代の天才として野暮な事はせず、目には目で返すとしよう。”白眼”！

「うおおおお！よろしくお願いしまアつす！ビシ！」
無粋な奴が邪魔をした。

「……おいリー、空気読め。いま俺が凄む所だっただろうが。ほら見ろ、お前が訳わからん擬音語と共に意外にも礼儀正しい直角お辞儀を披露した事で、皆反応に困り気を使って目を合わせてくれないじゃないか。あまりの気まずさで俺渾身の白眼が見向きもされていないじゃないか」

「大丈夫です！皆さんが目を合わせてくれないのは、ネジ君渾身の白眼が気持ち悪いからです！凄みバツチオーケーです！」

「なんでだよ格好良いだろ白眼！こっち見ろ！おい！」

「リーもネジも、ちよつとは空気読みなさいよね」

テンテンも受験者も頭を抱えているが、ここまでの展開はおおむね予想通り。

今回の中忍試験は木の葉での開催。受験者は半数が木の葉の忍とくれば、俺達があのガイ班という事はすぐに判った筈だ。班結成から一年間、俺とガイ先生によつて徹底的に鍛え上げられたガイ班は俺の代にて最強。容姿こそ全身緑タイツのリーに、全身緑タイツ（の上に原作衣装）の俺、全身緑タイツ（の上にチャイナ服）のテンテンと、変な服が多いこの世界ですらアホなコスプレイヤー扱いをされる俺達だが、アホなコスプレイヤーが最強なんて大半の忍からすれば悪夢でしかない。

逆に他里の忍で頭を抱えるでも一笑に付すでもない忍がいれば、それは実力者の証明となる。

音忍三人衆、砂三人衆、薬師カブト。索敵完了だ。

なぜ音忍三人衆まで？とは思うが侮ってはいけない。原作でも忘れられがちな彼らだが実はかなりの実力者が混ざっている。ドスだ。音を武器にして直接三半規管や脳まで叩く攻撃は強力。耳を塞いだ

所で体内の水分を音波が伝って攻撃する為”攻撃を受けない”事以外の対策はなく、ドスの間合いに入れば俺でも苦戦を強いられるだろう。原作でも中忍試験終盤で砂の人柱力に倒されているし、作者が扱いに困った感も否めない。

原作通りに進めば俺達は衝突しない。しかし今までむしろ原作通りに進んだ方が珍しいので、というか無いので危険視して問題はないだろう。石橋を叩いて壊して水面歩行。忍界の諺だ。

とりあえず近場の席に座って試験開始を待つ。他のルーキー達も続々と集まってきた。

エントリーナンバー1、^{クレナイ}紅班。

所見：幻術を究めて上忍へとなったクノ一、夕日紅の受け持つ班。感知のできる万能型の忍者が集まった印象。

構成メンバー。

その1、日向ヒナタ。言う事なし。魔改造品。

その2、犬塚キバ&赤丸。ヒナタ様の怒りを買って俺の弟子となったが、その詳細は不明。敬語も含めて色々教えた。感知も可能、攻撃力も申し分ないが、その器用さを地頭の悪さが邪魔している。もはや相棒の忍犬、赤丸の方が頭が良い。しかし底上げた体術技巧はナルトに匹敵する逸材なので運が良ければ結果を出せるだろう。魔改造済み。

その3、油目シノ。正直存在を忘れていた。なんだっけ？影薄いんだっけ？一族秘伝の忍術が強力だった気がしなくもないが、とりあえず純正品なので大した事はないだろう。多分。

エントリーナンバー2、アスマ班。

所見：三代目の息子の上忍、猿飛アスマが受け持つ班。猪鹿蝶と呼ばれるコンビネーションが強力。

構成メンバー。

その1、山中いの。心転心という精神乗っ取り忍術が得意。サクラと共にヒナタにぶっ飛ばされた仲間。おそらく純正品。

その2、奈良シカマル。影真似という自身の影を使って相手の動きを制限する術が得意。原作では今年唯一の合格者となった。IQ200。純正品。

その3、秋道チョウジ。倍化の術という巨大化術が得意。デブって言ったらキレルデブ。純正品。

エントリーナンバー3、カカシ班。

所見：木の葉一番の業師、はたけカカシの班。上忍最強が持つ主人公の班というご都合主義の塊みたいな班。

構成メンバー。

その1と2、ナルトとサスケ。主人公補正+魔改造というドリムコンボ。補正值高すぎて気づけば原作改変する奴ら。魔改造済み。

その3、春野サクラ。俺の人生最大の被害者。上2人の修行によって水面歩行までは出来るらしいがだから何だと言うのか。チャクラコントロールが出来てもそれを活かす大技がない。原作と違い別段ナルトに好かれておらず不遇ヒロインですらない。……本当にサスケとくつつくのか？

キャラの濃いメンツも揃った所で、原作が動き始める。ここからの進行は知つての通りだ。

まずルーキー達が周囲の目も忘れてじゃれ合いを始める。いのがサスケに「やつほーサスケ君」と抱き着いたり、キバが「俺はお前らには負けねえ」と見得を切ったりだ。

「やつほー！サスケく……え、ヒナタさん!?受験されるんですか!?!嘘……いえ何でも！サスケ君もナルトさんも今年ですし、同期だし当然ですよ！ええ、だからその、こ、こころ殺さないで」

「いのちゃん待って。命乞い待って。会う度に言ってるけど殺しに来てないから。命乞わなくて良いから。昔の事は私が悪いって決着ついたし、女の子同士もつと気楽にタメ口で仲良くしようって言うてるよね？キバもその方が良いでしょ?」

「はい！自分もヒナタさんには昔御手を煩わせてしまいました、今

でもこうして御傍に置いて頂けて」

「黙れ」

「はいー」

おかしいな、ナルトってこんな胃がキリキリする話だっけ？

ヒナタ様ヒナタ様？あんなに悪い顔してた受験者さん達、みんな画像みたいな顔になってますよ？

あ、ひよっとしてお気づきでない？

どなたかこの中にお医者様はいらっしゃいませんか？胃が千切れそうなんです、助けて。

そこに胃薬、もとい薬師カブトが登場。自分が音隠れもといおじさん大蛇丸のスパイである事は伏せ、木の葉の良いお兄さんキャラで悪目立ちするルーキー達を窘め、多生の縁で受験者の情報を教えてくれる。

「あの……君達、周りを見た方が良いな……本当。胃が千切れそうだ」
うわ同じコメントしてる恥ずかし。才能といい器用さといい、ネジは少しカブトと似ているのか？……造血丸食べます？

受験者の情報を聞いて武者震いするナルト。次の瞬間、受験者全員に向けて名乗りを上げる。

「おーいネジ！俺はぜってえー負けねエぞ！！先に火影になるのは、俺だあー！！」

何故か俺に対してのメッセージ。立ち上がるリー。リー!?

「すごいですナルト君！激熱です！この大勢を目の前によく言いました！うおお！僕も負けないぞおー！」

「おう！受けて立つってばよ！誰だ!？」

大勢の前でがっしりと握手をする二人の姿がそこにあった。

え、初対面だよな？昨日まで俺との会話の中でしか出てこなかった奴と握手するってどういう情緒？ガイ先生に何教わったの？空気の壊し方？

なかなか面白い絵面だが、面白くない人物が三人。カブトに自里を「小国」と説明された音忍三人衆である。次の瞬間、カブトを里主大蛇丸の側近とも知らず、ドスが殴り掛かる。そうそう、無力なナルトは動けも

しなかつた筈だ。

「ゴフツ——！」

「え……？」

「あれ、今のつてばもしかしてカブトさんの知り合い？」

「いや……」

「お前らしい加減にしろオ——！！」

俺は天井に突き刺さったまま落ちてこないドスを見て、声の限り叫んだ。

卍

「俺は一次試験監督の森乃イビキだ。拷問尋問部隊の隊長をしている。いいか、既に遅かつた様だがこの試験では武力行使は全面禁止だ！禁止！二度目は無い！……というか、俺が居なかつたとは言え好き勝手暴れ過ぎなんだよ。うずまきナルト！開始前に他里の人間を潰すな！日向ネジ！だからってルーキー共を殴り伏せるな！貴様ら、この試験が終わった後でこの荒唐無稽な有様を始末書に書き記す俺の気持ちがわかるか!?明日には上司にどやされながら暗記した謝罪文を口走り、拷問されている人間の声を聞く事になるんだ！タイムカードも切らずにだぞ!?!」

……どブラックじゃねえかというツツコミはさておき(首突つ込むだけ損だ)、一次試験のペーパーテストは何事もなく実施されるらしい。天井からぶら下がってるドスと彼をぶち上げたナルトを前に何事も無いのはどうなんだと言いたくなるが、そこは説明前で譲歩してくれる優しいサディストである。

冷静に考えてイビキ、二つ名「サディスト」を許容してるマゾだからね。当然だ。

「痛みはコミュニケーション」とか「痛みは嘘をつかない」とか言つてたし。

ペイン編のアニオリだけど。

しかもペインは裏切つただけだね。

イビキは一次試験の内容を説明し終わると、一つ大きな咳払いをした。威厳だそうとしても今更だよ？

「最後に一つ。今日はもう一人特別な試験官様が来て下さった。この試験の内容はその方を通して里の上層部も知る事となる。受験者諸君は各里の名に恥じぬような行動を心がけよ。それではお入り下さい」

特別な試験官？原作に無かったぞ？誰だろう、察しがつかない。特別上忍のイビキが敬語を使う相手だし、里の上層部には間違いないだろうが……なんだあいつは!!

呼びかけに応じ杖をついて入ってきた老年の男に俺は目を見張った。顎に椎茸の様なペケ印の古傷を持ち、その威光たるや歴代の影に並ぶ様でもあり、ナルトにすら劣る様でもある奇妙な男の風格に一瞬にして魅せられたのだ。妙に気品ある佇まいは和装によって隠された右腕や包帯に巻かれた右目の様な上つ面の装飾に帰結せず、包帯の内側には若者の様な力強いチャクラが見受けられたし、隠された右腕をなお隠す嚴重な封印はそこに内包されているであろう武勇伝がわざわざ語られる事すら野暮な英雄譚である事を雄弁に語っていた。

しかしどうだろうか私の慧眼をもってしても、いや白眼を見張れば見張る程包帯の内側の眼はうちの写輪眼の様であり、封印の下には右肩から続く初代火影千手柱間の細胞が隠れている様である。これではまるでダンゾウである。いいやいけない、彼は里の上層部ながら試験官という末端の仕事まで行う人物。そんな彼にダンゾウっぽいという汚名を着せる訳にはいかない。しかして顔を見るがやはりどこことなくダンゾウである。どこことなくというか、耳も口も鼻も眼も顎の傷もますますダンゾウである。何故これほどまでにダンゾウに似てしまったのか、ダンゾウにさええ似なければもっと偉大な人物となっていただろう老人は悠然と俺の前を通り抜け、受験者全員に向き直ると重々しく口を開いた。

「試験を拝見する。志村ダンゾウだ」

「ダンゾウだ!？」

声出しちゃった!？」

慌てて口を塞ぐがもう遅い。

他の受験者は俺の奇行に巻き込まれたくない一心でそつと目を伏せている。問題はダンゾウ。急な出現に驚いて咄嗟に我を忘れ、声を荒らげる——それは、認知が禁止の敵に一番やっちゃあいけない事だ。

志村ダンゾウ。謎多き木の葉の暗部養成部門「根」を私兵化し、根回しと裏工作によって実質的に火影にすら匹敵する権力を持つブラックボックスの王。二代目火影に「里の不利益になるから止めろ（意識）」と言われた三代目との小競り合いを御年69歳の今なお続け、自らが薄汚い手で巻いた火種が繰り返し大火となって里を襲うのを静観しつつ全責任と後始末は全部火影に擦り付けて解決するという究極の要らん事しい。ちなみに作中の悪事はだいたいコイツが原因。もちろん俺が右肺を失ったのも、ナルトが暗部の忍に殺されかけたのもコイツが原因である。

そんなダンゾウに、俺は今猛烈に目をつけられているのだ。……物理的に。

こつち見んな、ダンゾウエ!! (イタチ顔)

「ほう……儂を知っておるのか」

ア……いや待て待て、おそらく返答を間違えれば未来はない。大丈夫、死兆星はまだ役目を終えずに輝いてる。返答さえ間違わなければセーフテイラインの筈だ。普通に、普通に……

「いひやつ……いや!初めて見ました!お初にお目にかかります日向ネジ、この面々の中貴方様の御目に止まった事を誇りに思います!だからどうぞ、お気になひやらず!」

よし、アウトオオオ!!

駄目だこりや。名前知ってた時点で察したけど、俺を殺すつもりだろダンゾウ?ダンゾウがこうして日のおたる所に出てくる時は暗殺か火影就任の日って相場が決まってる。どうせ次の瞬間にはネジ暗殺の密命を受けた根の忍が俺を取り囲んでリンチにするんだ。そうなれば俺は生存不可能。反撃空しく屠られるだろう。……しようがない、諦めて潔く木の葉を半壊させてから破茶滅茶にダンゾウに復讐

して散るとしよう。

ダンゾウは唇の端でうつすらと笑う。ついにここまでか。

「ほう……初めて見たか。たしかにここは人目も多い。後でゆっくり話すとしよう」

生き残ったアアア!?

生きてる！俺生きてるは良いけど後が怖いかも！人目が多いって何？後って何？ゆっくりって何!?あとダンゾウ君、初対面には見る前に知ってた的な意味はないよ!?

心の叫びも空しく、一礼したダンゾウはそのまま他の試験官達にならって講堂端に並んだ監督席に座る。具体的には、俺の真横に。

嫌がらせ止めてくれない!?

チートだ、権力チートだろこんな立地！俺の唯一使える転生特典を勝手に使うなよ!?

根は土に帰れ、ダンゾウエ!!!!

第十話 迷惑ハローワーク

中忍試験、第一次試験内容「ペーパーテスト」

ペーパーテスト、三人一組での合計点を競う物だが、各問題の難易度は下忍レベルを大幅に超えている。本当の合格条件は受験者の中に二人いる全ての回答を知る中忍から情報を盗む事。中忍に相応しくないカンニングを五回行えば失格となる。

そしてテストの最終問題は、試験終了15分前に明かされる。

正しくは、もし不正解ならば中忍試験の受験資格が永遠に剥奪されるテストを「受ける」か「受けない」かを答えるのが最終問題。「受ける」を選び中忍になる覚悟を見せた者が合格となる。

特筆すべきはこのテストの試験官がイビキである事。木の葉の拷問・尋問特別上忍である彼が監督する都合上、受験者が受ける物はパウハラや圧迫面接に等しい。彼の職場環境の悪さが窺える。

言ってみれば白眼お得意の情報収集戦であり俺が失格になる事はない。最終問題に関して弟子達が失格になる事もない。問題はカンニングだ。原作の様に白紙で突破する阿呆ナルトやそもそも手法がお粗末なカンリーとテン弱者は忍者辞めてるも同然であり、俺がバックアップする必要があるので。

俺は試験開始の号令と同時に白眼を使い周囲を見渡す。カンニングペーパーを作成してくれる全ての解答を知る中忍とやはらずぐ発見できた。

そして手からチャクラ糸を伸ばし、リー、テンテン、ナルトの手と繋ぐ。この糸は一次試験用に特別に開発したチャクラ糸。ヒナタレベルの白眼でしか見切れず、柔軟で強靱。おまけに存在はリーとテンテンしか知らない。この糸で中忍の解答を写す俺の筆跡を共有し、爆速で課題クリアまで持っていく。リーテンテンは俺と気づき、アホナルトは「俺つてば天才か!」くらいにしか思わない。そして試験官は俺が代筆していると気づけない。完全無欠の作戦である。

「ふむ。なるほど」

ダンゾウ お前さえ！ダンゾウ お前さえ居なければアア!! (発作)

見ればダンゾウ、親指を眼帯代わりの包帯に差し込んで隙間を作り、中の眼でこちらを注視している。秘匿された右目——お手軽国家転覆兵器、うちはシスイの写輪眼で。ボケんなダンゾウ!? それ持つてだけで外患誘致罪が適用されそうな代物だよ? 老眼鏡感覚で使っちゃ駄目だろ、お前がボケだしたら国際問題の收拾がつかなくなるだろうが!

森を見て木を見ず、木を見て向こう見ず。だから火影になれないんだ。

ダンゾウは思ったより阿呆だったが俺は天才である。天才であるからにはこの阿呆のポンのせいでドボンなんてトンでもない。どげんかせんといかんたい。

試験開始から十分余り。順当に脱落者が出る中、ある生徒は試験の本題に気づき始めていた。誰か、いやどこかに情報収集の標的がある筈……そう思い、こちらを睨む試験官に気を付けながらゆつくりと辺りを見回していた時、不意に鉛筆が折れる。思いのほか力んでいたのだろうか。若干の焦りと共に懐からクナイを取り出し、気づく。隣の生徒も、その前も、気づけば教室中のいたる所で鉛筆を削る生徒がいる。そうでない者は鉛筆を握ったまま微動だにしていない。そしてこの時、彼の脳裏には教室中の人間達と共通の間が浮かんでいた。なぜ三人だけ、とめどなく鉛筆を動かせる生徒がいるのだろうか——と。

そう。木を隠すなら森の中というなら、不自然な行動はより大きな異常事態で覆い隠せる。現状まともな受験者は三人、クナイを出す者達は何故か試験の意図に反する三択を迫られ、誰を選んでも試験に受かる破格の安心設計。穴だらけの試験に明日には試験官達の首が飛ぶだろう。さらし首だ。

実際三人の内中忍は二人だけで、もう一人は戦闘以外なら割と何で

もできるサクラちゃんのだが（そしてそれは忍にとって致命的な欠陥なのだ）この状況下で解答を進めるサクラは己の首が惜しい試験官達の注目を集め、白幕くろまくの存在を隠してくれる完璧な囷。サクラはいわば俺のチャクラ糸が織りなす茶番の花形という訳だ、サクラなのに。後は頃合いを見て書きかけの答案を仲間共々写し終えるだけ。俺は天才だア〜！

「ふむ。なるほど」

ダンゾウ お前さえ！お前さえいなければアア!!（発作）

ダンゾウから注意を背けたらダンゾウに注目される。俺つてば人氣者。しかしダンゾウに右目の秘密を知っている事がばれたら今度こそ殺されかねないので妨害工作は続行するしかない。転生者ゆえの不可抗力に胃が潰される中、天才の俺をさしおいて一時退室を願う隈取が現れた。砂の三人衆が一人、カンクロウである。

「すみません、ちよつとトイレに……」

「トイレは俺達が付き添う事になってる」

「なるほどね……」

以上はカンクロウが1試験官と交わした会話の一部始終。カンクロウは手錠をはめられて試験官と共に退室。体調不良ですらない所が腹立たしい全くの茶番である。カンクロウの忍術は傀儡の術であり、これは試験官に扮して潜り込ませていた自身の人形とやり取りしただけの人形遊びである。試験官を前にバレバレのままごとを披露する趣味をどうこう言うつもりは無いが、失格にならないのは驚きしかない。原作で合格したのはイビキ以外の試験官が全てカンクロウの傀儡だったりしたのではないか。いややそうに違いない。カンクロウなんていう一生サソリとチヨバアに挟まれてパツとしないモブ顔が試験に受かる筈がないのである。では失格にしよう。

俺はチャクラ糸の一本を伸ばし講堂の扉に鍵をかけた。鍵を持たぬカンクロウには中忍試験史上初の「トイレで試験を流した男」という汚名を贈呈しよう。目的遂行の最たる障害だった砂の三人衆は失格。木の葉崩しの少くない戦力を削ぎ落しネジ一派が中忍になる確率も上がる。特に我愛羅、お前が仲間仲間を潰すこともない。

これは余談だが、俺は活躍しない割に出番が多いカンクロウが嫌いである。その出番ネジ貰う。

しばらくしてカンクロウが帰ってこられなかった。

「あれ!? ちよ、おかしいじゃん。……お、おーい！ 開けてほしいじゃん！」

静まり返った講堂に扉を叩く音とカンクロウの声が空しく反響する。その頃には全員解答をすませていて、カンクロウの場違いな行動と試験官ごと締め出されるといふ状況に皆必死で笑いを堪えていた。ちなみに「くじゃん」というのは決してふざけているのではなく、カンクロウの口癖である。まったく変な奴だネジ！ 雑なキャラ付けはやめるんだネジ！

砂の一次試験突破も潰えたかに思われた。扉が爆音と共に黒板を割るまでは。

刹那、その場の試験官を含めた全員が試験を忘れ、反撃の姿勢をとって扉があつた場所へと向き直る。講堂後方の扉が前の黒板まで吹き飛んだ事実を鑑みれば忍として当然の判断だっただろう。しかし開放的になったそこにはカンクロウが呆然と立ち尽くすのみである。

「じゃ、じゃんじゃじゃん」

カンクロウのギャグは滑った。誰もほんの僅かにさえ笑わなかった。後悔で満ちた彼の顔は誰が見ても無関係だった。そして犯人として浮上したのは、この騒動で眉一つ動かさず、あまつさえ平然と拳手して自分の意見を通した男——我愛羅だった。

「茶番はいい。試験を進めろ、試験官」

眉が……ない……！ そんな事はともかく。

我愛羅と目が合った時、俺は俺の過ちを悟った。我愛羅は妨害工作の犯人に気づいていた。カンクロウの術を見ていればチャクラ系のトリックには気づきやすい。カンニングの際に俺と班員の筆跡が同じ事に気づいたかもしれない。……理由はどうあれ、俺は選ばれた。食材として、白餡ならぬメインディッシュとして。それはかつてイタ

チが俺に見せた様な、捕食者の目だった。

正

その夜。中忍試験史上初である44チーム132名が一次試験突破を言い渡され、木の葉の随所で高揚した下忍達が卓を囲む混沌とした夜。閑古鳥の鳴いていた我が白庵にも招かれざる客が顔を見せた。少年は俺と同じ年で自らをダンゾウの使者と名乗り、口癖の様に「チ○ポついてんですか?」と言った。まったく品性に欠ける。ダンゾウに円滑な人間関係の作り方とか教わらなかつたのだろうか。使者は百の淹れた茶には一切触らず、抑揚のない声で切り出した。

「ダンゾウ様が君をご所望です。根に入る気はありませんか?」

「単刀直入だな。……お前、ミスキを知っているか?俺が剥いた男の名だよ。すつぽんぼんじゃない、皮ごとズルリだ。丁度お前と同じくらしいの間違いにいた。……わかるよな?俺はお前等暗部が嫌いなんだよ、ナルトに刃を向けたあの日からな」

もちろん転生者と言えない本音もあるが、これが全て建前という訳じゃない。俺は本当にナルトを殺しにかかったダンゾウを恨んでいる。事実確認はとれてないが多分ダンゾウの命令だろ、あれ。

「意外とチ○ポついてるんですね。その暗部が目の前にいるのに凄いいこと言うなあ」

「チ○ポなら僕もついてますよ?」

「百、話をややこしくするな。あと頼むからお前は真面目キャラであつてくれ」

「しかしネジ君、ダンゾウ様もなにも無条件で君を迎えようという訳じゃない」

「お前はまず自分のキャラを真面目路線かギャグ路線のどっちかに定めろ」

「その男——百さん、いや白さんといいましたっけ?彼の面倒も暗部が見ましよう」

「……百をダンゾウの道具にするつもりか!?!」

再不斬に殺される!!

「待て！解った……道具は、戦力は俺だけで十分だろ？だから百は――」

「義兄さん!?!」

「よかった。事を荒立てずに済みます」

「待て、まだ話は終わってない！僕は嫌だ！義兄さんが道具になるなんて、僕は!!」

それでは、またダンゾウ様の下で会いましょう――変な気は起こさないで下さい。明日から始まる第二、第三の試験は見張りがつきますから、ダンゾウ様に君の全力を見せて下さい――そう言い残すと、使者は墨のようになって、床に染みこむ様に消えていった。二人きりになり、百は無言のまま一度だけ俺をぶった。俺は何も言わなかったが、百に二度と争いの道具になってほしくない思いは伝わった気がして、じっと燭台の熱を感じていた。

卅

「どうしたの？珍しく浮かない顔してるじゃない。あ分かった、また可愛いがってるお弟子くん達の事考えてたんでしょ？」

翌朝、昨日とまったく同じ問をするテンテンに実家の様な安心感を覚える。俺の実家は穏やかじゃないけど。

「お前って口うるさい幼馴染みたいだよな」

「あら残念、口うるさいは余計だけど幼馴染ではあるわよ。なんならアンタ、弟子ライバル以外で友達って私だけじゃない?」

「もうヤダ傷ついたおうち帰る」

「ふざけてんじゃないわよ」

「ウオオ――ここが”死の森”!木の葉の碧き野獣である僕にはホームグラウンドも同然です!っしやあー!やりますよー!」

中忍試験、第二次試験内容「サバイバル演習」

※注意!ここから先は死の危険がある為、同意書の提出が必須とな

ります。

半径10 kmを44個のゲート入口に円状に囲まれた第44演習場”死の森”を使用したサバイバル演習。

演習場内は毒草毒虫その他危険生物の巣窟となっており非常に危険。さらに過酷な事にそれらの生物の大半は圧倒的にデカイ。ただの樹木でさえ数十〜百mはある圧倒的なサイズ感、一部に人間が常食できるサイズの魚は見受けられるものの、基本的には「おまえら普段何食ってるんだ」と言いたくなる巨大生物が闊歩する非情な空間だと言っている。

受験者は1班ごとに「天」「地」いずれかの巻物が配られ、両方揃えて演習場中央の塔に持ってきた者から合格となる。早い話がなんでもアリの巻物争奪戦。必然合格者は半分以下になる。

試験時間は120時間≡5日間。その間は自給自足の生活を余儀なくされ、演習場内の先に示した様な自然環境を生き抜かなければならない。もちろん巻物を集めながら。

失格条件は試験時間を超過する事、班員が再起不能に追い込まれる事、試験中に巻物を開く事の3つ。どんなに辛くてもギブアップは出来ない。非情。

塔の中で巻物を開く事で上司の忍のありがたい話が聞ける。割に合わない。

塔の外で巻物を開くと上司にボコされて気絶する。気絶すると超危険な森の中で試験終了まで無防備になる。本当に非情。

しかも問題は、今回から演習場内のどんな生物より危険な変態のおじさん^{大蛇丸}(51)が登場するという事だ。さらに悪い事に、おじさんは変態だからうちの血を引くシヨタのサスケに首ったけでありナルト達とバッティングする気満々なのだ。変態とは実に救いようのない生物である。

二次試験監督者、みたらしアンの助言は「死ぬな」。NARUTO読んだ事のない人は気楽でいい。貰った「天」の書片手に、俺とリーテンテンは二手に別れた。

試験時間が5日間なら、普通一日目は水場の確保を優先するのがサバイバルの鉄則である。しかし逆に言えば全員が水すら満足に得ていない一日目は奇襲日和。演習場の地形を把握しきれていない段階での奇襲は最も効果が高いだろう。俺達も地形がわからない欠点は圧倒的なパワーで補うとして、索敵に重きを置いた方が巻物の収拾効率を上げるのは明らか。俺達が二手に別れたのはそういう理由からで、メンバーも索敵能力がなるべく均等に近づく構成だ。

と、いうのは2人用の建前。本来俺の白眼の視野はこの演習場をどこからでも見通せる程高まっている。別れた本当の理由はダンゾウが預けた躰のなっていない動物の世話をする為だ。俺はしばらく進んだ先で足を止め、振り返って反応を見る。案の定、小隊を組んだ暗部が姿を現した。面が可愛い。

「小隊を送ってくるなんて、ダンゾウ様もよほど俺を信用してないのかね？しかも送ってきた暗部は俺に殺気を振りまいて下手な尾行をする。どういう事です？根の先輩さん？」

「煩い。我らはもとより穩便に尾行するつもりはないし、貴様を認めるつもりなど毛頭ない。ダンゾウ様に献上する品だ、ここで殺される程度では悪かろうと思つてな。……ダンゾウ様もなぜこのような下忍如きを気にされるのか——まだ子供ではないか」

なるほどね。秘密主義すぎて連携がとれてないつてか。こんなのに好かれちまうなんて天才は辛いね。二人の暗部はそれ以上話すつもりはないと言わんばかりに抜刀し距離を詰める。その時俺達のすぐ脇から草隠れの下忍が飛び出した。暗部ですら一瞬動揺が走る中、他里の忍が戦闘中の今が好機と判断したその忍は戸惑うことなくクナイを構え、暗部に跳びかかった。

無意識に顔がほころぶ。俺はこの演習場を隅々まで見通せる。そう、草だろが虫だろが、移動する草忍だろが、草忍に変装した大蛇丸だろが。本来はナルト達に合流して相手をしようと思つていたが、ダンゾウも良い贈り物してくれた。ここで暗部もろとも消化できるなら好都合。大蛇丸に睨まれた根、死ぬしかないよ根、そうだよ根。迎撃態勢をとる中、俺の視界は白煙に包まれた。

「口寄せの術！」

気付けばリーとテンテンが隣にいた。大蛇丸を前にした以上死ぬ気で撃退すべき所を、運よく暗部への擦り付けに成功したのは僥倖。俺を口寄せしたテンテンには感謝の造血丸を贈ろう。

俺達は互いが口寄せ獣だ。班員全員で血の契約をして、いつでも好きな時に召喚できる様にしている。だから多少無理して離れても、こうしてすぐ索敵が完了した方に合流できる。たぶん入浴中のテンテンを口寄せとかもできる。絶対しないけど。

「他人を口寄せってラスボスみたいだよな。で状況は？」

「アンタのそれ誰にも共感されてないからね？」

NARUTO読んだことないのかよ。当然か。

「ほらあそこ、薬師カブトって人。昨日はイイ人ぶってたけど、アンタと同じでなんかヤバそうな雰囲気あるのよねエ……だからアンタに押し付けようと思って」

「蛇の道は蛇すぎるでしょ」

テンテンの指す方向には、たしかにカブトの班が水場を見つけて休憩をとっている。なんでラスボスから逃げた先にラスボスがいるんだよ、モブには荷が重いよ。

今でこそおじさん大蛇丸に従いスパイ活動をしているカブトだが、物語の進展に伴い蛇の脱皮よろしく次々に新しいキャラ付けと強さを見せ、最終的には世界大戦の首謀者となり、忍界大戦編のラスボスの一人となるような、八面六臂いや八岐大蛇な活躍をする作中指折りの危険人物である。蛇に折る指は無いくせに。

そんな未来で起こる2人对世界の戦争の話を差し引いても、彼の実力はカカシ級。具体的に言うなら、今の木の葉で三番目に強い事になる。ここ数年の俺が他人に修行をつけるばかりで目立った実戦経験を踏んでない事から見ても完全なる格上だ。しかし……しかしここでこいつを殺せば俺の生存率はある程度高まる。あの戦争でカブトの用意した戦力は大きい。今こいつを殺し終盤戦まで纏まった戦力を残せばわざわざ俺がヒナタ様を庇って死ぬ必要もなくなる。

別の肉壁、味方の忍術……解決策は多い方が良い。俺はしばらく考えてから二人に作戦を伝えた。ちなみに今の木の葉の忍の一番は三代目、二番目は先日カカシ先生との勝負（じゃんけん）で勝ち越しているガイ先生だ。何が言いたいかって？勝てば官軍って事。

「突撃イー！」

叫びながら、全力で地面を殴りつける。大出力のチャクラが込められた即席の地震に揺さぶられた地下水脈は近場の土を粉碎し、うねる大地と呼応して一帯の地形を大きく混ぜ返す。動物愛護団体が見たら卒倒しそうな絵面だが俺は天才なので問題ない。自然保護の観点は白眼の死角に置いてきた。勝負は一瞬、敵の混乱の内に決めねばならない。

俺の合図と同時にリーテンテンが跳びかかる。突然の地殻変動に対応が遅れたカブトの仲間——モブAとBでいいや、モブAとBはリーがそこら辺から引きぬいてきた樹木で意識ごと叩き飛ばされた。

地殻変動の瞬間飛び退いたカブトは木々を縫ってテンテンを襲う。俺とテンテンの声が重なった。

「秘術・口寄せ回し！」

口寄せの白煙の中、対面のカブトの攻撃を俺は躲す。”口寄せ回し”とは、俺がテンテンを呼び出す”口寄せの術”と、テンテンが俺を呼び出す”逆口寄せの術”、両者を同時に行い2人の位置を入れ替える俺考案の秘術。俺達がアカデミー時代から鍛えてきたチームワークは入れ替わりの一瞬で敵に生じる隙を確実に捉える。絶対必中のタイミングで繰り出される全身全霊六十四撃の拳撃は、死と敗北の絶対知となる。

「北斗八卦・爆殺六十四掌！」第七話参照。北斗百烈拳。相手は爆発四散する。

勝負は一瞬だった。一瞬で完膚なきまでについた——筈だった。

「君、何者？」

遠くの木々に叩きつけられ、血と脂に塗れた息を吐き、彼の特技である医療忍術を併用した超回復を行って尚、今にも煮崩れそうな体を紙一重で抑えている状態で、それでもカブトは生きていた。死に

かけとすら言えない惨い体で達観した様に笑っていた。認めよう、彼もまた天才だった。

「^{バケモン}大妖怪かな」

俺はゆつくりと近づく。油断ではない。それが天才と認められた者への敬意だと思っただけだからだ。かつて対峙したイタチの様に今の状態の奴を殺すのは容易いだろう。だがかつてイタチと対峙した俺の様にそこには重すぎる虚無感が付きまとう。出来るなら苦しめないツボで自然死の様に穏やかに殺してやりたい。俺は日向ネジ。木の葉の天才日向ネジ。その俺に見下す様に殺されるのではなく、認められて往生したという事実をせめてものはなむけにしたいのだ。俺は白眼でツボを慎重に確認しながら、ゆつくりと手にチャクラを込めカブトに差し出す。

「かかったなマヌケがア!!」

カブトが投げつけたのは「地」の書。俺は突然飛び込んできた試験の目標物に気を取られ、共に投げられた複数の閃光玉に対応できなかった。

「目が!?目がアアア!!ンアアアアア!!」

「ネジ君!」「かっこ悪っ!」

おいテンテン聞こえてっぞ!?

痛い痛い痛い、眩しい通り越して痛い!白眼の鋭敏な感覚作用を逆手に取られた!奴はどこだ!?

遠くの方で戦闘音が聞こえる。カブト、案外余裕じゃねえかこの狸め。蛇なのに狸め!

音がさらに遠くなり、聞こえなくなって暫く。呼吸の荒いテンテンが駆け寄ってきた。

「ちよつと、アンタ大丈夫!?……さっきの柔拳はやり過ぎよ、下手したら死んでたわよあいつ。まあその体で私とリーから逃げられる力量があれば納得だけど。とにかく巻物はゲットしたわ!だからほらしっかり!」

「白眼の……集中……白眼の一番デリケートな時に……!涙が止まらない、全米の涙が」

「全米って誰？」

「ジョークが通じない……！」

—

よ。久々登場、俺2号だ。今日は塔に向かった本体に代わって、可愛い弟子達の様子を見に来た。もちろんナルト達の方。いやヒナタは可愛いんだけど、怖さの方が勝つとか全然思っていないんだけど、正直実家でもないのに会いたくない。1日目も終わるこの頃、赤丸とかいう非常食のいるチームよりサクラとかいうお荷物のいるチームを心配するのは私情ならぬ必定。サクラが悪いとは言わないが、もしあいつらがおじさん大蛇丸に襲われてたら不安が残るだろ？カブトの戦闘から白眼の調子が悪いせいもあっておじさんの居場所は目下不明。まあおじさんの戦闘は目立つし大丈夫だと思っただけだな。

本当なら本体が来たがってたんだが、どうせ塔でダンゾウが待っているので戦闘になった時への配慮だ。午前中の暗部二人の件もあるし、上手い言い訳を考えつつも恙つがな無くないとは思っ。噛んだ。木の枝づたいに跳び回っているから噛みやすくしてしようがない。忍の移動方法ももうちよつと楽なのが良かったな……と、ナルト達発見だ。

「おうサスケ！魚いっぱい獲れたってばよ！これなら保存用も合わせて試験中はもちそうだ！」

「流石だナルト、こっちはもう火の準備できてるからメシにしよう。一楽のラーメンほど上手くはないだろうが、この環境下なら御馳走だぜ」

「ねえナルト、サスケ君……本当に私何も良かっただの？サスケ君がダミーも含めて仮拠点を作ってる時も、私座って見てるだけだったし」

「いーのいーの！サクラってばまだ俺達が修行つけ始めたばっかなんだから！俺とサスケにまかせて休んで、バリバリ強くなるんだってばよ！」

「ああ。今夜は何も考えず、俺特製のツリーハウスでぐっすり眠れ。木の葉っぱとかで布団も用意してあるんだぜ？」

うわあ……文化レベル高いなあ……。

ツリーハウスっておま。試験中そんな所に居を構える奴がいたら俺でも近づかんわ、怖いし。まさかの所で正解導き出してんなあ、こいつら。

「ま、元気そうで何よりだな……」

「そうね。私もそう思うわ」

「おかしいな背後から大蛇丸の音がするぞ？」

瞬間、背後から感じるイタチ以来の重厚な殺気。確かに大蛇丸らしい。殺気のキレはイタチが勝るが、不気味さでいったら数段上だ。

「ふふふ。ご無沙汰。私の事も知っている様でなによりだわ。この頃は家のカブトが世話になった様でアリガトね、日向ネジくん」

「なぜ俺の名を？」

「なんで知らないと思ってるのよ」

「……サスケじゃないの？」

「あの子はアト」

そう言っただ蛇丸は俺の首筋に噛みついた。得体の知らないチャクラが流入してくる感覚と焼ける様な痛み。大蛇丸の呪印特有の副作用で全身が苦しい。影分身体では到底耐えきれない。

お前も俺狙いかよ！世界一嫌なディープリキスだな！消える前に言えたのはそれ限りだった。

卍

深夜。死の森の木々だけが、カブトと大蛇丸の話す声を聞いている。た。

「無様ね。アナタがそこまでやられるなんて……よほど手練れと見えるわ、あの子。なんならアッコより強いんじゃない？」

「大蛇丸様の元お弟子様でしたっけ、あの試験官の。確かに彼女よりも強そうではありましたが」

「やられただけに鼻厘するわね？確かに私に齒向かって無駄な抵抗をしたアンコよりされるがままだったあの子の方が強く感じたのには驚いたわ。実際どれくらい差があるのかは私も興味があるわね」

「申し訳ありません。大蛇丸様——こちらもチャクラがほとんど無い中でなんとか逃げ出した状態です、彼の実力がどれほどかは測りかねます」

「いいわ。別に気にしてないし。あの子……下忍の分際で、私は勿論アナタの事まで知っていた様な気がしてならないのよねエ……いたい何者なのかしら」

「わかりません。ただ——いえ、なんでもありません」

「何。はつきりと言いなさい？それくらい私の私語は許すわ」

「ただ、ボクの印象になるのですが——あれはおそらく、ボクよりずっと大蛇丸様側の何かかと」

第十一話 けだし木の葉崩し崩し

大蛇丸出現の一報から四日後、これを事実と認めた三代目火影はすぐさま中忍試験に関わる忍達を招集し緊急対策会議を開いた。ピンゴ・ブック手配書での危険度はS級とされ、木の葉への侵入を許した時点で戒厳令が発令される本来のおじさん大蛇丸対策マニュアルからかなり鈍化した対応であったのは、おじさん自身が中忍試験の続行を要求したからである。曰く「サスケくんの体が欲しいの。もうちよつとサスケくんが頑張つてる所を見てウズいてほしいの」と。これがただの生理的に気持ち悪い話ならおじさんは国際犯罪者ではなく国際変質者として扱われるべきだろう。物理的に血生臭い話だから戒厳令が出るのである。誰かこいつを呪印呪印しろ。

事実確認の為死の森に入り、実際に大蛇丸の要求を聞いたみたらしアankoは発言する。

「大蛇丸は中忍試験を中止すれば木の葉を潰すと言っています。私は伝言役として生かされましたが、演習場内で奴と交戦した暗部4名はそれを報告する通信の最後に死亡を確認。おそらく奴は本気でしよう。……というか、なんで暗部の仕事がこんなに早いのかしら？ いつも地中に引きこもつてる根が水を得たようね、ダンゾウ」

ダンゾウ——木の葉のドブラックボックスこと暗部養成所”根”の取締役は答える。

「中忍試験は重要な国家事業の一つ。我々”根”も警備部隊を編成し試験に貢献する旨は猿飛にも伝わっておる。まあ所詮我々は裏方、末端の特別上忍は知らなくても業務を遂行できたろうがな」

「答えになってないわね。私は何故演習場内部に暗部がいたのかを聞いているのよ」

ダンゾウを鋭く睨むアankoを三代目が制止する。

「今はそこを論じる場ではない。結果的に彼ら暗部の犠牲が大蛇丸の早期発見に繋がったのは事実じゃ。それより気掛かりなのは大蛇丸の目的。奴は僕の弟子でありながら、里に離反し見なくなつて久しい抜け忍じゃ。呪印を施されたうちはサスケの事も心配じゃが、いくら

奴でもまだ13歳の少年欲しさに長年訪れなんだ里に戻ってくるとは思いたくな……思えん。どうじゃ、お主はどう考える？」

話を振られ、一般下忍の俺は答える。

「なんで俺がここににいるのか判りません」

錚々たる顔ぶれの中、俺にこの嫌がらせを仕掛けたダンゾウだけが一笑した。

卅

「大蛇丸と交戦した儂の”根”の暗部達の緊急通信から、戦闘に巻き込まれた下忍の存在が判明した。しかもその下忍は暗部達も死んだ戦いから単独で生還し、そのうえで演習を続行。わずか50分で二次試験を突破した。大蛇丸の手中から逃れる片手間で、歴代最速記録を4時間47分も塗り替える快挙を成したのだ。——お前だ、日向ネジ」

と、いう事になってるらしい。この男の脳内では。確かに大蛇丸とは戦ったし、逃げおおせたし、試験を続けたし、巻物集めたし、50分でクリアしたし、疑いようのない快挙だし、思い返せばダンゾウの言ってる事は9割がた事実だけれど、それでも俺を巻き込まないでほしい。たぶんこの状況は俺が悪いけど俺を巻き込まないでほしい。俺が悪い状況に俺を巻き込まないでほしい。

「俺またなんかやっちゃいました？」

「やり過ぎだな。満場一致でこの場にお前を呼ぶことが決まった」

史上初めてダンゾウがツツコミにまわった。嫌がらせとか言っちゃってごめんね。でも俺がここに呼ばれた要因ほとんど偶然なんだから、逃げられたのも50分でクリアできたのもあの時俺を口寄せしたテンテンの功績なんだわ、だから一般下忍枠はテンテンに譲りたいんだわ、俺が一般なのは一端置いといてそうしてほしいんだわ。

「わー！」

「とぼけるな。儂や猿飛にそれが通じると思うのか？不甲斐ない日向の当主と我々は違う。それが影の器量という物だ。わかるだろう」

白影?」

……だからって一介の下忍に大蛇丸の目的が解ってたまるか! 流されそうになったけど流石におかしいだろ。確かに派手に生きてきたし里の上層部もさぞ俺を問題視している事だろうとは思っていたが、まるつきり特別視の域じゃねえか。13歳に国の頭2人と大蛇丸が首つたけ? そんな国は滅ぼされるべきだ。間違いない。

……待てよ。もしかして俺、この場において最強なのでは? 緊急会議で里の表裏両方の最高権力が俺の味方してくれるんだぞ? 俺は今、実質この里を手中に収めたんじゃないか? それはずまり、ここでの確に舵を取れば国が俺を社会的な平穩に導いてくれるという事。平穩……月並みだが悪くない報酬じゃないか。喉から八卦六十四掌が出るほど欲しいじゃないか!

「くくく、ふふ……良かろう。この天才日向ネジ、謹んで答えよう」

「せめてもう少し畏まれ」

さあて、転生者の特権の時間だ。

「わざわざ中忍試験中に来て続行を要求してきたのが気になります。呪印を施すだけなら試験に固執する必要はない。そして”木の葉を潰す”という言葉——もし俺が木の葉を潰すなら、各国の要人や忍に紛れて木の葉崩しの戦力を紛れ込ませられるこの機会を逃す事はない。観客が大量に来るトーナメント式三次試験。そこには目的である木の葉の中心人物も、人質として申し分ない各国の大名連中もいる。肉壁や脅しの材料に事欠かない立地、加えて市街地に巨大な口寄せ獣でも放てば木の葉の戦力は分散せざるを得ない。木の葉崩しはそこに成りましょう」

場が凍り付く。ダンゾウが「卑劣な」と漏らす。お前に言われたいはない。三代目も苦々しげに言った。

「やはり中忍試験は中止、いや無観客での進行とするしかないか……」
「違いますよ、それを利用するんです。——この作戦は三次試験会場が天王山。そこには火影様や各下忍チームを指導する上忍、そして俺の弟子達もいる。ここが最も堅牢で勝利に直結する難関だ。ここを抑えるには、相手も相応の戦力を出す必要がある」

「まさか……来るのか？」

「はい。間違いなく大蛇丸はここに来ます。つまりこの勝負、いかにして大名を餌に大蛇丸を釣り仕留めるか——逆を言えば、これ以外に大蛇丸討伐の道はありません。あわよくば捕獲して脳から情報を抜き取り、^{シメ}メて死体換金所にでも持っていけば国富の足しにもなりましょう」

再度場が凍り付く。ダンゾウが「卑劣な」と笑い、三代目が顔を歪ませる。

「ネジ、お主……なんというかその、殺伐としすぎておらんか？」

「やだなあ、家庭の事情ですよ」

「日向がおかしくなったのはお主の代からじゃが？」

「ぐうの音も出ない。ぐう」

「息の根からやかましい……」

べ、別にそうすればサスケが里抜けなくなるとか穢土転生の術を盗めるとか考えてないんだからね！ただ生き延びたいだけなんだからね！人生ハードモードなんだから！

結局ネタばらしの効果は絶大で、俺の提案した流れで大蛇丸に対処する事が決定。話された内容は他言無用として解散となった。俺は試験クリア後早々に三代目の召集で仲間とはぐれたので、何か上手い言い訳を考えようとした束の間背後の暗闇から何者かに肩を掴まれた。お化けかと思っただけより怖いダンゾウだった。

「日向ネジよ。作戦立案とそこまでの誘導の手腕、見事だった。やはりお前は俺の想像を超える逸材だ。試験中お前に遣わした暗部達から大蛇丸確認の報告が来た時も驚いたが、お前が暗部達をそこまで誘導しなければ事はより大きくなっていったやも知れん。根の一小隊を消費したが、英断だった。お前には根への加入後相応のポストを用意しておこう」

……そんな意図はないが。

「それはそうとダンゾウ様、対大蛇丸戦が俺の案でいくと決まった以上、御身にも戦場に出向いて頂きたい。その旨一考の程、お願いします」

「ほう……儂すらも利用するか、ネジよ？」

「そんなつもりは。ただ大蛇丸との戦闘で自ら”根”を率いて前線に立つ姿を印象付けければ、以後ダンゾウ様の権威も高まる……そう思うだけです」

「ククク。お前、その年で国を動かす気か！素晴らしい……ふははははは！」

そんな大それた事じゃねーよ。不確定要素共々ここで処分できれば好都合、できなくても内部から指揮系統を乗っ取る。それだけだ。……だいぶ大それてるな？

卍

「アンタ、今度は何やらかしたの？」

待機所に戻ると、紅潮したテンテンが出迎えてくれた。一瞬困惑したが、後ろで休んでる緑を見る限りさっきまで組手をしていた様子。よく見れば色気より熱気のある顔である。もう二次試験も終わりだというのに修行に励むとは、彼らの師匠はきつと素晴らしい忍に違いない。何を隠そうその半分は俺だ。半人前という意味ではなく。

「俺がいつも何かやらかしてると思うな。ちよつと俺の成績が良かったもんで今後の出世コースの相談をしたただけだ」

「で？何やらかしたの？」

「今限りなく事実に近い事を言ったが？」

「つまり嘘じゃん。まあアンタの事だから私達を巻き込みたくないとか考えてるんでしょうけど、無駄よ？古今東西アンタが絡んで纏れなかった話を聞いた事が無いわ。班員なら尚更ね。諦めなさい」

「元も子も血も涙もない事いうな」

「滅相もない」

「上手い事いうな。……解った、降参。丁度お前の手を借りたかった。二次選考も終わりだ、場所を変えて話そう」

「場所を変えてって……アンタ聞いてないの？これからすぐ三次予選よ。」

「え？」

そんな時に組手してたの？

第三次試験予選

本来予定されていないが、二次試験通過者を三次試験が日程通り進む様に減らす為臨時で設けられる試験。今回の通過者は下を参照。

ガイ班（俺、リー、テンテン）

紅班（ヒナタ、キバ、シノ）

カカシ班（ナルト、サスケ、サクラ）

アスマ班（いの、シカマル、チョウジ）

砂三人衆（我愛羅、テマリ、カンクロウ） 以上15名

この中で一対一形式の実戦を行い勝者は決勝戦へと進出する。ルールは一切なし。一方が死ぬか降参するまで戦う。

塔地下の演習場内に設置された電光掲示板が一回戦ごとに対戦カードを表示し、対戦者は試験官の指示に従って「はじめ」の合図で戦闘に移行する。

※サスケは大蛇丸に呪印を施されているのを考慮し、異常があればカカシが止めに入る事になっている。裏事情だから俺が動けないのが辛い。下手をすると俺と大蛇丸の関係を疑われてしまう。気持ち悪い。

132名から15名という大幅な受験者削減の裏には1チーム1対で良い巻物を平気な顔で10対とか集めて来る俺の弟子共の存在が大きい。俺が頭を抱えた時のフリーズから、これは後に”馬鹿垂れ夜行の蛮行”と語り継がれる事になるが、蛇足である。

個人的にはアスマ班の通過は意外だった。どうやって巻物を揃えたのかシカマルに聞いてみた所「なんか気を失った下忍の山を調べたら出てきたつすよ」との事で、いやあ何者かに倒されたまま無造作に山積みされるなんて哀れな人々もいる物だ。俺は全く心当たりがない。明らかシカマルの声が上ずっていたのが不思議でならない。

とは言っても、今年の合格者を俺の弟子達だけにする目標は達成し

つつある。ここまで勝ち進んだ木の葉の下忍達、その半数は俺が鍛えた忍だ。残りの有象無象は簡単に蹴散らす事ができるだろう。おおむね順調、問題があるとすれば——そう思った時、電光掲示板が第一試合を表示する。

第一試合。

ガアラ vs ハルノ・サクラ

——この世界の神、殺意高いんだよな。

「やめておけサクラ、死ぬ」「うん。あいつは強いってばよ」「サクラさん、らぶ」

それぞれ誰の反応かはご想像にお任せしよう。しかし言葉を発さなかつた受験者達もまた、これから始まる勝負の過酷さを直感していた。俺や俺の弟子達、風の三人衆。ここは既に下忍レベルの戦力が生きる空間ではない。サクラも「大丈夫。わかってるわ」と漏らし、覚悟の表情を浮かべた。

「棄権します」

許せ、サクラエ！お前は原作改変の犠牲になったのだ！

第二試合。

カンクロウ vs ヒュウガ・ネジ

「まさかこんな所で前と戦えるとはな、カンクロウ……昔からお前だけは潰すと決めていた」

「……なんの事じゃん？」

演習場の中央で俺達は向かい合う。俺の本気の圧を感じたカンクロウは、背負っていた身の丈の七割程の忍具を巻き布ごと地面に立て、応戦の姿勢を取った。

「お前……日向ネジとかいったっけ。一つ確認したいんだが、俺とお前は初対面じゃん。因縁も恨まれる筋合いもないじゃん」

「お前からはなくても、俺にはある。カンクロウ。俺は昔から、それこ

そ生を受けた時からお前が嫌いだった。大した術も技もなく、影も薄く、活躍もない。顔のペイントが無ければ誰もお前の事を認識できないし、お得意の傀儡の術も、術者が希少だからこそ一流になる程度の腕前。実力も個性も派手さもないお前がのうのうと生きて、何故俺が死ぬか考えたことはあるか？お前が風影の息子であり、我愛羅の兄であるからだ。お前は結局、周囲の血縁にむしやぶりついてうまい汁を吸っているだけなんだよ。どんな出番も活躍も、全て神の悪戯と知れ！」

「お前なに言ってるじゃん怖いじゃん!？」

「積年の、逆恨みだ!」

俺は全力を込めて忍具を殴りつけた。白毫のチャクラを用いた俊足から放たれる全霊の一撃、戦闘を傀儡に一任するカンクロウに対応できる筈はなく巻き布の中に隠れていた本体は演習場の壁へと吹き飛んだ。一拍おいて、カンクロウに扮していた傀儡「鳥」が崩れる。

「こんな小細工は通じない。目が良いんでね」

第三試合。

テマリ vs ヤマナカ・イノ

「なんだ、もう終わりにかい？」

試合開始から2分後の事である。いのはボロ雑巾の様な姿で演習場に転がっていた。テマリの風遁を使った猛攻、搦め手に秀でた感知タイプの忍である山中一族には厳しい相手なのは解っていたが、そこはやはりいのらしい抵抗を見た名勝負だった。

……それだけかって？原作でもテマリ戦は全カットだったし、それだけでしょ。

第四試合。

ナラ・シカマル vs テンテン

「あんな試合の後なんて、やりづらいんだけどなア……」

ぼやくテンテンに「めんどくせえ」とシカマル。これはまた面白い組合せになった。口寄せ等の時空間忍術で遠距離を得意とするテンテンと影術を用いて敵の捕縛や操作をして中距離戦を仕掛けるシカマル。互いにミスマッチな術の戦いである。原作では巻物から忍具を口寄せするだけだったテンテンだが、俺とガイ先生の修行の経験から体術に走る事も容易に想像がつく他、原作通りの戦法を用いてシカマルの影術が経由できる影の数が増え不利を招く事もあるだろう。シカマルの200のIQが炸裂する可能性もある。

不意にテンテンがクナイを投げた。起爆札と煙玉が付いた仕込みクナイである。煙に包まれた場内でテンテンが勝負をかける。

”口寄せ・蟲毒の術!”

煙を払い、巨大な百足むかでが、蟻螂かまきりが、蟒蛇うわばみが、熊が、蛭ひるが躍り出る。明らかに死の森で見た面々だ。気持ち悪かったのでよく憶えている。片っ端から口寄せ契約結んだのか……なんだろう一番気持ち悪いのはそれをやったテ……やめておこう。

「くっ……」影真似の術!”

「甘い!”大岩連弾!”

襲い来る蟲毒をすんでの所で止めたシカマルに、上空に跳びあがったテンテンが畳みかける。巻物から乱射されたのはシカマルよりも大きな岩。しかもその全てに起爆札が貼つてある。岩と爆発の二重攻撃、シカマルにこれを受ける術はないだろう。勝敗は決した。

「せっかくのIQも爆発には形無しね」とは、後日テンテンが言った事である。

酷いゴリ押しを見た。

第五試合。

ウズマキ・ナルト vs イヌツカ・キバ

残りの面子から必ず起こるとは思っていたが……まさか弟子同士の戦いが、しかも原作通りのカードで実現するとは思わなかった。直近まで修行をつけていたのはキバ、しかしナルトは俺の手を離れたと

はいえ甘えた修行をする奴ではない。逆にサクラに教える側となった事で成長したとも考えられる。何より二人は同じく近距離戦タイプ、激戦は必至だ。というか、むしろ俺としては散々勝手に問題を起こすナルトよりも忠犬であるキバの方に勝ってほしかったりする。灸をすえてやれ、キバ。

「よオよオナルト。巷じゃあ結構ワルぶってるらしいが、それで本当に火影になれるのか？お前がならねえなら、この犬塚キバ様が成ってやってもいいんだぜ？」

「お前、俺と火影の名を取り合ったら負け犬になんぜ？……覚悟は出来てんだろア!!」

「お前だけが特別と思うな！この世代はみんなお前達めがけて頑張ってたんだよ！行くぞ赤丸！擬獣忍法！」ぎじゆうにんぽう」「ワンワン擬人忍法！」

”牙通牙”が決まる。犬塚一族の秘伝忍術は、忍と忍犬が一時的に運動能力の上があった人型四足歩行の形態に変化し、回転をきかせた高速体術を行う。忍犬と忍、互いに横回転の一撃を放つのが”牙通牙”だ。ナルトの体はハリケーンに巻き込まれ縦横無尽に宙を舞う。

「どうだナルト！これがネジさんに叩き込まれた回転の極意、降参するなら今の内だぜ！」

「降参は、しねエ！火影は譲らねエ！」

一瞬の攻防。勢いのまま地面に叩きつけられたのは——キバ。会場がどよめく。

馬鹿な、ナルトはキバの回転に圧倒されていた筈だ。キバの回転は俺の回天と同速。回転する本人の視界が奪われ、嗅覚を頼りにするしかない程のスピードで、ナルトは手も足も出ない筈……!?!

「俺ってば、ネジの回天を誰よりも見てんだ！チャクラが無くても、回転で打撃技は吸収されちゃう。でもな！チャクラがねーなら、回転に合わせて投げ技は入る！俺にただの体術は効かねエ！」

「ふん……じゃあ次で決めるぜ！赤丸！ダイナミック・マーキング！」

投げ飛ばされた方のキバが赤丸に戻りナルトに放尿した。ふざけているのではない。れっきとした放ダイナミック・マーキング尿という技だ……多分。

横で「あの犬畜生が！」とか淑女らしからぬ暴言を吐く人がいるけど

無視する。怖いんじゃない、今更の伏線回収なんて噛みつかれるだけだ。

キバと赤犬は態勢を立て直すと、今度は二人で一匹の大狼に変化した。”人獣混合変化・双頭狼”——俺が修行で導いた、現状最高火力の形態。この状態で放つ技の破壊力は他に比類する物が無い。それだけに俺の修行では一日一発までが限界だった。いわば諸刃の剣であり、この一撃が大一番だ。

「牙狼牙！」

「影分身の術！」

風切り音が会場を揺らす。凄まじい回転は大狼に真空刃を纏わせ、周囲に沸いたナルトの分身を一掃する。もちろんナルトに付けた匂いを追っているに過ぎない為、目くらましに意味はない。猛進する風の塊は以後も続く分身体を蹴散らし蹴散らし、ついにナルトを捉える。文字通り、必殺の構図。ナルトの体は今に細切れになり鮮血を噴き出す……否、噴き出したのは深紅に燃えるチャクラ。それはまさしく”橙赤の鬼子”の形相であった。

「——！！」

この時のナルトの声は筆舌に尽くしがたい。狐とナルトとが一体に咆哮したような声である。俺はナルトが何故町民達に忌み嫌われていたかを目撃した気分だった。ナルトが行ったのは平凡な蹴り。よほどのバケモノでもなければ、それで大狼を打ち天井に叩きつける等という芸当は適わない。ナルトはそれだけバケモノじみていた。ナルトの意識があつて尚、妖狐と大狼の間には絶対の差が存在していた。

第六試合。

ヒュウガ・ネジ vs アブラメ・シノ

「え!?俺二回目なんですけど!?ちよつとレフェリー!!」

「固い事いうなってばよ!がんばれー!」

応援するナルトに、空気は冷たい。キバは殊更に大事には至らな

かつたらしいが、その場の全員はさつき見たナルトと今のナルトの差に身構えている。運営側も審判の隣にいたダンゾウがナルトを見たまま「やれ」と言っただけ。冷たいし雑。

かくして対面するシノと俺、しかし俺はシノの事を全く憶えていないのだった。

「日向ネジ、お前が俺の事を知らないのも無理はない。なぜなら、お前はいつも騒動の中心を生き、俺は忍らしく日々を狡猾に過ごしてきたからだ」

「えつと……なんか恨まれてる?」

「俺はお前を羨ましいとは思わない。なぜなら目立つという行為は忍にとつて不利益でしかなく、人からの注目だけで成立する人間像はそうでない者よりも脆弱になるからだ」

「羨んでるかは聞いてない」

「……始めよう」

なんかやり辛いなこいつ。とりあえず見た目が気持ち悪いって事が解ったわ。いや見た目っていうか中身っていうか、こいつチャクラを食べる虫を体内に寄生させてやがる。白眼で見ると表現を規制した方が良いレベル。集合体恐怖症と虫嫌い、男嫌いはトリプルでアウトって感じだ。すげえ触りたくない。

「八卦空連掌」第二話参照。人力チャクラ散弾銃。

最近ご無沙汰の何と八卦掌、もとい南斗八卦掌。全弾命中だが虫に食いつくされた。気持ち悪い。

「虫が暴れている……しかし攻撃にはなっていない。なぜなら、経絡系の負担から内臓の損傷を引き起こす柔拳は、体内の虫にチャクラを食いつくさせることで無力化できるからだ。行くぞ」

シノの体中に虫が這い出てくる。迎撃とも攻撃とも取れない虫の盾を展開し、こちらへ跳んだ。日向ネジ初めての敵前逃亡の瞬間である。

「来るな来るな気持ち悪いーぎゃああああ!!ああああああ」

八卦空連掌、千本、その他全ての忍具を使ったが虫には効果が薄く、柔拳の様にチャクラ主体の攻撃を当ててしまうと虫の動きが機敏に

なる。起爆札が起爆用チャクラを吸われて機能しなかった時は泣くかと思つた。しかしもつと泣きたくなる展開はその直後に待っていた。つまり捕まった。

喉元をがっしりと掴まれ、虫が次から次へとチャクラを吸いに来る。全身の点穴からチャクラを放出して直接肌に触れないようにしているが、これがなくなつたらなんて考えたくもない。この状況じゃチャクラコントロールが難しい柔拳は使えないしジリ貧だ。白毫のチャクラまで吸われたらいよいよ状況を返す手立てがなくなる。万事休す……集中力が途切れチャクラのコーティングが剥がれそうになつた時、俺は無意識に千本を掴んだ。そうだ俺は天才^{アミバ}！

「俺は天才だア〜！」

手にした千本をシノの首に突き立てる。仮死状態のツボ。どつかで発作起こしてうちの声は聞こえるが被害者二名で俺の勝ちだ。

その時、虫が術者の手を離れた。

「ぎゃあああああああ!!」

第七試合。

ロック・リー vs ウチハ・サスケ

さつきは酷い目にあつた。シノの押さえがなくなつて回天できなければ割と真面目に死ぬ所だつた。

しかし師匠としては休んでもいられない。リーは厳密には弟子ではないものの、俺が鍛えた努力の天才とうちはの天才との勝負は是が非でも見たいからだ。木の葉流体術の禁術“八門遁甲”を六門まで開けるリー、写輪眼を使いこなし大蛇丸にすら気に入られるサスケ。両雄遜色なく、どちらが勝つか判らない。

先に動いたのはサスケ。一目で体術の練度で劣ると判断し、“火遁・鳳仙火の術”で陽動をかける。しかしリー、蹴りの風圧だけで炎をかき消し距離を詰める。火遁と体術による読みあいと攻防戦はしばらく続き、戦況の膠着は免れないかに思われた。

「木の葉旋風！」「火遁——ッ！」

にわかには覚えた呪印の痛み。それはサスケの意識に死角を作るには十分だった。死角——死を呼ぶ角度を。サスケは大きく蹴り上げられ、背中を取られた。木の葉流体術”影舞葉”である。そしてそこから”八門遁甲”——体内のリミッターをチャクラで外し、限界を超えたパワーで生み出される超高速体術こそ”蓮華”。平たく言えば、必殺技である。

”表蓮華!”

相手をがっちり固定して衝撃の逃げ場を無くし、回転を加えて打ち落ろす。威力は地面の高度に比例して飛躍的に高まり、落下の破壊力は相手の頭部に凝縮される。この究極の殺人術に一つだけ難点を上げるとするならば、殺せなかった時に一転窮地に立たされる事だろう。はたしてそれは起こった。

”火遁・業火球の術!”

地面に激突する直前。二人は炎に包まれ、リーだけが弾かれた。火傷を負い”八門遁甲”の反動で体の自由がきかない筈のリーだが、まだ闘志は衰えていない。

「くっ——流石だ。まさか業火球をクッションに反撃されるなんて……!」

「見た所、あの技は諸刃の剣。相手を捕縛した状態では自身もダメージを受けてしまう。故に術者は地面寸前で退避しなくてはならない。——そんな所か? 何にせよお前のその体では試合続行は不可能だ。俺もこれ以上、お前に譲歩できる余裕はない。降参しろ」

「嫌です。僕は木の葉の碧き野獣! 努力で天才を屠る野生の雄! ロック・リーです!」

リーはニヤリと笑い忽然と姿を消した。”八門遁甲”の二番目”休門”を開いた超回復である。復活した超スピードを体に慣らし、続く切り札に備えているのだ。第一”開門”、第二”休門”に続く”生門””傷門””社門””景門”を用いた技の内、リーが有する物は二つ。これほど入念な慣らしが必要な物は一つだ。俺に対するとっておきの技で、見た事はない。曰くガイ先生の奥義の一つ”夕象”せきぞうを元にした技。打撃と同時に次々と門を開ける事によって強引に超加速を実現

した高速連続体術。その名を――

”晨鷄”

瞬間、サスケが消える。次いで衝撃波と五回分の打撃音が俺を撃つ頃には、サスケは既に意識を失った状態で壁に埋められていた。

第八試合。

アキミチ・チョウジ vs ヒユウガ・ヒナタ

リーの手当、サスケの緊急搬送の後、原型を忘れた演習場の中心には対極的な二人の姿があった。一方は気の小さい巨漢、もう一方は気の強い可憐な少女である。両方とんでもない詐欺士だ。

巨漢が雄叫びを上げる。

「行くよ」三部倍化の術――肉弾ローラー！」

秋道一族の秘術を両腕と上体に使い、肉団子ではなく肉巻きの様態で転がるチョウジ。恐らくは攻撃先を点から面へと変えた彼なりの改良なのだろうが、相手が悪かった。ヒナタ様の柔拳、その極意は”絶対反射”。ヒナタ様は相手の受け流しに特化した柔拳を使いながら、確実に相手の体力を削る戦闘スタイルをとる。柔拳特有の内臓負担そのものを相手の肺や心臓に重点化して武器としている。相手の攻撃は蓄積される致命傷に反転して相手を蝕むのだ。

”八卦六十四掌！”

え？絶対反射は？

倒れるチョウジ……は別にいいんだけど、勝者はヒナタ様……も別にいいんだけど、なんだこの肩透かし感？

「あの、ヒナタ様？どうかなさりました？」

「なんでもありません。ナルトは下品な犬野郎相手に負けそうになるし、サスケは負けちゃうし、男連中の容体が気になるだけです。戦闘中は見に行つてあげられませんから。それだけです」

本当？それ不甲斐ない男連中に対する怒りとかも含まれてない？

そんでチョウジにやつあたってない？

長い五日間が終わり、久々の白庵で食う飯は旨い。何より造血丸がかけ放題だ。

「それで？首尾よくいけそうですか？」

食卓を囲む百は何気なくそう聞いてくるが、意味する所はこの生活の残り時間の確認でしかない。俺の中忍試験が首尾よくいくという事は、俺が暗部になるという事なのだから。

「上々。ただし一か月後もそうとは言い切れないな。俺の眼でも未来は見えない。——なあ百。例えば一か月後、木の葉が戦場になったとして……俺は生き残れると思うか？」

「さて、どうでしょうね？でもそんな時が来るのなら、ぜひお供したい物です」

予選通過者は日向ネジ、うずまきナルト、日向ヒナタ、テンテン、テマリ、ロックリー、砂漠の我愛羅、以上7名。決戦は一か月後、第三次試験トーナメント会場。

第十二話 木の葉舞う

寅の刻、ほとんどの里の者達がまだ夢を見ている時間に儂は起きる。旧大戦で得た時間感覚は儂が三代目となり実戦や任務から退いた今なお消えてはくれぬ。中忍試験の当日でもそれは変わらん。或いはただの老いかも知れんが、カカシの様に旧大戦に囚われた者を見ると言い訳をする気も失せてしまう。三代目三代目と儂を慕う里の者達を想えばこそ、その様な思いの機微さえ悟られてはならぬというのが火影の定めなのやもしれん。——その様な泣き言もこの年まで考えた事はなかったのだが。かくして儂はいつも通りの思考を踏み、いつも通りの朝を迎える。しかし起き抜けに誤算だったのは、ここが我が屋敷でない事を忘れていた事と、家主——隣で寝ていた日向ネジの目が覚めてしまった事じゃった。

「すまないネジ。起こしてしまったかの？」

こんな早朝に起きる若者も珍しい。そう思つての事じゃが、対するネジは飄々と顔を洗い朝食の支度に入りながら「とんでもない」と返しよった。いつも通りの老成した口ぶりじゃ。

「朝はいつも早いです。義弟の生まれは少々特殊でね、昔はもつと早く起きていて俺が起きる頃には平然とお腹を鳴らしている様な奴でした。お互い帳尻を合わせて、今の生活習慣にしてるんですよ。……そうだ朝食くらい一緒にどうですか？昨日遅くまで術の調整に付き合わせてこんなあばら家に泊めてしまったお詫びという事で。まあ住処があばら家になったのは本家の所為なんですが」

いちいち触れづらい所に突つ込むのお此奴こやつ。それはともかく、この”白庵”という建物はあまつさえそこに霧の抜け忍を囲う輩には特別待遇な気もするが。しかも義弟とかにしよるし。偽造の身分証明に際してどれだけ日向ヒザシに頭を下げさせたか解つておるのかの？まさか全く伝えてない程彼奴あやつも親バカしとらんとするが、少し横柄に育て過ぎたのお。

「お主に術を教えるのはこれで二度目じゃが、お主からの見返りは初めてだの。四年前、片肺を失った少年が儂に”白毫の術”を教えてく

れと言ってきた時には、どんな変態かと疑った物だが」

「変態ではなく天才です。酷いな、木の葉の術を全て修めた”プロフェッサー”たる貴方だからこそ頼めた事なのに。あの時は切羽詰まっただけで、ああ言うのが精一杯でしたよ。術についてはまあ……本で読んだという事で。大中小どれにします?」

「お主はいつも僕の使わん術ばかり教わりたがるからのお……大中小とは?」

「造血丸の量です」

「……ゼロで」

「小ですね、解りました」

二

造血丸料理、初めて食べたがなかなか美味だったの。忍やめて料理人とかになっても大成するのお彼奴。と言っても、今日これからの三次試験に出場し、果ては火影を狙う男にそれは酷という物か。……

”日向の変態”が火影になったら、この里は”変態の木ノ葉隠れ”とか呼ばれてしまうのだろうか。変態が木の葉で何を隠すんだろうのお。ナニじゃのお。嫌じゃのお。せめて後5年は影の座を守り、大蛇丸の收拾もつけないが……そう言ってもう何年になるか。

「ヒルゼン……ついにあの日だな」

火影用の観戦席に座った僕にダンゾウが話しかける。あの日は試験当日というより、日向ネジの言った木の葉崩しの日という意味じゃろう。答えに困る僕を尻目に、ダンゾウは暗部の者に椅子を設けさせた。僕の隣で試合を観戦するつもりか?僕が言うのもなんじやが、あのダンゾウにしては珍しい。

「目当ては日向ネジか?」

「ああ。ここにくる大半は奴を見に来ているも同然だ。僕もな。……それに奴の言った事が現実にかかるのなら、僕も参戦せざるを得まい」

「そうか……なあダンゾウ。僕は正直、今の僕の地位に疑問を感じて

おる」

「……！」

「本当の事を言うとな、ダンゾウ。儂は少し怖かった。老いた儂一人で大蛇丸に勝るのか、里を守れるのか不安じゃった。しかしお前が来てくれるというなら儂は安心じゃ！安心して新世代の忍達を眺める事ができる……お前と共にな！」

「……」

しばらくして会場の門が開く。日向ネジのいる第一試合を見に大勢の観衆がなだれ込み会場はほとんど満席。vip席にも日向本家と百が並んで座っておる。彼奴もなかなかやりおるわい。暫くして合同開催の風の国・四代目風影もお見えになった。

「ようこそ木の葉へ。遠路はるばるお疲れじやろう」

「いえ……今回はこちらで良かった。まだお若いとはいえ火影様にはちとキツイ道程でしょう。早く五代目をお決めになった方が……そちらの方は？」

そちらの方というのは仏頂面のダンゾウの事だ。

「これはダンゾウ。儂の古い戦友じゃ。不愛想なのは許してやってくだされ。では、そろそろ始めますかの」

風影殿が腰を据えたのを見て、儂は全体に届く様に声を張る。

「えー皆様！この度は木の葉隠れ中忍選抜試験にお集まり頂き、誠に有難うございます！これより予選を通過した七名の『本選』試合を始めたいと思います！どうぞ最後までご覧下さい！」

記

三代目のアナウンスが終わる。ついに俺、日向ネジの晴れ舞台だ。俺は百やテンテンが配置についてる事を確認し、朝食の不足分の造血丸を啜えた。

三次試験本選

基本ルールは予選と同じ。つまり一切なし。降参か戦闘不能まで

戦い続ける鬼畜ゲー。

トーナメントの形式になってはいるが、勝敗は合否に関係ない。そもそも木の葉崩しで有耶無耶になる試験だから、試合はもちろん実戦での功績も評価対象に加わり難易度が跳ね上がってる。まあ俺の弟子達ならいけるっしょ。

受験者が奇数だから一人だけ一回戦で二試合する男がいる。もちろん俺。クソ。しかもナルト我愛羅の連戦。どうせダンゾウのせい。

うずまきナルト vs 日向ネジ

「ついに……ついに……ついに……この時が来たってばよ……ネジ」

闘技場の中心で不敵に笑うナルト。この一か月十分な修行を終え成長した様子だ。原作通りなら「三忍」の一角である自来也と出会い（ちなみに変態である）、九尾チャクラを断片的に使う事を会得している筈だ。チャクラという物は、ただまき散らすより意のままに操った方が強い。即ち、今のナルトはキバを倒した時よりも強いという事だ。しかし俺も負ける気はない。

「緊張、興奮、不安、期待……様々な思いが調和したイイ顔をする様になったなナルト。弟子の成長が嬉しい限りだが、かといって勝ちを譲る程甘くはないぜ」

ナルトは何も言わず、戦闘態勢をとる。俺は全力で地面を打った。死の森で見せた地盤崩しである。牽制の手裏剣を額あてで受け、次の行動に――

「口寄せ・屋台崩しの術!――いけ!蝦蟇親分!」

「回天!」

ナルトが親分と呼んだ巨大蝦蟇の大ドス。闘技場のざつと半分を占める圧倒的なサイズ感はそれだけで脅威だ。一振りにかかる巨大な風圧はまさに台風如く。小台風の回天は流されるしかない。地面すら蝦蟇の質量と闘技場の基盤に封殺され陽動もできない。ドスは続けざまに二撃、三撃と俺を追い詰める。その度に会場の壁を削

り、岩を砕き、俺を弾いて、的確に追い詰めていく。ナルトも本気、俺が食らうのも時間の問題だ。最後のドスの大上段からの一撃。運命を悟った俺は、回天を止めた。

うねる風、揺れる一体の空気、鎧袖一触の超剣圧。襲い来る死の一撃を、俺は掌たなうらで打ち殺す。

時が、止まる。この時の観衆の思いは、次の三代目の言葉に集約される。

「……真剣白刃取りだと!!?」

次に俺を襲ったのは、動き出した観客達による大喝采だった。

「ネジィィィ!!」

ナルトの呼号もこの賞賛の嵐に勝てはしない。しかし聞こえたとしても今の俺にはこのナルトの呼号までもが俺を讃える言葉に思えただろう。既に策は講じてあるからだ。

ナルトの前に俺2号が立ちふさがる。蝦蟇の攻撃に頼っていたナルトだ。分身の瞬間を見れた筈がない。蝦蟇の攻撃の邪魔にならない場所——それは下方向の視野の狭い蝦蟇の上しかないからだ。俺はナルトの上を取り、一本を取った。

「はつけろくじゅうよんし八卦六十四針!」

掌でチャクラを点穴にねじ込み術を封じる”八卦六十四掌”はナルトに効かない。ナルトの持つ九尾チャクラに封じた点穴をこじ開けられてしまうからだ。ゆえに”針”。チャクラと共に千本で点穴を壊す事によって、九尾チャクラを流出させる穴を全身に開けるのだ。医療忍者でもないナルトがこの穴を修復する事は不可能。いかに多量な九尾チャクラといえども、まき散らすだけなら脅威ではない!

蝦蟇も消えた。よろよろと立ち上がるナルトには、もはや万に一つも勝機はない。

「今回”は”、俺の勝ちだナルト。引き下がれ……!」

「うるせえ!俺は火影になるんだ、俺は諦めねエ——!」

瞬間、ナルトの中で膨大なチャクラが動いた。もう遅い。チャクラを噴出しながら跳びかかるナルトに正拳が飛ぶ。ナルトは拳の勢い

のまま壁にぶつかって沈黙。気絶の直前、笑って言った……気がした。

「負けんなよ?」

勝者、日向ネジ。俺は師匠としての貫禄を守ったのである。会場はまた喝采に包まれた。今度は俺ではなく、この試合に臨んだ両雄への喝采である。

……遠くの方で「ナルトに千本を立てるなア!」と泡拭いて倒れる怪我人が目につくが。

試合も終わり、連戦に備えて気を引き締めた時である。待機所から砂の塊が落下した。それは落下というよりは降下、いや投下に近い。まさに爆弾のように落ちてきた砂がぱつくりと割れ、現れた人の顔が修羅の形相で俺を見る。

「日向ネジ……いいますぐ、オレと!オレと戦えエ——!」

それはまさしく我を愛する修羅。我愛羅だった。

日向ネジ vs 我愛羅

我愛羅の操る砂が俺に迫る。こうなった我愛羅を止める事は無理だと判断した審判が遅まきながら試合を宣言した。俺も迎撃の態勢を取るが、砂の攻撃は俺に届く前に霧散してしまった。見ると我愛羅はそれどころではなく取り乱している様子である。

「ウ……ウガ、か、母さん……わかつてるよ、全部、全部母さんのだ……そう、ウン……」

母さんとは、彼の実母の事だ。彼を産んで死んだ。彼は意識の中で母の亡霊に憑かれているのだ。そして彼がこうなった後には、決まってもつとやばいのが出てくるのである。

”会話”を終えた我愛羅。今度こそ砂の攻撃がくる。我愛羅は確実に俺を殺すつもりだ。一度砂に捕まれば対象をぐちゃぐちゃに擦り潰す”砂縛柩”の餌食になって俺は死ぬ。砂を使うキャラで彼ほど強い奴は他にそういないだろう。ただしこの世界、最強の属性が木

だったりするので、あまりあてにならないが。

まあ、それも俺を捕まえられたらの話。

「木の葉旋風！」

俺は我愛羅の後ろに回りこみ蹴りを入れる。我愛羅が飛んだ先で追撃、その先も。追撃が途切れる事はない。俺がリーのような体術を使うのは不自然に思われるかもしれないが、俺はリーの手合いを何千回と受けてきた男。体術においてもリーに次ぐプライドがある。それに我愛羅に柔拳は相性が悪い。体表を覆う”砂の鎧”は柔拳を無効化する。叩き込むべきは剥した後だ。

「砂縛極」

なすがままだった我愛羅は一転予想外に動いた。砂を使い自分を包んだのである。俺に剥された鎧の欠片は我愛羅のチャクラを多く含む。チャクラを含む砂ほど速い術の性質上、鎧の欠片を混ぜ込んだ砂は高速化し従者を捉えたのである。

砂に巻き込まれぬ様俺が手を引くのを見計らって、更に多くの砂が我愛羅を取り囲む。これは……まずい。

「木の葉大旋風！」

俺の全力の蹴り。しかし我愛羅を卵の殻の様に覆った砂はそれを通さないどころか一部を棘の様に変化させ迎撃に転じる。こうなってしまうと後がない。我愛羅の”絶対防御”の完成である。俺の”回天”もそう讚えられるが、我愛羅のそれは格が違う。砂の殻は内包する岩石の組成によって際限なく硬化する。この固さは鋼鉄や岩盤、およそ人の触れる何にも例え難く、この世界特有の何かとしか言い表せない。相手になるのはあれだけだ。

俺は卵から距離を取り、会場の壁にチャクラで張り付く。この術は助走がなければ成立せず、白毫と併用することで、或いは俺の最大火力となる。術の名は――

「千鳥！」

構える俺の手にバチバチと鳴くプラズマが宿る。最高に圧縮された雷チャクラの形、ナルトを読んだ者は誰でも――読んでない者でさえその格好良さに心打たれる力カシ唯一のオリジナル技、それが”千

鳥”だ！何を隠そう俺は頑張ってエア千鳥を練習していた勢なので心が躍る！初めて思う、NARUTO世界に転生して良かった！

さて諸君！NARUTOの読者なら絶賛ツッコんでいるだろう「お前は眼の色が違うだろ」と！それを説明する為にはまず千鳥という技の特性についておさらいしなければならぬ！やったあ！

ご存じの通り千鳥は写輪眼を併用して初めて技足りえる技だ。原作では写輪眼を持つカカシとサスケしか、もちろん三代目も”実戦では”使えない。その極意はチャクラによる肉体の大活性！肉体の限界を超えたバネは最強の突き技”千鳥”を産む！しかしその直線的な動きは常に反撃のリスクが伴い、それを見切るのが写輪眼だ。

では最強技”千鳥”は写輪眼でなければ使えないのか？答えはノー！

写輪眼は相手の反撃を動体視力で見切る「後の先」的対処療法。対し白眼には写輪眼以上の洞察眼がある。相手の動きを先読みし「後の先」ならぬ「先の先」で反撃を完封する事が出来るなら写輪眼など不要！そしてこの天才はそれが出来る！

しかし、これは初めての实战。ただの千鳥では火力面に不安が残る

……なら？

さアて、こいつはどうか？

巻物から出したのは『断刀・首斬り包丁』。かの無音殺サイレントキリング人術からこの為譲り受けた名刀の一振りである。そしてこの剣に究極のダメ押しをする事によって、俺の”千鳥”は完成する……命名しよう、この刀の名は！

”偽典・雷切り包丁”！

刀が啼く。砂の殻へと閃光が走る。

「グアアアアアアアア!!」

我愛羅の悲痛な叫び。俺の背はある断刀は七分殻を貫通し、手にはしっかりと我愛羅を捉えた感触がある。致命傷ではないが、俺の勝ちだ。

”砂縛柩”

我愛羅のチャクラが変わった。俺は咄嗟に断刀を折り、迫る砂を刃

渡り三分で払って跳び退いた。残る七分は砂塵に飲まれ、砂の殻が瓦解する。中から現れたのは我愛羅ではない。我愛羅が弱った今が好機と、流血する左腕を異形化して飲み込む砂の怪物。妖狐に対する化狸。世界に九つ現存する、チャクラの源流に最も近い存在の一体。

彼は守鶴。風によって投下された兵器の名である。

卍

「そろそろやるか」という言葉について前世の俺は考えた事すらなかったが、今では最も嫌いな部類の言葉だ。「そろそろ」とはある時期になった事を示し「やるか」は何かを行う宣言。つまりこの言葉は「機は熟した」と言い換えられる。俺に言わせれば、この言葉は決定的に間違っている。機が熟す事を待つのは常に機を逃した者達だ。今日よりも明日、今ではなくいつか、そんな甘い妄想に取りつかれた者の自己欺瞞に過ぎない。人生は有限だ。故に、明日は今日より死んでいく。今日が良いなら明日は悪いし、今日が悪いなら明日はもつと悪くなる。好機は常に今しかない。反対に「今やらなくて良い事」は「いつでもやらなくて良い事」だし、それは明確に「やらなくて良い事」だ。だから「そろそろやるか」なんて言葉で始まる物事は、きつとロクな事がない。

例えば、木の葉崩しがそうだった様に。

「そろそろやるか」

異形化した我愛羅、釘付けになる観衆、三代目……会場の混乱は風影の一言で極まった。砂・音合同木の葉崩しの発動である。

火影の観戦席で爆発。同時に音忍によって結界が張られ、影達は完全に孤立する。観客席では客の避難誘導と出現した音忍達との戦闘が始まった。こっちはまだ戦闘中だったのに、せっかちな風影……いや、風影に変装したおじさんだ。だが当社比概ね原作通り！

「余裕って顔だね？」

突然の背後からの攻撃。カブトだ。躲したが返しの柔拳は当たら

ない。向かいの半化狸はんばけたぬきに注意しながら距離を取ると、テマリとカンクロウもカブトに並ぶ。組織的な行動というよりは単に利害の一致の様だ。カブトは非力な増援部隊には目もくれず俺の視線にだけ答えた。

「君はまだ殺さないよ、ネジ君。大蛇丸は君にいたく御執心でね？手負いのサスケ君諸共々ここで確保する事になったのさ」

……白眼に視線つて存在したんだ。

カブト達は武器を構えたままにじり寄る。前にはカブト、後ろには人柱力。両者油断無しとくれば、どう足掻こうと敗北は必至。これが原作ネジなら、一人嘆息でもして諦めただろう。だが、生憎と俺は寂しがり屋だ。

”牙狼牙”!

”回天”!

”口寄せ・リー”!

仲間が窮地に駆けつけ、敵を薙ぎ倒す。それはさながら主人公の如く。

「ナルトが倒れたっつーんならよお……このキバ様が頑張らねえ訳にはいかねえーよなあ!」

「弱い犬程よく吠えるってね……ネジさん、指示を」

「ネジ君!カブトさんには逃げられた借りがあります!任せて下さい!」

「リー、それを言うなら私もね。……ネジ?アンタ何笑ってんの?」

いいや、なんでもないさ。ただ、偶にはご都合主義も悪くない。

「砂の奴らはキバと赤丸で十分!残りでカブトを叩け!指揮はヒナタ!俺は我愛羅をやる!ー散!」

その場の全員が戦闘に入る。俺はその全てを託し自我を無くした人柱力に向き直る。さて、ここからが正念場——

「随分楽しそうですね義兄さん。まるで戦争の首謀者だ」

「なんで俺って奴あここぞって時に横やりを入れられるんだろうなあ。あモブだからか。……よう百、遅かったじゃないか」

「僕は視野が狭い物で。まあ概ね義兄さんの読み通りでしたが……斬

不斬さんの愛刀を傷物にするとは聞いてませんね？取れますよね？責任」

「取るなよ？俺の首。……悪かったから氷遁を脅しに使うな、寒気が走るってそういう事じゃないから」

「やだなあ、ここぞっていうシリアスな雰囲気作りですよ。凍て殺しますよ？」

「前半と後半の温度差が凄い。てかギャグだろ。ギャグギャグしい雰囲気作りに見せかけて寒い空気を作るといふ二段構成の冗談を即座に行える才能に脱帽だよ」

「まだ服を脱ぐんですか？冷えませんか？」

「なんなら言葉遊び分も併せて裸になってやろうか」

「いてこましますよ。さて……僕はあの砂の怪物みたいのを相手すれば良いんですね？」

「話しが早くて助かる。今は動いてないが、あれは厄介だ」

「違いますよ、義兄さん。あれは動けないんです」

百が印を結ぶと我愛羅を侵食していた砂が凍りつく。いや正しくは砂に付いていた氷を再度凍らせたただけだ。凝りから檻へ。氷を変えたただけだ。

”ライトウ
ムセツ霊刀・霧雪”

百の手には氷の刀。その薄氷の一振りは鋭きこと霊を斬り強きこと霧雪を砕く。砂など砂の跡形もなく。

「ウガアアアアア!!」

体を砕かれ砂の化身は姿を消す。後には衰弱しきった我愛羅だけだ。百はいつから仕込んでいたのか判らないが、俺と合流した時には既にいつでもこれが出来たのだろう。百、恐ろしい女。おとし

さて、これで大方の仕事は消化した。後は大きなのが一つ。俺は百に対カブト戦に合流する様言っただけから、テンテンを口寄せしてあれを使わせた。

全く、戦力は足りてるでしょうに——百はぼやいてから我愛羅の方に歩み寄る。我愛羅は虚無を写した瞳で百を見上げた。

「やあ。人の手柄を横取りする趣味はなくてね——まあそんなのはど

うでもいいや。……我愛羅くん。君に、大切な人はいますか?」

火影達の戦いは拮抗していた。敵は大蛇丸一匹に対しこちらは三代目とダンゾウの2人。数の上では木の葉有利。しかしいくら三代目がプロフェッサーと言えど、ダンゾウが忍界の闇を見てきた忍と言えど、三代目が得意の口寄せ・猿魔えんまの如意棒術を駆使して尚彼らの間には壁が存在していた。老いという絶対の壁である。であるならば、そこに青二才が加わる事もまた定石だろう。

火影の観戦席の上、先程から影という水準の戦いが繰り広げられている屋根に大きな紋様が浮かび上がる。屋根を覆う大文字の行書で『変態』と。

大蛇丸は気付いた。これは単なる文字ではない。時空間忍術のマーキングだ。ここに転移してくる者はおそらく――

俺だ!!

”北斗八卦・爆殺六十四掌!”

完全な不意打ちの筈だが大蛇丸も速い。軸をずらされた事で掌の多くは内臓に効くただの打撃だ。決め手に欠ける。大蛇丸はダンゾウの追撃も振り切った。

「随分とナメた登場をしてくれるわね、ネジ君」

「俺をネジ君と呼ぶな気持ち悪い。仲間の不手際だ」

”飛雷神の術”、マーキングした場所に瞬間移動する二代目火影考案の時空間忍術の一種だが、テンテンのは不完全だ。一ヶ月で修得できる術ではない事は重々承知だったが、流石のテンテン、計画で使えるまでには物にしてくれた。つまり俺をここに飛ばす位には。……マーキングはなんとかしてほしかった。

”口寄せ・穢土転生!”

連携を構えた三人に大蛇丸は切り札をきる。死者を浄土あのよから穢土このよに口寄せする大技、もちろん呼ぶ方も呼ばれる方も只者ではない。屋根からこれ見よがしにせり上がった棺桶。中から出てきたのは木の葉の伝説。三代目とダンゾウは口を揃えた。

「初代様、二代目様……!?!」

初代火影、二代目火影……しかし彼らは死者。手心は冒流に同じ。俺は迷わず大蛇丸に向かう。ダンゾウも速い。

「ヒルゼン！お一方は儂が相手する、お前は奴を！」

初代も二代目も忍としての技量は生前に大きく劣る。ダンゾウなら持ち堪えられるだろうが長時間は厳しい。相手に不足無し。白毫を短期間で使い切る出力が望ましい。

俺と三代目の連撃が入る。

しかし。

しかし。

しかし。

崩しきれない……っ!?

俺と三代目は一ヶ月練った。連携を、連撃を、大蛇丸だけを想定して。それが、それでも通じないなんて事があるのか……!?押ししても、押しきれない。掴んでも、掴みきれない。踏み込んでも、踏み込みきれない。間一髪で生じる均衡に全ての流れが飲まれていく。その空白が全てを飲み込んでいく。まるで蛇の様に、大蛇丸の様に。

”幻術・黒暗行の術”

空白が闇に変わる。原作で一度しか使われなかった初代火影の幻術。白眼の全視界が黒く染まり、俺は文字通り不覚にも隙を生じてしまった。

右肩から鳩尾に大きく痛み。なつかしき袈裟切りの感触。俺は前のめりに倒れた。

「ネジ……!?!」

三代目の声。この暗闇の中で戦っているらしい。幸いにして傷は浅い。”創造再生”ですぐにでも復帰できる。だが……白毫のチャクラが残り少ない。もし取り逃がせば大蛇丸に白毫の事を知られてしまう。俺はその後どうなる?しかしこの傷では充分に戦えない。死亡は必至……使うべきか!?使わざるべきか!?

「何をしている!?使え!!」

「使うな!!」

闇からのダンゾウの声に三代目の声が重なった。

「大蛇丸、これで最後じゃ！」封印術・屍鬼封尽^{しきふうじん}！」

闇が晴れる。そこでは三人に影分身した三代目が、敵を一人ずつ捕まえていた。

「まさか三代目……やったのか!?あの術を!？」

「さすがの白影……見た通りじゃ」

屍鬼封尽是命を代償に敵を封印する術……召喚された『死神』が術者と被術者の魂を食らう事で実質的に差し違える術だ。つまり三代目は……死ぬ。

「何をした、ヒルゼン!？」

「くっ……この死に損ないが!放せ!」

旧友の言葉も、愛弟子の侮蔑も、三代目は意に介さない。ただ、己に残された時間で言葉を紡ぐ。

「ダンゾウ……儂は行くよ」

「ヒルゼン!何を言っている!？」

「聞けダンゾウ!ネジは……昔のお主によく似ておる」

「……!？」

死に際に暴言……だと!？」

「ダンゾウ……儂らはどうしてこうなったんじやろうな?儂とお前。一つ違えば火影はお前の方だったかかもしれん。ダンゾウ、儂は火影じゃ……里を守り死ぬのもまた定め。しかし火影の本懐とはそこではない」

「……」

「育むのじゃ。里を育て、守る……火影にとって最も重要なのはそこだ。お前は里を守るばかり。儂は愛するばかりだったが……儂もお前もとうに老いた。次はお前が育てろ……里を……未来を……」

大蛇丸が叫ぶ。しかし消え入る様な三代目の声はそれよりずっと強く聞こえる。

「木の葉舞う所に火は燃ゆる……火の影は里を照らし、また……木の葉は芽吹く」

初代が倒れ、二代目が倒れ、三代目もそれに続く……立っているのは、息の上だった大蛇丸だけになる。

「はっ！三代目の老いぼれが!!私を封印するには至らなかつたようね!!」

「違うな、大蛇丸……お前は既に死んだ。忍としてな」

大蛇丸の両腕が爛れていく。魂を部分的に抜かれた症状だ。忍術を失った証でもある。その事に気付いた大蛇丸はにわかには判断を下した。

撤退！撤退！

戦場は既に終局している。音忍や大蛇丸を追える者は少ない。白毫チャクラの消えかけた俺は戦力にならないし、ダンゾウもまた同じ様な物だ。

……ここままでしても運命は変えられないのか。これじゃ原作と変わらない、イタチの時から何も変わっていない。あの日、やるだけやると決めたのに。

なにが転生者だ。俺は、無力じゃないか……!

卅

「おっちゃん。一杯、いいかな」

その夜。気づけば俺は一楽を訪れていた。本来ならば店終いの時間だったが、おっちゃんは何も言わず通してくれた。

「ネジ……実あもう店終いにしようかと思ってた所でよ、残念だが豚骨味噌チャーシューしか出せねえ。ま、だからなんだ……お代はいらねえ」

「……」

おっちゃんの不器用すぎる優しさが今だけは嬉しい。

三代目の居ない木の葉など静かなものだ。俺は無心のままおっちゃんの作業風景を眺める事に徹した。そうして出来上がったラーメンの前で手を合した頃、もう一人の客が入ってきた。その客は俺と同じ息苦しさを抱えた表情をして、ペケ印の付いた顔に一層皺を寄せながら俺と同じものを注文した。ダンゾウだった。

「何してんすか」

「お前を見つけてな……この様な店は初めてだったので、いささか迷ったが」

「本当に何してんすか」

「ヒルゼンの事は……気負うな」

「……政敵が居なくなつて満足ですか、ダンゾウ様」

「そう、かもしれんな」

「……」

「ヒルゼンは古い馴染みでな。火影の座を取り合つた仲だ。火影になり、里を守り、里の為に死ぬ……儂の夢だった物は全て奴に先を越されてしまった。奴は儂に説教まで残したというのに」

「……俺は、根に入る身です。もし何か相談があれば」

「入つてくれるのか……?」

ダンゾウが弱体化してる……だと!?あかん、60年来の執着対象を目の前で失つてなんかフワフワしてる!原作で疾風伝まで動かなかったのってそういう事かよ!?

「だ、ダンゾウ様しつかり。立場があります」

「フン。儂も心は殺してきた……筈だったが」

「……」

「なあネジ。儂は、ヒルゼンの様になれると思うか?」

「……おそらくは無理です。しかし、三代目だけが火影の理想型ではない。ダンゾウ様はダンゾウ様なりに模索していくしかないのだと思います。一つ違えば火影だったと、三代目も言っていました」

「ラーメンか……ヒルゼンの言つた通りだ。一度くらい誘いに乗つてやれば良かった」

第十三話 葛藤上等

戦いから二日後、風の国は国内で四代目風影の遺体が発見された事を公表し事件の発端は大蛇丸だとして木の葉に無条件降伏を宣言、木の葉もこれを受諾した。指導者を失った両国は互いの里の復興に専念する事で痛み分けとしたのである。

三代目の国葬を終え、上層部はすぐさま次代火影の選出に取りかかったが会議は難航していた。火影は里の要石。彼らは先代の意向や候補者の実績、縁故、人格その他を総合的に判断した上でスポンサーである大名の認可を得、次代を決定する義務を負う。一連の行程はこの急場において既に彼らの頭痛の種であったが、更に話をややこしくしたのは先代——四代目の死没だった。

四代目火影、嘗て”黄色い閃光”と謳われた英雄は12年前に殉職している。12年前のその日は彼の第一子の出産予定日。戦時下においては久方ぶりの吉報だった。当時母体には九尾が宿っており、出産の負担が不測の事態を招かぬ様、里は万全を期していた……しかし。子を庇い、子の母ともども暴走した妖狐の爪に貫かれ……それが英雄の最期だった。里の平定の為、死にゆく英雄は我が子に九尾を託し静かに息を引き取った。残された民衆は半壊した里と一匹の忌み子を前に三代目の復権を望む。三代目は単なる為政者ではなく、万民の心の支えだったのだ。

そしてその三代目すら亡き今、誰が後を継げるといえるだろうか。いわんや代わりをや、である。よしんば復興が叶ったとしても不安定な政権はいつか破滅を招く。本当の意味で里を安定させるなら、稀代の火影とでも言うべき器が必要なのだ。木の葉を支え、また芽吹かせる力。秘術・木遁を有した初代火影に匹敵する稀代の器。議論は二転し三転し、すったもんだの押し合いへし合いもありながら、選ばれたのは三忍千手綱手せんじゆつなでであった。

「なぜ儂ではないのだ！ヒルゼンの後釜など儂しかおらんだろうが！」

「ぶちこわしだよ!!」

対面に座るダンゾウは不服そうに造血丸茶初登場。造血丸を煮出したお茶。を啜った。俺の正式な配属が決まる前、白庵である。何故ここにダンゾウが!?

ちなみに百は奥で匿っている。根に取られたら最後俺がサイレントキリング無音殺人術される。

「儂は託されたのだぞ?それを上役共、『何が目的だ?』とぬかしおつた……!後の世代を育てる為に、儂が稀代の火影となつて里を導く!それの何が不満だと言うのだ。旧時代の遺物どもが、直に言伝を預かった儂をまるで厄介者の様に……けしからん!お前は どう思う!」

「厄介者だと思えます」

「なにを!?大体お前、不安定な時勢に初代の孫娘を据えるなど安直すぎると思わんか?今こそ儂の時代だろ!!」

「なぜ変に捻る……?」

しまった、彼もまたNARUTOの悪役に共通する”全部一人でやる病”の持ち主だった。極左な理想主義と三代目の博愛主義が矛盾してエラー吐いてやがる。機能不全どころか完全誤作動だ。もはや対面に座す男は恥も外聞もない三代目の厄介オタクでしかない。俺の知ってるダンゾウを返せ。やっぱ返すな。

「あの、ダンゾウ様……そもそも何故俺にそんな頭痛がする様な話を?」

「相談に乗ると言ったではないか。それにお前と儂は似ているとも言っただろう。ヒルゼンが」

そればっかかよ。似てねえよ。三代目の見間違いだよ。

とはいえ三代目エ……俺をダンゾウに任せると言つて、本当はダンゾウを俺に任そうつて腹か?……業腹だよ、後世を育てる為にダンゾウ育てなきゃいけないって何のマッチポンプなんだ。それはもう呪いだ。くわばら、くわばらだ。

「まあ、恩返しと思う事にするか……」

「?」

「仕事のスイッチが入ったという話です。怒りのボルテージが上がったという話でもありませんね」

「いかにも仕事に身が入らなさそうな話だな」

「ダンゾウ様。冷静になって考えてみれば、貴方は影として不可欠な要素が二つ欠けている。一つは求心力、もう一つは戦闘能力です」

「求心力？根を創り育ててきた儂がか」

「その根が根つから根暗なのがネツクなのです。おかげでダンゾウ様は知名度が足りない。影として致命的な程影から程遠い。野心は求心力とは違います。初対面で総スカン食らった事をもうお忘れですか？」

「……あれはお前のせいではなかったか？」

「このスカポンタン」

「あ？」

「噛みました。甘んじて受けましようと言ったのです」

「お前、あまり儂を見くびっていると本当に首が飛ぶぞ？」

「打ち首つちやう訳ですね」

「少しは怖がれ……お前、流星に生首では生きられんのよな？」

「なるほど。叩つきられた状態でも減らず口を叩つけるかという問ですな？」

「そんな奇怪な問では断じてないが、その分だと首を断じられた所で飄々と語り続けそうではあるな……」

「いやいや無理ですって。断じて無理です。それが出来たらいいよ妖怪ですよ。飄々どころかひゅーどろろです」

「なぜお前はそうも上手く言おうとして失敗するのだ……。待てよ、戦闘能力だと？儂は旧大戦を生き延びヒルゼンと影の座を争ったのだぞ」

「しかし大蛇丸には負けました。綱手様と同じ三忍の」

「あんなものを人と同じにするな」

「急に常識的な事言わないで下さいよ。びっくりするなあ」

「……一つ言いたいのだが、儂はお前ほど出鱈目では」

「じゃあ大蛇丸って何ですかね!? エリマキトカゲかな!? エリマキトカ

ゲ丸なのかな!？」

「勢いで誤魔化すな!ていうか誰だ、そんな奴いてたまるか!」

「こほん。とにかく、今や三忍の実力は舌を巻くほどです。エリマキトカゲ丸の様に」

「その名を二度と出すな。さも無くばお前の舌を切る。……しかしネジよ、儂とてやられるばかりではないのだぞ?儂の右腕がその証左。これは奴から得た中で最大級の戦利品だ」

「誇らしげに呪物を撫でないで下さい。大体そういう絶望的な趣味してるから人気取りがお上手なんじゃないですか?」

「嫌味を言うな。そしてどうせならもっと上手く言え。だいたい何で知っておるんだお前は。これ根のトップシークレットだぞ」

「眼が良いのでね。雑食のダンゾウ様と違って俺はこの眼一筋なんです」

「お前も似た様な者ではないか?」

「なにを!？」

ダンゾウと問答をしていると見知った顔が現れた。中忍試験一次の夜に根の勧誘に来た使者である。おい白庵を暗部の集会所みたいに使うな。使者は威嚇の白眼には目もくれずダンゾウの前に跪いた。「緊急の御報告に参りました。市街で上忍数名が”暁”なる侵入者二名と交戦し軽症。侵入者は逃走。御身に招集がかけられています。急ぎ火影屋敷まで」

こういう時ダンゾウの判断は早い。俺は使者と共に消えたダンゾウに一拍遅れる形で戦闘用の装備を手に取り白庵から跳び出した。方向はダンゾウの真逆。里の外である。

”暁”は世界の転覆と再構築を目的とするNARUTO最大の秘密結社。構成メンバーは殆どが国際手配された抜け忍で昔は大蛇丸も在籍していた。それだけに内部は多様性を過学習させた様なキラバばかりというNARUTOお得意の、もといお特異の伏魔殿と化し

ている。そもそもが打たれた出る杭の跳ねつ返り集団なせいや個々の荒々しいキャラメイクとは対照的に仲間に対する尊敬の念や情や細かな気遣いを感じさせる間柄であり、チーム全体の読者人気も高い。それなりに居心地の良さそうな抜け忍達が差別の蔓延る忍界の脅威になるという構図の皮肉つぷりは読者全員イタチ顔である。

当面の彼らの目的は尾獣の収集。我愛羅の一尾からナルトの九尾まで九体存在するチャクラの怪物を全て手中に収める事である。

彼らの目標物は今朝、三忍の自来也に連れられて現在忍を止め外に出ている綱手を探しに里を出ている。侵入者の報告が昼時だった事を加味しても、早ければ日中にはナルトと侵入者がバッティングする計算になる。無論追跡は白眼の十八番、抜かりはない。イタチエ……古傷のツケは払って貰うぜ。

心の傷が疼くぜ！疼きすぎて武者震いするぜ！

イタチは木の葉の近くの街道沿いをしばらく進んだ宿場町で隠密行動をとっていた。同地にいるナルトと自来也の裏をかく為だ。黒の外套に赤い雲の意匠を施した装束は暁特有。パリコレ並のお洒落着である。俺はイタチに気付かれない距離で後ろを取った。

でもどうすつか。今の俺がイタチと戦っても勝ち目はない。切り札切るなら話し合いがマスト。かといって何年も前に殺した相手がひよっこり現れて冷静な話し合いになる筈はない。話し合いに応じる義理もない。そもそもイタチは一人俺に背を向けている。話し合いは対面でする物だ。とくれば……俺はテンテンに作って貰った巻物から”断刀・首切り包丁”を取り、チャクラによる肉体活性を行う。俺の解答は至ってシンプル。殺してでも冷静にする。

「イタチイイイ!!」

俺渾身の儀典の一太刀。背後からの急襲。電光石火の一撃はしかし乱入した侵入者の片割れに容易く止められてしまう。千鳥に横から対応した男の速度に俺は目を見張った。それだけではない。男は青肌。鮫顔。断刀に並ぶ太刀を備え、それを超える巨軀。さらには太刀の先で俺の儀典を止める怪力。全てが規格外の男は俺を見て軽く

嘆息し、顔に似合わず常識的な口調で語りかけてきた。

「これはこれは……かなり短くなっています、霧の首斬り包丁ではありませんか。……後ろからの攻撃といい、看過できませんねえ」

「待て、鬼鮫^{キサメ}」

鬼鮫、と呼ばれた鬼でも鮫でもない男は眼だけでイタチを振り返る。太刀と切り結んだ儀式は千鳥チャクラを失い依然として微動だにしない。まるで吸いつけられている様だ……というのは刀の特性上比喩でもない。

「私の^{だいとう}大刀・鮫肌^{サメハダ}」はチャクラを削る……おイタはいけませんねえ？イタチさんのお知り合いですか？」

「ああ。そいつは日向ネジ。俺の相手だ」

「こんな子供がですか？」

「悔れない」

「可哀想に……」

刀にかかる負荷が和らぐ。どうやら俺の処分先は鮫の餌から九尾の出汁に変わったらしい。や、やめろ！やめろめろめろイタチめろ！やるなら使え！フカヒレ！ボンバイエ！

「俺が可哀想だど!?鮫と人を足して割った様な顔して良く言えたなこの美形半魚人が!!」

「……どういう事ですか？」

「埒があかないな」

鬼鮫の返答を待たずイタチが俺と目を合わせる。写輪眼の色がくると変わる。

「……ここが万華鏡の幻術空間か」

「!!」

上下奥行き感覚が狂う空間で、俺とイタチは再度相対した。ここはイタチの眼が作り出した幻術の世界。俺に破る術はなく、俺を殺す方法はごまんとある。ここでは俺とイタチの力量差はあの日以上に開いている。だが話し合いには相応しい。

「どこでそれを？」

イタチは俺を見つめたまま眉一つ動かさない。

「さあ？まあサスケに危害は加えてない。そこは安心して欲しいな、一族殺しのお兄さん？」

「……お前、ダンゾウの回し者か？」

「おっと、それは酷い誤解だ。全く……ざっけんなよお前エ!? ちとらダンゾウに目エ付けられてから碌な事がねえんだよ! 三代目が死んでからは猶更なあ! お前に解るか!? 大嫌いな程大好きだった男を失って13歳相手に愚痴をする様になった老人がどんなものかお前に解るか!? その相手をしなきゃならない俺の気持が解るか!? 大体大蛇丸が木の葉を襲ったのはお前が”暁”にいた奴と小競り合いなんかしたからだろうが! 謝れよ! 俺に謝れエエ!!」

「え、あ……すまない」

「よし。つまるところ俺は情報通でね……さつき木の葉に来て見なかったか? 元気なサスケ。お前が一族を皆殺してまで守った最愛の弟を。……なぜだと思う?」

しばしの沈黙。これが絶句でない事を祈ろう。多少強引な流れにはなったが、どうやら原作通りサスケの安全確認は済ましていたらしい。ポーカーフェイスは相変わらずだが手応えありだ。

「情報通はいても情報屋がない、と考えるのが妥当だな」

「ご明察。流石の慧眼だ」

「命乞いにしては上出来だが、戯言だな。俺がお前の生死を握っている現状に変わりはない」

「命は乞わない。情報通は俺だけじゃないしね。ただお前にとって俺が有益なら、恩返しさせてやつても良い」

ここは完全なハツタリ。しかし数年前に殺した相手の口から怒涛の勢いで語られる知ってはいけない情報の数々と、それが流出する可能性。怖くないワケねえよなア?

「しかし情報通、お前が俺に協力するメリットは?」

「サスケは可愛い俺の弟子。他には何も」

「視野が狭いな。弟子の為にその敵の片棒かたきを担ぐとは。しかもお前の敵てきでもある」

「ツケはいつか払って貰う。手数料付きでね」

「……全く良い性格をしている」

「上等」

イタチは大仰に嘆息した。

「これは私的な質問だが……日向ネジ。なぜ今も忍をやっている？」

「……うーん、理由を聞かれても困るな。流れでもあったし、自分の為でもあるし、ほどほどに色々な物を背負ったからでもあるし……まとめるなら、お前に殺され損ねたから、かな？」

四

目が醒めると病室だった。イタチの幻術で眠っていたのか……という事はイタチの丸め込みには成功したらしい。あの事件の概要を知る俺を口留めに殺しにくる可能性やその他の不安要素は潰せた様で結構。そもそもおじさん大蛇丸とダンゾウと三角関係になった時の勢いで思いついた策だったが、冷静になってみるとかなり危ない橋だったんじゃないか？ いけない、中忍試験からこっち、どうも俺の中の危険の基準が跳ね上がってる気がする。生存に命を懸ける本末転倒メソッドは俺の人生には不必要だ。認識を改める必要があるな。

九死に一生の後は昔なつかし木ノ葉病院。トラウマの通りならこの後ナルトとヒナタが俺を見舞いに来る筈だが……入ってきたのはテンテンだった。

「なんだお前か」

「なんだとは何よ。ぶっ飛ばして病院送りにするわよ」

「病院はここだろ」

「じゃあぶっ飛ばして実家送り迎えしてあげるわ」

「迎えが来るの？ 病院から？」

「主に精神の」

「重症じゃねーか」

「それはそうと、アンタ知ってる？ 綱手様が来るのよ、綱手様！ アンタんとこのナルトが呼び戻したらしいわ」

イタチに釘を刺した甲斐はあったという事か。

綱手は三忍の紅一点。一部では木の葉で最も強く美しい女とされ、憧れるくノ一も多い。テンテンもその一人である。憧れの人が里に、それも火影になると聞けば同僚を精神病院送りにするのも無理はないだろう。……ここだけの話、他の三忍のスケベジジイとエリマキトカゲ丸の変態コンビよりは真つ当なもの、尊敬される人なのかは疑問に思う。大量の借金抱えて博打やって”伝説のカモ”扱いされるといってどこぞの賭博黙示録より黙示録してる一面が気になつてしょうがない。

「聞いたよ、五代目だろ？弟子入りでも志願してみれば？」

「もちろん！アンタより頼りになりそうだしね」

「病み上がりには酷い事言うなあ」

「寝てただけでしょ」

「文句あつか」

「そーだ、中忍試験の結果も発表だつて。アンタ招集かけられてたわよ？私はただの伝言役。全く羨ましいわ」

「！」

いよいよ俺は根の者になるのか。嫌だな。心底嫌だ。だがこれも百の為、もとい俺の為……てか百を根から守つても再不斬から怒られる火種は残つてるんだよな。折れた断刀……時間経過で保管場所に戻る筈だが、あれを見せて再不斬が穏やかに済ます筈はない。「百を守る為に」とか適当言おうものなら百が暴露話に尾ひれを付けて殺されかねない。正直に言おうものなら単純に殺されかねない。万事休すか。

招集先は火影執務室。ノックし、促されるままに入室するとそこにはナルトとヒナタの姿があった。そしてついこの間まで三代目が使っていた火影椅子には既に新しい主——五代目が座っていた。否、脅威の”106cm”が座っていた。見た事のない質量。感じた事のない重量感。そこには紛れもなく106cmが居たし、まだ三代目の面影が色濃く残る執務室が放つ哀愁を押しつけて106cmが存在した。その殺人的な光景を前に俺は呆然と立ちすくみ——ヒナタ様は呪印

を使った。

「本日お前らと呼んだのは他でもない。私の口から中忍試験の結果を伝える為だ」

一通りのたうち回った俺を一笑すると五代目は本題に入った。ハキハキした口調にヒナタ様を連想して頭痛がする。そしてさつき胸に気を取られて気付かなかったが隣に自来也が立っている。彼は初対面だが、とりあえず目つきが悪い。多分睨まれてる。

「まずうずまきナルト。お前は中忍試験において日向ネジとの試合で敗北したが、その内容は評価に値する。実力は並の中忍以上。文句なしの合格だ！」

よっしやあー!!と跳ねるナルト。中忍にしては落ち着きのない奴だが、木の葉丸やサクラの師匠でもある事を考えると意外に向いているのかもしれない。

「次に日向ヒナタ。お前は先の戦闘で下忍数名を指揮して敵と戦った。本来中忍試験とは部隊長の素質を測る試験。お前の指揮官としての手腕は好評だったぞ。合格だ！」

実力を評価された事に対し手短に礼を言うヒナタ。しっかりとしゃつていうか、こういう所を見る限りこいつは危ない出世街道を進むのだろう。その実一番危ない人なのに。

「最後に日向ネジ。……お前は少々特別な扱いになる」

「はい。解っています」

「そうか……なら説明は要らないな。お前を木の葉暗部”根” 監査用特別上忍に任命する！」

「すみません。やっぱ何も解ってないみたいです」

「っていうか何それ？言葉の並びが不穏すぎるんですけど。まさか”根”を監査する仕事じゃないですよ。きつと植林の管轄とかですよ。いやあ、緑あふれる職場なんて素敵だなあーなんて。」

「……」 根”はダンゾウが統括する暗部養成機関だ」

終わったアアアア!!黒だ!黒づくめの職場だアア!!

「だが実際はほとんど里の組織図の中から独立していて、ダンゾウの一存による独断専行も多かったらしい。そこで今回私の就任に伴っ

て本格的なテコ入れを行う事になった。そこでお前だ。敵を感知する千里眼、展開を先読みする先見の明、打開策を立て戦況を有利に運ぶ大局観……お前は眼が良い。監査官は適任だ。どうやって取り入ったのか知らないが、あのダンゾウも太鼓判だったぞ」

ダンゾウ お前さえ！本当にお前さえ居なければアア!!

「ていうか何で監査対象が太鼓判!?そんなのが監査するの逆に駄目ですよ!!」

「しかしなあ……あれに首輪を付けられるのはお前だけなんだ」

「驚くほど要らない信頼を得ている!？」

「お前は私の直轄でありながら”根”ではダンゾウと同等の権利を持つ特権的な忍となる。これはダンゾウと私の力関係を確定する為の政策でもある。苦しくはあるだろうが、活躍を期待している」

「間接的に俺の殺害を企てないで下さい!”根”による謀殺が決まった様な物じゃないですかそれ!」

「ダンゾウも快諾したんだ。そこまで危惧すべき事でもなかろう」

「無理があるでしょ!ダンゾウが快諾したなんて誰も信じないよ!あの組織絶対そんな上手く出来てないし!」

「じゃあその是正もお前の仕事だ」

「仕事が増えた!？」

「冗談だ。もちろん私もそんな事が起こらないよう細心の注意を払う。……だが覚悟はしておけ」

「覚悟って何!?造血丸より大切な物!？」

「うるせえーのオ」

ずっと黙っていた自来也が口を挟む。

「洒落は小咄が基本だ。お前が暗部如きにやられる訳がねーのオ。隠した所で、お前の実績はとうに並の天才やスパイが成せる範囲を超えている。変な疑いをかけられる前に黙って綱手の管理下に置かれてろのオ」

……既に変な疑いをかけられた痕跡があった。

「解りました……でも条件があります」

「何?」「何だと?」

「今から俺が指定する人を全員中忍にして下さい。合格者が3人は少なすぎる。木の葉崩しでの俺達の活躍は多くの人々の記憶に残っています。三代目ロスの激しい今なら俺達が人々の希望となる事で新体制への変革を導くことが出来る。この環境がなければ監査は一時的な効果しか持たない。強引な政策に反発したクーデターだって起こりうる。これは“根”を正す為の絶対条件です」

これは賭けだ。一介の忍の枠を超えた要請。しかし里の安定だけが“根”と利害が一致する頼みの綱なのだ。俺はこの賭けに負けるわけにはいかない。綱手は“伝説のカモ”なのだから。

「私相手にそこまで言ったんだ……お前が指定するメンバーはさぞ有能なんだろうな？」

「腕は保証します。この眼にかけて」

「……乗った！」

五代目は大きく膝を打って立ち上がった。

自来也は軽く額を押さえる。

「何を勝手な事を……また上層部がうるさくなるぞ」

「上等だ。責任は取るさ。私は五代目火影なんだからね！」

中人試験合格者名簿

—合格—

ウズマキ ナルト

ヒュウガ ヒナタ

ヒュウガ ネジ

—補欠合格—

ロツク リー

テンテン

イヌヅカ キバ

ウチハ サスケ

ナラ シカマル

—その他の中忍昇格者—

ヒ
ユ
ウ
ガ

モ
モ